
東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

冷えピタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

【Nコード】

N9294V

【作者名】

冷えピタ

【あらすじ】

第1章現代編完結

第2章幻想郷編スタート

男は嘘つきでした。

嘘についてお金を稼ぎ、本音を隠して生きてきました。鬼は正直者でした。

お酒が大好きというだらしない一面もありましたが、嘘が嫌いであつた少女でした。

まったく真逆の二人が、幻想の壁を越えて出会います。

二人の出会いにはどんな意味があるのでしょうか。

プロローグ（前書き）

読んでいただいて恐縮です^^；
駄文ですが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

『いや、国崎さんのおかげで楽に仕事が終わって助かりやしたよ』！

「あれくらい、どうってことないさ」

電話の向こうから聞こえる若い男の声に、淡々と返すスーツに身を包んだ青年。

国崎和真は高級マンションの最上階にある自室で、高級感漂うソファに座りながら、いつもの仕事仲間と電話越しに会話していた。

『一、十、百、千、万……うわ、六千万もありやすぜ！！ 議員って噂通り、たんまり金溜め込んでやがるんですねえ……』

「元々は国民が納めていた税金を不正に横領してやがった金だ。それを俺たちが返して貰っただけだろう？」

『へへへ…違いありやせんね』

「それじゃあ約束通り、報酬はニコニコ（半分ずつ）ってことで。暇な時にでも口座に振りこんでくれ」

『ほんとにニコニコでいいんですかい？ 自分で言っちゃあなんだが、あっしらは今回ほとんど見てるだけでしたからね。あっしらの報酬の減額も覚悟してたんですが……』

「気にするな、お前らは十分役に立ってくれたさ。それに次回からもよろしくってことで」

『…了解しやした。 次もよろしくお願いしやす』

そう言つて相手の男は通話を切つた。

それを確認して和真はソファに深く背中を預けながら大きく息を吐く。

今回の仕事はかなり簡単だった。

標的が議員だと聞いて、念には念を入れて大分前から準備を進めてきたのだが、

取り越し苦労だったようだ。

仲間が作つてくれたパイプを利用して標的の議員に接触。

数ヶ月に渡り親睦を深め、賄賂やら贈り物やらをし続けて、相手が俺のことを信頼してきた辺りで良い儲け話があると持ちかけた。

長年培ってきた話力で相手を乗り気にさせ、自分の代わりに費用を出してくれと頼み込む。

最初こそ悩んでいたようだが、俺に任せて損はさせてこなかったという信用という名の実績があったため、六千万という大金を差し出してくれた。

もちろん、儲け話の内容など嘘っぱちだし、議員が知っている俺の携帯番号も裏ルートで手に入れた、複雑かつ絶対に足がつかない優れものである。

賄賂やらなんやらで三百万ほど使ったが、戻ってくる金はその十倍である。

諸君もすでに分かったと思うが、俺は詐欺師だ。

民間人を狙った詐欺など小遣い稼ぎ程度にしかないので、標的はもっぱら大手企業の重鎮や、国の役人たちである。

俺の家系はシジイの代から詐欺師で、まだ俺がガキの頃から人間の汚さや詐欺のノウハウを叩き込まれた。

おかげで詐欺師たちの間では俺はちよつとした有名人である。今回のように同業者に頼まれて、協力して仕事をすることも少くない。

人を騙すという糞ったれな仕事だが、そのおかげで俺の通帳には二十億を超える金があるのだから笑えない。

それこそもう二度と真つ当な仕事など出来ないだろう。まあ仕事などしなくても遊んで暮らせるだけの金はすでにあるのだが、特にこれといった趣味がない俺が時間を潰すための手段が仕事しかないというだけである。

もう二十代も半ばであるし、そろそろ新しい恋人でも見つけて、こんな仕事から足を洗って身を固めるのも悪くないとは思っているのだが。

いかんせん長続きしないのである。

過去には数人の女性と付き合ったことがあるものの、半年続いた試しがない。

長くて数ヶ月程度、最速では付き合い始めた次の日にこちらから別れ話を持ちかけた程である。

別に付き合ってきた女性がゲテモノ揃いだったというわけではない。ほとんどの女性が美人で、気立てもよく、一緒に居て心地が良い女性ばかりだった。

それでも俺にはどこか、満たされないという気持ちが強かった。

「まさか自分でも気がつかない、特殊な性癖の持ち主じゃないだろうな」

自虐気味に呟いてため息をつく。
すぐに鼻で笑って、ふざけた妄想を頭の中から追い出した。

「さて、そろそろ寝る準備でも——ッ!？」

寝室に向かおうと廊下に顔を向けた時、照明の明かりの無い、夜の闇に包まれている廊下に何者かが佇んでいるような気配を感じた。

一体誰が？

扉には鍵が何重にも掛けていてセキュリティは万全だったはず……。まさかベランダから？それこそあり得ない、大体ここは十八階だぞ!？

正体の分からない侵入者に対して焦りが募っていく。

背中をすーっと冷や汗が伝う。

静かに懷に忍ばせておいたピストルに手を伸ばしかけた、その時――

「あれ……!？　ここ、どこ？　たしか、霊夢のこの宴会に居たはずなのに……」

幼さが残る鈴のような声が暗い廊下から響いてきた。

足音がだんだんとこちらに近づいてきて、窓から差し込む月明かりでその姿が露わになった。

侵入者に警戒しながらも、相手の容姿を確認した。

オレンジ色の髪に、袖のない奇抜な服装。

腰のあたりには瓢箪がぶら下がっていて、なんとも滑稽に見える。

身長は…低い。かなり低い。というか子供だ。
俺の身長は、平均的な男性の身長より若干低いものの、別に気になるほどでもない。

奇妙な服装をした少女だが、中でも一番目を引くのが…

「……………角？」

少女の頭から伸びる、二本の長い角だった。

嘘について生きる人間、

国崎和真。

酒を飲むのが大好きで、嘘が嫌いな妖怪、

伊吹萃香。

正反対の二人の唐突な出会いだった——。

プロローグ（後書き）

というわけでプロローグでした。

いかがでしたでしょうか？

ちなみに続くかどうかはわかりませんw

思いつきで書いてみたもので…（汗）

もし作者のテンションが上がれば続きを書かせていただくかもしれませんが（苦笑）

誤字・脱字がありましたらご報告お願いします。

感想とかいただけると泣いて喜びます。

では縁がありましたらまたお会いしましょう。

第一話（前書き）

とりあえず書いたので更新！。

駄文ですね、そして文章が短いかもしれませんが。

一応三人称を基本にしていますが、まだまだバラつきがあるかもしれません。

第一話

「……ガキ、どこから俺の家に入った。不法侵入で警察に突き出してやるつか？」

「ガキ！？ 失礼な人間だね！！ 私には伊吹萃香って名前がちゃんとあるんだから！」

身長差から見下ろして告げる和真に、歯をむき出して睨み付けるように抗議する萃香。

「お前の名前なんざどうだっていい。さっさと質問に答えろ、ガキ」

「ガキガキガキって…人間風情が鬼に喧嘩を売ってただで済むと思ってるのかい？」

和真は聞き慣れない単語を聞いて眉を顰めた。

「鬼？……ああ、そのコスプレのことか」

そう言つて少女の頭から生える二本の捻れた角を眺める。

「こすぷれ？ よく分かんないけど、私だってなんでこんな所に自分が居るのか理解できてないんだ」

困ったような表情で部屋を見渡す萃香の様子を見て、少なくとも嘘はついていないようだ判断する。

「じゃあなんだ。神隠しにでもあつたつてのか？」

「神の仕業つてのよりは、スキマ妖怪の仕業っぽいけど、ここにくる前にスキマを潜った覚えはないし……」

なにやら考え始めた萃香を置いて、小さくため息をついた。

時計を見ると深夜二時を回っていた。

丑三つ時に鬼を名乗る少女と会おうというのは、なかなか風流なものである。

「…仕方ない。今日はもう遅いから泊めてやる。朝になったらとっとと帰れ」

ぶっきらぼうに吐き捨てるように告げた和真の顔を見て、きょとんとした表情を見せた萃香だったが、次第にニコニコと笑いはじめる。

「いやあ、悪いね。てつきり今日は野宿になるかも知れない思つて悩んでいたところさ。その恩義に報いてさつき私をガキ呼ばわりしたことは許してあげるよ」

「……………そりゃどうも」

今日一番になるであろう大きなため息をついて、今度こそ眠ろうと

寝室に向かおうとした和真を萃香が呼び止める。

「ちょっと待ちなよ」

「……なんだ？」

「私はさっきまで宴会で飲んだんだけどね、途中でこっちに来たからまだ飲み足りないのさ。付き合ってはくれないかい？」

言われてみれば萃香の頬はうつすらと赤くなっており、口からは酒独特の匂いが漂ってくる。

「俺はもう寝たいのだが」

「なんだい、案外甲斐性のない男だね」

その言葉に露骨にイラツとした表情を見せる。

やはりさつさと追い出したほうがよかったかと後悔する和真を置いて、当の本人は勝手に食器棚を漁ってグラスを二つテーブルに置く。腰につけていた瓢箪から二つのグラスに酒を注ぎ、自分の分の酒を一気に飲み干した。

その様子を眺めていた和真は、もうどうにでもなれと自分も椅子に腰掛け、少女が注いでくれた酒の入ったグラスを傾けた。途端、和真は酒の味に眉をしかめる。

「かなり強い酒だな……」

「そうかい？ 私にとっちゃそれが普通だけど」

そうしている間にも萃香は自分のグラスに酒を注ぎ、二杯三杯と飲み干していく。

「こんなキツイ酒飲み続けてたらすぐに潰れちまう」

そんな和真の様子を見て、情けない、とけらけら笑う萃香を無視して席を立つ。

あんなに強い酒をよく水のように飲めるものだ、と呆れながら和真は棚からワインを取り出した。

かなりの年代物のワインで、これ一本で時価数十万円はする。

今取り出したワインのほかにも、かなりの量のワインが並べられているが、皆同じように高額のものばかりだ。

無駄に貯金があるからこそ出来る贅沢である。

別に日本酒が嫌いというわけではないが、どちらかと言えばやはりワインのほうが好きである。

空いたグラスにワインを注ぎ、香りを楽しみながらゆっくりと味わう。

それをじっと見つめる萃香に気がついた和真は、そちらに目を向けた。

「なあなあ、それも酒なのか？　ずいぶん綺麗な色をしているけど」

確かにグラスに注がれた赤ワインは無色透明な日本酒に比べて綺麗な色をしているだろう。

だがワインの存在くらい子供でも知ってそうなものだが、そこまで珍しいのだろうか。

興味深々と言った様子でワインを見つめる萃香にやれやれと首を振る。

「言つとくが、やらんからな」

「な、なんだよー！ケチー！」

ぷんぷんと音が聞こえてきそうなくらい不機嫌になりながら、萃香は自分の酒をあおった。

今まで黙って見ていたが、小学校に通っているくらいの小さな少女が、自分でもかなり強いと思うような酒を水のように飲む姿はかなりショッキングな光景だ。

別に未成年が酒を飲むな、などと言うつもりはないが、あまりにも幼い外見が酒と不釣り合いで、柄にもなく心配してしまう。

俺らしくないな、と和真は一瞬だけ自分の中で湧いた温い感情を押し殺して、黙々と酒を飲んでいた萃香に声をかけた。

「そう言えば、お前宴会に居たって言ってたが、どこの宴会場だ？」

「博霊神社だよ、あそこには面白いやつがいっぱい集まるからさー」

「ハクレイ神社……？ そんな名前の神社、この町にないぞ。 けっこう遠くから来たのか？ 家はどこにある？」

「幻想郷にある妖怪の山だよ」

そこまで言われてようやく和真は自分がかかわれていたことに気がついた。

「……………お前からまともな答えが返ってくると思っていた俺が馬鹿だったか」

「ほえ？　なんか言った？」

「……………なんでもない」

結局、二人は朝日が登るまで酒を飲み続けた。

第一話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

更新するかわからないと言った割には早く投稿することができました。

ちなみに原作キャラはしばらく萃香しか出しません。というか最後まで萃香しか出ないと思います。

あえて言おう、萃香だけ居ればいいと！！

誤字・脱字がありましたらご報告お願いします。

ご感想も受付中です。

第二話（前書き）

今回は和真視点です。

なんかいろいろと不自然な箇所が多いかもしれない回です。

第二話

部屋を包む熱気で和真は目を覚ます。

夏の暑さによって蒸し風呂と化した部屋で、二日酔いで痛む頭を持ち上げた。

朝まで酒を飲んでいた挙げ句酔いつぶれて、リビングで寝てしまっていたようだ。

辺りを見回すと、空になったワインの瓶が散乱している。

我ながらよく飲んだものだ、と和真は苦笑した。

いつも和真が座っているソファーには、タオルにくるまって眠っている角を生やした少女の姿がある。

昨夜、和真の部屋に突如として現れたコスプレ少女である。

ガンガンと鳴り響く頭を無理やり酷使して、昨夜二人で飲んでいたときの記憶を思い出す。

酔いが進み、互いに自己紹介をした後、萃香の故郷の話になった。

萃香曰く、妖怪と人間が共存している場所の名前を幻想郷と言っているらしい。

世界から拒絶された幻想達が集う最後の楽園。
なるほど、幻想郷とはよく言ったものだ。

大方、頭がお花畑になってしまった少女の妄言の類には違いないのだが、なかなか興味深い話だった。

妖怪と人、どちらかが絶滅してしまわないように互いのパワーバランスを管理する管理者の存在。

幻想郷で起こる数々の異変を解決するという博霊の巫女。

他にも天狗やら、河童やら、萃香のような鬼やらと、様々な種類の妖怪や人間がいるらしい。

信憑性の欠片もない与太話ではあったものの、丁度良い酒の肴になった。

ファンタジーなどに興味を持つ歳でもないのだが、まるで見てきたかのように話す萃香の言葉に興味を惹かれたからだ。

思考を戻し、再び目の前に眠る萃香に視点を合わせる。

「おい、起きろガキ」

気持ち良さそうに眠る萃香の肩を揺らすものの、起きる気配はない。ため息をつきながら、萃香がくるまっているタオルごと思い切りソファーから床に引きずりおろした。

ガンッ、という鈍い音が響く。

どうやら落ちた拍子に床に頭をぶつけたらしく、涙目になりながら起き上がる萃香。

「いったあゝ…なにするんだよー……」

「せつかく起こしてやったのに、おとなしく起きなかったお前が悪い」

未だに頭をさすっている萃香を一瞥して、テレビの電源をつける。
適当な番組にチャンネルを合わせた後、洗面台に向かう。
冷たい水で顔を洗い、ようやくはつきりと目が覚めた。

……まだ頭は痛い。

リビングに戻ると、萃香はコップに注いだ酒を飲みながら（まだ飲むのか……）昼のバラエティ番組を見ていた。

なにが面白いのかは分からんが、しきりにテレビに映っている某グラサン司会者の発言に答えている。

『みなさん夏休みをどう過ごしてらっしゃいますか？』

「私はねー！お酒飲んだりー、お酒飲んだり、えつと他には……
お酒飲んだりしてる！」

テレビ相手に無い胸を張って自慢する萃香。

「なに馬鹿なことやってんだ、さつさと昼飯にするぞ」

テレビに夢中だった萃香を眺めながらも、フライパンを動かしながらさつさとチャーハンを作り始める。

特別料理が得意というわけではないが、チャーハンにはちよつとしたこだわりがある。

さすがに中華料理店で出されるような本格的なチャーハンには適わないものの、不器用である俺の唯一の得意料理と言っても過言ではない。

炒め終わった二人前のチャーハンを皿に盛り付け、テーブルに置く。すいかは初めて食べるチャーハンに感激した様子で、食事中は終始ハイテンションだった。

「こんなにおいしい料理を作れるなんて、もしかして和真は料理人かなにかなの？」

「そのくらいなら誰でも作れるっつの」

とは言うものの、自分でもこだわりがあるチャーハンを褒められたのは結構嬉しかったりする。

もちろん表情には出さないが。

今まで付き合ってきた彼女たちの料理の腕は俺より遥かに上だった。そんな彼女らに自分の下手な手料理を振る舞ったことなどあるわけもないし、仕事仲間の男たちと飯を食うときはもっぱら外食だ。

つまるところ、目の前で一心不乱でチャーハンを食べ続ける萃香こそが、唯一俺の飯を食った人物ということになる。

「でも本当においしいよ。和真はいいお嫁さんになれるね」

「黙って食え」

チャーハンを食べ終わり、お茶を飲みながらほっとひと息つく萃香に冷たい声をかける。

「さあ、食い終わったならさっさと出ていけよ」

「あゝ……うん、そうだね……あははは、つい居心地がよくって忘れてたよ。あ、あのさ……よかったら、もうちょっと泊めてくれないかな？」

寂しげな笑みを浮かべながらぼりぼりと頭を掻く萃香。

「親が心配してるだろ。馬鹿なこと言っでないで早く帰れ」

「それなんだけどね……帰り方が分かんないんだよ」

ここまで来たくせに帰り方が分からないとはどういう了見なのか。また俺をからかっているのではないかと疑ってみるものの、明らかに困ったような表情をする萃香が嘘をついているようには思えない。嘘をつき続けて生きてきた俺だからこそ、相手が嘘を言っているかどうか小さな違和感ではつきりと分かる。

それを微塵も感じさせないところを見ると、やはり嘘はついていないのだろう。

「じゃあとりうえず警察に連れて行くから。あとはそつちで身元確認とか色々やってくれんだろ。これ以上俺のところに居座られても迷惑なだけだしな」

めんどくさそうに吐き捨てる俺の冷たい言葉に、萃香は明らかに落ち込んでいるようだった。

「そつか……そうだよな、うん。ごめんね、迷惑かけるようないと言っちゃって」

「ああ、迷惑だ。　　すげー迷惑だ。　　だからさっさと出る準備してくれ」

「——ッ！」

萃香は目尻に小さく涙を溜めながらも、いそいそと部屋を出る準備を始める。

そりゃそうだろう。萃香くらいの小さな子供が、面と向かって大人から迷惑だから出て行ってくれと言われたことなどないだろうから。

だから、どうしたっていうんだ。

こいつがこれから先どうなるうが、俺の知ったことじゃ——

一瞬だけ、萃香の話の内容を思い出した。

世界から拒絶された幻想。

その幻想に類する“鬼”、伊吹萃香。

もし仮に、そうもし仮にだ。

本当に彼女が世界から拒絶される存在だったとしたら。

ここから出て行った後、彼女は——萃香はどうなるのだろうか。

「あ、あの……準備できたよ」

目を赤く腫らしているところを見ると、俺が見ていない隙に静かに泣いていたのであろう。

昨日飲んでいた酒の入った瓢箪を腰に添えて、萃香は俺の前に立っていた。

というより彼女にはこの瓢箪以外に、さして荷物などなかった。身の着一つで、彼女を拒絶した世界に放り出されるのだ。

「せ、せめてもう一日だけでも、ここに泊めてくれないかな………
…？ 下手だけど料理もできるし、掃除もするよ！ 洗濯も、買い物も………だから、お願い、お願いします………っ」

最後のチャンスとばかりに、再度俺に頼み込んでくる萃香。

また先ほどと同じように冷たい言葉で拒絶されると分かっている、
縋る相手が他に居ないのだ。

ようやく合点がいった。

彼女は本当に、世間一般で言うところの“鬼”なのだろう。

無限のように酒が出続ける摩訶不思議な瓢箪。

あれも萃香が鬼だという証拠の一つだし、何よりもあの角だ。

萃香が寝ている間に少しでも触ってみたのだが、抜ける気配どころ
か生き物独特の温かさが手のひらに伝わってきたのだ。

もしも自分が鬼だということがバレてしまえば、帰り方が一向に分
からない状態で敵だらけの世界に一人ぼっちになってしまう。

殺されてしまうこと以前に、この世界でたった一人ということのほ
うが、彼女にとって何よりも恐ろしいのだろう。

だから必死に、ほんの小さな繋がりを持つ俺に縋ってくるのだ。

人間は信用できない。いつ裏切るともしれない。

でも目の前の人間なら？ 一晩とは言え、酒を酌み交わした仲の人
間なら？

そんな想いがひしひしと伝わってきた。

傍から見れば馬鹿げているとしか言えないだろう。

出会って一日も経っていない人間に縋ろうというのだから。

自分でもわかっているのだろう。

それでもなお、目の前の人間をひたむきに信じる萃香に向けて――

「さっさと行くぞ、馬鹿ガキ」

いつもと変わらない、冷たい声が投げつけられた。

「……………うん」

萃香は絶望を表情にありありと浮かべて、消え入るような声で呟いた。

もう味方は居ない。
何人の人間を殺し、何度傷つきながら、どれだけの時間を一人ぼっちで居なくてはならないのだろうか。

そんな想いが、萃香を襲った――その瞬間

目の前の人間が大きいため息をつく音が彼女の耳に届いた。

「はあ……早くその瓢箪部屋に置いてこい。瓢箪持ったガキなんかと二人で歩いてたりなんかしたら、俺が周りから変な目で見られるだろうが」

「――え？」

「さっさとお前の服買いに行くぞ。いつまでもその服一枚で居るつもりか？ 何度も乾燥機回さなきゃなんなくなるだろうが。それに、新しい布団やら歯ブラシやらも買わないとな」

ようやく萃香は俺が言った言葉の意味を理解したようだった。

無意識に流れ出る涙をぼろぼろと零しながら、何度も必死に頷く。

「うんっ！うんっ、うんっ！」

「……………なに泣いてんだか」

その場にしゃがみ込んで、ポケットから取り出したハンカチで萃香の涙を拭ってやる。

涙を拭いてやっているっていうのに、当の本人はさらに大量の涙を流し始めた。

嗚咽を上げながら、何やら必死に礼を言おうとしている。

「ありが……………と、ありが……………」

「分かった、分かったから」

突然俺の胸目がけてタツクルをかましてくる萃香。

「ぐおっ！！？」

あまりの衝撃で心臓が止まりかけた。

こんな小さな体のどこにこんな力があつたのだろうか。

そのまま俺のスーツを涙でびしょびしょに濡らす萃香を見て、小さく、でも今までとはどこか違うため息をつくのだった。

—— ジイさん、オヤジ、うるさい同居人が一人増えました。

第二話（後書き）

どうでしたか？

一応当初考えてたイベントは半分ほど消化できました。

次回からはまたほのぼのに戻ります。

第三話（前書き）

いつのまにやらPVが2000件超えてました。

こんな駄文を大勢の人に見られていると思うと、キーボードを打つ手が震えてきますがなんとか頑張って書き続けたいと思います。

第三話

家族連れで賑わう郊外のショッピングモールに、周りからじろじろと注目されている一組の男女の姿があった。

男の方は、スーツ姿で黒眼黒髪の平凡な顔立ち。どこにでも居るような風貌をしているが、極悪人のような目つきの悪さで、殺人を犯したと言われれば納得してしまいそうになる。

もう一方の女……と呼ぶにはいささか難しい小さな少女のほうは、隣を歩く男と比べてもかなり奇抜な格好をしていた。

日本人離れたオレンジ色の髪に、袖の干切れたような服。

そして何より、少女の頭についている二本の角のようなアクセサリが否応無しに目立っていた。

二人の様子は恋人同士というには歳が離れすぎているように見受けられるし、兄妹にしては二人の顔立ちはあまり似ていなかった。

角のアクセサリをつけた少女はきよるきよると辺りを見渡して、初めて見るであろう風景に興味深々といった感じだ。

男はというと、自分たちを見つめる野次馬たちを鋭い目つきで睨み返している。

傍から見ただけで恐ろしい目つきだというのに、その目で真正面から睨みつけられた野次馬たちは慌てて目を逸らして我先にとそこから遠ざかっていく。

野次馬が散っていったのを確認すると、スーツ姿の男、国崎和真は、せわしなく視線を動かし続ける少女、伊吹萃香に声をかけた。

「瓢箪より先に、お前のその角をどうにかしなくちゃならなかったな。注目されるとは分かってたが、やっぱり我慢ならん」

「む、鬼の誇りである角を邪険にするとはいいい度胸だね」

「埃か。邪魔にしかないという点では確かにその通りだな」

「字が違っじゃないのさ！」

二人の当初の目的だった洋服売り場に到着する。

今日は特に自分の服を买买つもりもないので、和真は紳士服のコーナーを一瞥もせずにとんと二人して婦人服のコーナーに向かう。

萃香はこれほどたくさんの服が売られている光景を見るのが初めてだったらしく、その迫力に圧倒されているようだ。

「う、ここに置いてあるのが全部服なのかい……？」

「ああ、そうだが？別にこんな安物しか置いてない店で遠慮はいらんから、好きなの探してこいよ」

「とは言っても、外の世界でどんな服装が普通なのか分かんないよ」

「む……それもそうだな」

近くで服を並べている従業員らしき女性に声をかける。

「こいつに合う服を適当に見繕ってやってくれ」

「かしこまりました」

営業スマイルを浮かべながら、戸惑う萃香を連れて、女性はささと服を選んで萃香に手渡していく。

そのまま試着室にズルズルと連れて行かれる萃香は、売られていく子牛のような目で和真を見つめていた。

そんな萃香の眼差しとは裏腹に、和真はさつさと休憩用のベンチに腰掛けて大きなあくびをしていたのだった。

数分後、ベンチでうつらうつらと船を漕いでいた和真だったが、目の前に人が立つ気配がして顔を上げる。

そこには涼しげな純白のワンピースに身を包んでいる萃香が、少し恥ずかしそうな表情で立っていた。

見た目が幼いこともあり、少々子供っぽいであろうその服装も妙に萃香に似合っていた。

先ほどの奇抜な服装とは一変して、清楚というイメージが浮かぶ。

「えっと……どう、かな？ 似合ってる？」

「あー、似合ってるんじゃないか？ 色も涼しげでいいな」

もじもじと手を絡めて上目遣いで和真を見つめる萃香に、少しだけ視線を逸らしながら投げやりな様子で声をかける。

言い方には多少棘があるものの、彼にしては珍しく、素直に相手を褒めている。

それを聞いた萃香は、ぱあっと笑顔を浮かべて、萃香の後ろでニコニコと微笑んでいる従業員の女性に顔を向ける。

「千恵が選んでくれた服、似合ってるって褒められたよ！ ありがとうね！」

「どういたしまして」

微笑みながら、萃香の頭を優しく撫でる知恵と呼ばれた女性に和真も小さく頭を下げる。

余程嬉しかったのか、鼻歌まで歌い始める萃香に小さく苦笑して、和真はレジへと向かった。

支払いの際、ゴールドカードを提示した和真にレジの従業員が目を見開いて驚いていたのはまた別の話である。

その後、萃香用の花柄の布団を購入した二人は、オレンジ色に染まる空の下、人気もまばらな帰り道をゆつくりと歩いていた。

今日一日いろいろあつて流石に疲れたのか、萃香は和真の背中で気持ちよさそうに寝息を立てている。

おかげで両手が塞がってしまい、購入した服や布団は家まで郵送してもらったことにした。

「つくづく迷惑かけてくるガキだな……どっかその辺に捨てて帰ろうか」

そうは言ってみるものの、昼過ぎに見た萃香の涙を流す姿を思い出した和真は、うつ、と息を詰まらせる。

「……………まあ、また泣かれても面倒だしな」

根では人一倍お人好しである彼がそんなことを出来るはずもなく、流石に痺れてきた腕をなるべく意識しないようにしながら、洪々と足を進めるのだった。

第三話（後書き）

鬼と一緒に買いものでした。

主人公の嘘つき属性が出てないじゃん！って思ってる読者の方ゴメンナサイ。

後々ちゃんと出てきますのでご勘弁を…… ^^ ；

誤字・脱字等ありましたらご報告ください。

みなさまからのご感想お待ちしております！

第四話（前書き）

ユニーク1000突破!!

嬉しすぎます、みなさんほんとうにありがとうございます！

第四話

和真の住んでいるマンションのロビーに着くと、背中で寝息を立てている萃香に声をかける。

「ほら、着いたぞ。 さっさと起きて自分の足で歩け」

「ふぁ……………うん、分かった」

まだしっかりと頭が働いていないのか、ふらふらとした危なっかしい足取りで歩き始める萃香。

エレベーターに乗り込んで和真の部屋がある階のボタンを押す。エレベーターが動き始めると、萃香は和真の足に寄りかかるようにして、また船を漕ぎ始める。

そんな萃香の額目がけて強めのデコピンをする。

「痛っ！？ なにするのさ！」

「こんなところでまた寝るやつがあるか」

「うつっ……………」

額を押さえて涙目で睨む萃香を尻目に、目標の階へと到達したエレ

ベーターから降りる和真。

その後ろを慌てて追いかける萃香だが、ふと視線を感じて後ろの通路を振り返るが、そこには誰も居なかった。

「……………」

「なにしてんだ？ さつさと入らないと鍵閉めるぞ」

部屋の扉から顔を出してこちらに声をかける和真。

萃香は先ほどの視線を不思議に思いながらも、小走りで和真の部屋へと滑り込んだのだった。

「おいガキ、飯の前に風呂入っとけよ」

「ふろ……？ ああ、湯あみのことね。妖怪はそんなもん入らないよ」

「妖怪とか人とか関係あるか。 お前ちょっと汗臭いぞ」

「う、嘘!？」

慌てて自分の体の匂いを嗅ぐが、確かに少し汗臭い。

妖怪は通常、自分の身に纏う妖力で汚れや匂いなどから身を守っているために湯あみなど自分の体をケアする行為は必要としない。

だが外の世界に来て、自分の体から妖力の類が見られないことに萃香は気づいたのだった。

「いいからさっさと入れ。 シャンプーとかの使い方は分かるか？」

「い、いや……わかんない」

「……………仕方ないな」

ため息をついて萃香へと近づいていく和真。

そしてひょいっと萃香を脇に担ぐと、ずんずんと風呂へ向かっていく。

「ちょ、ちょっとなにをするのさ!？」

「うるさい、いちいち説明すんのも面倒だから。一緒に入れば万事解決だ」

「一緒に！？ 嫁入り前の娘と裸で風呂に入るなんてどういう感性してるんだい！」

「ああ……？ ガキの裸なんかいちいち気にしないから安心しろ」

「あ、あたしが気にするんだよ！」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ萃香を無視して脱衣所のドアを閉める。

そして何の躊躇いもなく自分の服を脱いで素っ裸になると、萃香の服を脱がしにかかる。

「か、和真！ 前隠して、前！ って、無表情であたしの服を脱がそうとするんじゃないよ！ ちょ、ちょっと！！ ぎゃー変態！ 変態だー！！」

「うるさい」

さっさと萃香の服を剥ぎ取ると、和真は一足先にシャワーを浴びる。

和真がゴシゴシと体や髪を洗ってる間も、萃香は風呂場に来ようとはせず、真っ赤な顔で脱衣所から顔だけを出してこちらを伺っている。

体についた泡を流すと、湯船に一気に肩まで浸かって深く息を吐く。

「くうああゝ……………極楽だ」

しばらく天井を見つめていたが、ふと視線を未だに脱衣所に居る萃香へと向ける。

「なにしてんだ、さっさと入らないと風邪引くぞ」

妖怪が風邪など引くことはないのだが、妖力の無い今の萃香では分らない。

観念したようにおずおずと風呂場に入り、恐る恐る湯船に足をつける。

「……………」

「風呂に浸かるだけでどんだけ真剣な表情してんだよ」

小さく苦笑して、まだ膝すら湯に入り切れていない萃香を持ち上げて一気に風呂へと浸からせる。

「ひゃっ!?!」

驚いたような声を上げる萃香。

初めて入る風呂の感触に混乱していたようだったが、次第に落ち着いていき、今では和真の膝の上にちょこんと座っている。

「ふう……初めて入ったけど、なかなかいいもんだね。人間はいつもこんないいモノに入ってるのかい？ 妖怪の山にも作ろうかな」

「全員が全員どうかは知らないが、まあ普通はそうだろうな。妖怪の山ってそこには風呂がないのか……汗臭そう」

学生の頃に嗅いだ剣道場の更衣室の汗臭い匂いを思い出してうんざりとする。

「そつえばさ、和真」

「なんだ？」

和真の胸に頭を乗せて湯船に浸かっていた萃香が、ひょこっところちらへ顔を向ける。

「和真はどんな仕事してるんだ？ 幻想郷の人間は畑仕事とか、商

人だったりとかが普通だったけど、外の世界の仕事も似たようなものなのかい？」

「商人はともかく、畑仕事が普通ってことはないな。たぶん畑仕事をしてる人間はこっちでは一割にも満たないと思う」

「じゃあどうやって作物を育ててるのさ？ 見たところ、幻想郷と人間の数が大違いだ。こんなにたくさんの人間の食い分をどうやって賄ってるのさ」

「ほとんど海外からの輸入に頼ってるな。ほかの国との貿易がなくなったらこの国は間違いなく亡ぶ」

「情けない話だねえ」

「まあ、な……その分、技術力ではかなりのレベルを誇ってると思うぞ」

「河童が聞いたら喜んで飛び跳ねそうだね」

河童……？ 河童と言ったら川で相撲してるかキュウリ食ってるイメージしかないのだが。

そんなことを考えつつも和真は先ほどの萃香の質問に答えることにした。

「俺の仕事の話だったな。まあ、あれだ。悪いやつをこらしめてお金を稼いでるんだ」

「へえ、靈夢みたいな仕事かな。まあ靈夢は万年貧乏だけど」

「靈夢……博靈の巫女だったっけか。流石に俺は妖怪退治なんかできないけどな。もっぱら相手は人間だよ、どいつもこいつも糞みたいな外道ばかりさ。……まあ、その外道のやつらから奪った汚い金で生きてる俺も糞みたいな人間だが」

最後の部分は呟くように言ったため、萃香は聞き取れなかったように首を傾げている。

「人に嘘ついて金を得ている糞みたいな職業もあるってことだよ」

「ふん……あたしは嘘つきは大っ嫌いだね。殺してやりたくなるくらい嫌いだよ。そんなやつらをこらしめるのが和真の仕事なんだろう？ 私は尊敬するよ」

花の咲くような笑みを浮かべて和真を見つめる萃香。心から和真を信頼しているであろう、純粋な少女。

そんな萃香の笑顔を見て、和真の胸がチクリと痛んだ。

——いつかこの少女に、自分の本音を言える日が来るのだろうか。

「……………ああ、そうだな。ほら、お前の髪洗ってやるからそこ座れ」

ゴシゴシと後ろから洗われる髪に、気持ちよさそうな声をあげていた萃香だったが、和真が頭に垂らしたシャンプーが目に入った途端に絶叫を上げるのだった。

第四話（後書き）

誤字・脱字ありましたらご報告お願いします。
みなさんからのご感想お待ちしております。

第五話（前書き）

異常に短い上に会話文がないですが、次話へのつながり+αだと思っ
てお許しください^^;;

第五話

和真視点

風呂から上がり、鏡の前で萃香の髪にドライヤーをかけて乾かしてやる。

萃香はドライヤーから吹き出される熱風に驚いていたが、おとなしくされるがままになっている。

女性の長い髪を乾かした経験など持ち合わせていなかったため、壊れ物を扱うように慎重な手つきで乾かしていく。

その後、リビングに戻ると夕飯のおかずを買い忘れていたことに気が付き、でもどっちにしろ萃香のせいで両手が使えなかったあの状況では一緒だった、と自己完結する。

とりあえず有り合わせの材料で何か作ろうと冷蔵庫を開けるものの、ネギや卵、ハムなどが少しあるだけだった。

今からコンビニへ買い出しに出かけてもいいのだが、腹を空かせている萃香を待たせてしまうのも気が引ける。

仕方なしに、今朝作ったチャーハンと同じものを作り始める。

一日に二回もチャーハンを食べるのは流石にどうだろうかと思いつつ、かといって他に手っ取り早く萃香の腹を満たせる方法が思いつかなかったで、文句の一つでも甘んじて受けようと覚悟していたのだが、イスに座って待っている萃香の反応は予想を裏切るものだった。

運ばれてくるチャーハンを見るや否や、その真ん丸な瞳をキラキラと輝かせる萃香。

更には並べていたスプーンを手に取り、鼻歌を歌いながら、空いたグラスをスプーンで叩いて音色を奏でている。

不器用な男が作ったチャーハンをそこまで気に入ってくれたのか、と思わず顔に出そうになる笑みをなんとか押さえつける。

萃香の前にチャーハンを盛った皿を置くと、しきりにスプーンでチャーハンを口に運んで、おいしい、おいしい、と笑顔を見せる。

今度チャーハンの上に刺す旗でも買ってきてやるか、と思いつつ、
自分もチャーハンを食べ始めた。

うん、うまい。

食器を洗い終わり、リビングでくつろいでいた萃香に目を向ける。

腹がいっぱいになって眠たくなったのか、昨日は絶えず飲み続けていた酒の入った瓢箪にも手を付けずに、とろんとした目でぼんやりとテレビを見ている。

そんな萃香の肩をとんとん、と軽く叩いて立ち上げらせ、洗面所で萃香に歯ブラシの使い方を説明する。

刺激の強いミント味の歯磨き粉の味に、露骨に嫌な顔をしながらも、俺に並んで歯ブラシを動かし続ける。

ペッ、と口の中の歯磨き粉を吐き出した萃香に、水をついだコップを手渡し、よくうがいさせる。

俺はコップは使わずに、手で水をくみ、口に含んでペッ、と吐き出した。

目をこしこしと擦る萃香の手を引きながら、寝室に向かう。

あいにく、萃香の布団はまだ届いていないため、萃香を俺のベットに寝かせて自分はリビングのソファで眠ろうとする。

しかしベッドに潜り込んだ萃香は、一向に俺の手をはなそうとしない。

どこかに置いていかれてしまうという不安が、まだ心のどこかに残っているのだろうか。

今朝のことがトラウマになってなければいいが……と内心冷や汗をかきながらも、なんとか萃香の手をはなそうとするもののうまくいかない。

小さくため息をついて、自分もベッドに潜り込んで萃香と向かい合うようにして寝ころぶ。

萃香は俺のシャツの胸元をぎゅっと握りしめ、すやすやと眠りに落ちて行った。

俺自身も今日一日色々あつて体が疲れていたのか、すぐに瞼が重くなってくる。

だるい腕を上げて、眠っている萃香の頭を軽く撫でてやる。

すると気持ちよさそうに身をよじらせながら、俺の胸元に顔を摺り寄せてきた。

（嫁さん貰う前に、子供が出来たみたいだな……）

胸の中で眠る萃香の様子を微笑ましく想いながら、俺は眠気に身を任せた。

第五話（後書き）

誤字・脱字のご報告お願いいたします。
みなさまからのご感想お待ちしております。

第六話（前書き）

急展開ですね。

すいません、お楽しみください。

第六話

味噌汁の良い匂いがリビングに漂う。

和真は黙々と朝食の準備を進めていた。

キッチンに立つ和真の服がくいくいと引っ張られる。

「和真、和真」

「あん？」

見ると、萃香がキラキラと何か期待したような瞳で和真を見つめていた。

恐らく今日の朝食はまだなのか訊ねに来たのだろう。

そう考えた和真は味噌汁をかき混ぜる手を止めずに、横に居る萃香に話しかける。

「腹減ったのか？ もうちょっとで出来るからおとなしく待ってる」

「違う違う！ たしかにお腹は減ったけど、そのことじゃないんだよ」

「……なんだよ？」

すると萃香は人差し指をビシッとリビングにあるテレビに向ける。

そこにはつい先日開園したばかりの遊園地のCMが流れていた。
迫力満点のジェットコースターや、恋人と思しき二人が乗っている
コーヒーカップ。

そして子供たちが気持ちよさそうに泳ぐテーマパークならではの趣
向を凝らした屋外プール。

（今年の夏は海にも行っていないな……）

そんなことを思いながらも、しきりに服を引っ張りつづける萃香へ
と視線を戻す。

「で、なんなんだよ。別にテレビが壊れたわけじゃないみたいだ
けど」

「ゆーえんち！」

突然、大声で叫ぶ萃香に驚いて半歩後ずさる和真。

「……………遊園地が、なんだ？」

「ゆーえんちに行きたいの！連れて行っておくれよ！」

和真がうんざりとした表情で萃香を見る。

「遊園地って……ガキかよ。 いや、お前の見た目からすると確かにその通りなんだが……」

「な、なんとも言えはいさ。 とにかくあたしはあそこに行きたいんだ！ なあ、頼むよ、和真あゝ」

朝一番に面倒な話題を振ってきたな、と舌打ちしそうになる自分を抑えて、和真は小さくため息をついた。

「……行きたいなら一人で行けよ。 こんな暑い日に外に出たくない」

まだ八月も半ばである。

外ではアブラゼミやらミンミンゼミやらが猛暑の中、自分の命を削って糞やかましい音楽を奏でている。

ただでさえ暑いというのに、あの声を聞くだけで体感温度が2、3度は上がるような気がする、とは和真の言である。

「あたしが一人で行けるわけないだろ？ ゆーえんちつてどこまでの道も知らないし、大体一人で行っても面白くないんじゃないかい？」

「……確かに一人で遊園地に行くやつはめったに居ないだろうな」

思い浮かべてみて欲しい。

周囲がカップルや家族連れ、もしくは仲の良い友人たちと一緒に居るというのに、たった一人で黙々とアトラクションに乗り続ける哀れな姿を。

何の罰ゲームだと思ったくなるくらい悲しい光景であることに違いない。

「……さっき届いた荷物の中に昨日買ったお前の服が入ってたろ。

飯食ったらそれに着替えてこい」

和真の言葉に、ぱあっと表情を明るくさせる萃香。

ご機嫌な様子で目玉焼きの乗った皿を運ぶ萃香とは裏腹に、和真は自分はいつからこんなに甘くなったのか、と頭を抱えていた。

多くの客の笑い声が響く昼下がりの遊園地のベンチで、スーツ姿の和真は病人のように顔を青ざめさせていた。

「うつぷ……………。あの糞ガキ……………コーヒーカップを本気で回すやつがあるか……………」

その原因は先ほど萃香と一緒に乗ったコーヒーカップにあった。

初めて乗るアトラクションに興奮していた萃香は、中央の皿を回すと乗っているカップも回ると和真に教えられ、これでもかと言うほどに回し始めたのだ。

あっという間にのどかなはずのコーヒーカップが絶叫マシーンに早変わりである。

嬉々とした表情で皿を回し続ける萃香をなんとか止めようとした和真だが、突如襲い来る猛烈な吐き気にダウンしてしまったのだった。

地獄のような時間が過ぎ、ふらふらとコーヒーカップから立ち上がる和真と、まったく応えていない様子の萃香の姿に周りの客も引いていた。

今は萃香に近くのお店にソフトクリームでも買いに行かせ、和真は休憩用のベンチで激しい吐き気と格闘していたのだった。

「ただいま！ あれ、和真ってばまだ漬れてるの？」

スキップしながら戻ってきた萃香は、先日和真とショッピングモールに出かけて購入した白いワンピースを着ており、手には2人分のソフトクリームを握っていた。

「誰のせいだと思ってるんだ、誰の」

顔を歪めながら萃香から和真は自分のソフトクリームを受け取る。

萃香も和真の横に腰掛け、目を細めながらソフトクリームを美味しそうに食べている。

「ゆーえんちって楽しいね、和真！」

「……………ああ、そうだな」

目の前を行き交う人々の姿をぼんやりと眺めながら、小さく呟く。

（そういえば、遊園地なんていつ以来だろうか。 小学校に入ってからすぐに母親が死んで、それから一度も来てなかった気がする）

昔のことを思い出して妙に寂しげな気分になるが、ふと萃香が自分の顔を見つめていることに気が付いた和真は、萃香へと顔を向ける。

「どうした？ 俺の顔に何かついてるか？」

その言葉に萃香は小さく首を横に振り、そして何やら照れたような笑みを浮かべる。

「いや、和真とこうやって一緒に居られると思うとすごく嬉しいって思うんだ。自分でもなぜだか分かんないけどさ、うん、すごく嬉しい」

「……………そうかよ」

まっすぐな気持ちをぶつけてくる萃香に、和真は顔を背けてしまう。今までこんなに素直に自分の感情をぶつけてくる相手など知らなかったからだ。

人間というのは、いつも腹の中に何かしら邪念を抱えている。

口でいくら取り繕おうと、その気配がひしひしと伝わってくるのだ。

昔付き合った女性の中にもその気配を感じさせる人が居た。

和真が持っている莫大な金が目当てなのか、それとも裏に対するコネが目的だったのかもしれない。

しかし和真の目の前に居る少女からは、まったくその気配が感じられない。

常に自分の本心を目の前の相手に正直に伝える萃香が、和真には眩しく光る太陽のように思えた。

「それで、ずっと和真と一緒に暮らせたらな、って思うようになったんだ。も、もちろん迷惑だっことは知ってるよ！ でも、少しでも長い間、和真と一緒に居たいんだ」

顔を真っ赤にして自分の気持ちを告白する萃香。

そんな萃香を愛おしく想う自分の気持ちに、和真は気づいた。気づいてしまった。

今まで自分の本心を晒したことのない彼が、目の前の少女にだけなら、心を開けるのではないかと。

「あ、あゝ……その、な。 別にお前がずっと居たいって言うなら、俺は構わないぞ。 ガキの一人や二人を養う金くらい、余裕である

んだからな」

その言葉を聞いた萃香が、その表情を驚愕の色に染める。

「ほ、本当に……？ でも、迷惑なんじゃ……」

「たしかに迷惑だが、我慢してやらないこともない。あまり俺に苦勞をかけない、っていう条件付きだが」

萃香は今日一番の笑顔を浮かべ、和真の胸に飛びついた。

そして手に持っていたソフトクリームで和真のスーツを汚し、言った傍から怒られるという愚拳を犯してしまったのはまた別の話。

空が茜色に染まり始め、和真は腕時計を確認する。

午後5時。そろそろ帰らなければまた夕飯の材料を買い忘れてしま
うだろう。

まあ別に外食しても構わないのだが。

「おーい、そろそろ帰るぞ」

目の前を歩いていた萃香の後ろ姿に声をかける。

「えー、もう？ もうちょっと遊んで行こうよー」

「お前今日一日でどれだけアトラクションに乗ったと思ってるんだ。
俺はもう無理だ、内臓が悲鳴を上げてる」

「ぶー、分かったよ……」

少し待ってて、と和真に告げて公衆トイレへと向かう萃香。

やれやれと思いつつ首を鳴らすと、後ろから何者かに声をかけられ
た。

「はじめまして、国崎和真さん」

振り向くと、金髪の若い女性が居た。

和真が今まで生きてきて一度も見たことのないような美人である。
着物のようなものを羽織り、かなり目立つ格好をしているのにも関わらず、周りの人間は女性のほうを見向きもしない。

「国崎和真さん……で、合ってますよね？」

一体そんな女性が自分なんかは何のようなのか、と疑問に思いつつ返事を返す。

「そうですが……どこかでお会いしたことありましたっけ？」

「いえ、私があなたのことを一方的に知っているだけですよ、国崎和真さん」

裏の関係者かと思ったが、女性で自分の素性を知っているような人物は組織には居ないはずだと和真は混乱する。

「はあ。それで、あなたのお名前は？」

「申し遅れました。八雲藍と申します」

（八雲……八雲……やっぱり知らない名前だな）

「その八雲さんが、俺に何の用事ですか？」

八雲藍と名乗った目の前の女性は、萃香が向かった公衆トイレのほうに目を向ける。

「あの子は、あなたにとってどういう存在ですか？」

「あの子、とは？」

和真は十中八九、萃香のことだろうとは分かっている——一応確認する。

「伊吹萃香——かつて人が恐怖した、鬼。忘れ去られた幻想の住人のことです」

和真の体中の鳥肌が立つ。

真剣な目つきで和真を見つめる藍からは、目には見えぬプレッシャーのようなものを感じる。

そして、萃香の素性を知っている見知らぬ女に、和真は一気に警戒心を強めた。

「答えてください、国崎和真さん。伊吹萃香はあなたにとって、
どういう存在なのかを」

和真の頬を一筋の汗が伝う。

対人戦において少なからず自信のある和真を、自然な振る舞いにも
関わらず気配だけで圧倒する藍。

和真は、乾いた唇を小さく開き、震える声で、それでも確かに言い
放つ。

「あいつは——俺の家族だ」

和真の言葉を聞き、今まで微塵も表情を動かさなかった藍が初めて
驚愕という表情を浮かべた。

「家族、ですか？　あの鬼が、あなたの家族だと言っているのですか」

信じられないというような声で呟く藍。

「鬼とか人とか、そんなこと関係ないんだよ。　あいつはあいつだ。伊吹萃香だ。……………違うか？」

震える体にムチを打ちながらも、必死に藍をにらみつける和真。

もしお前が萃香の敵ならば、俺は容赦はしない——そんな想いの籠った和真の眼差しを見て、藍は小さく笑った。

「私はあなたたちの敵になるようなことはありません。　ですが明日、私の主が伊吹萃香を迎えに来ます。　そうすれば、もう二度とあなたと伊吹萃香は会うことは無いでしょう」

それでは、と小さく会釈して藍と名乗った女はスキマのような物の中に消えて行った。

一人残された和真は、無言で茜色に染まり切った空を睨み続けていたのだった。

第六話（後書き）

次話から少しシリアス。
でもやっぱり作者はほのぼのが好きです。

第七話

八雲藍に遊園地で告げられた内容、それは藍の主が萃香を迎えに来るというものだった。

その翌日、和真は萃香の手を引いて和真が住んでいるマンションからさほど遠くない公園に来ていた。

日は昇りきっているが、不思議なことに二人以外に人影は見えない。

何の事情の説明もされずにこの場に連れてこられた萃香は、昨日遊園地で自分がトイレから戻った時から終始無言で眉を顰めている和真に困惑していた。

自分が何か和真を怒らせるようなことをしてしまっただろうか、そう考えてみるものの、遊園地で一緒に居た時の和真は面倒くさそうな表情こそ浮かべていたものの、時々そつと笑みを零すなどの普段の彼と比べても機嫌が良さそうに感じられた。

それなのに何故――？ 萃香が考えを巡らせ始めたその時、公園の中央にある時計台の下で目を瞑ったまま立っていた和真が、ふと顔を上げて公園の入り口を睨みつけた。

その視線を追うように萃香もまた入り口へと目を向け、その瞳を驚きで見開く。

何もない空間からチャックのついた窓のようなものが現れ、そこから日傘を持った女性が現れる。

昨日会った八雲藍と同じ金髪の女性だが、藍を美女というならば、こちらは大人と少女の丁度中間のような顔立ちをした美少女だろう。だがその外見からは似つかわしくない膨大な威圧感がひしひしと伝わってくる。

日傘を差した少女は、こちらを見つめて三日月のような歪な笑みを浮かべた。

「ごきげんよう、国崎和真。……いえ、こうお呼びしたほうがよろしいかしら？ 先祖代々から受け継がれる、悲劇の少年の呪いを背負った不幸な半妖——人狼、国崎和真」

目の前の少女——幻想郷最強の妖怪、八雲紫から告げられた真実に、萃香は呆然と和真を見上げる。

和真は辛そうな表情で唇を噛みしめ、自分を見つめる萃香のほうを見ようとせず、ただ楽しげに微笑む紫に顔を向けていた。

あるところに小さな村がありました。
とても小さな村でしたが、村人たちの仲は良く、平穏な日々が流れていました。

その村に暮らす少年は、小さい頃に両親を病で失いました。

両親を失ったことで塞ぎ込んでいた彼に、村人たちは必死に話しかけました。

はじめは返事すら出来なかった少年に、村人たちは根気よく面倒を見ました。

村人たちの努力のおかげか、次第にその少年にも笑顔が戻り始めます。

返しきれないほどの恩を村人たちから受けた少年は、少しでも村人たちの役に立とうと頑張ります。

まだ二桁にも届いていない年齢の少年が、大人の男たちの間に交じって、汗で視界が滲みながらも必死に畑を耕し、
村の女性たちの間に交じって、不器用な手つきで何度も包丁で手を

切って怪我をしながら料理を作る日々を送り始めました。

健気に頑張る少年を村人たちは温かく見守っていました。

そして少年も、自分が少しずつでも村のみんなに恩を返せていると実感できる日々に満足していました。

そんな少年に、悲劇が訪れます。

少年が十度目の誕生日を迎えたその日、彼の体に一つの呪いが掛かっていました。

【嘘をつかなければならない程度の呪い】

少年が本当のことを言うたびに、体中に焼けるような激痛が走りましました。

村人たちにそのことを話そうとしても、痛みが邪魔をします。

また、誰とも話さないようにしても、一定時間以上誰かに嘘をつかなければ同じように激痛に襲われました。

自分を世話してくれた村人たちに恩を返したいと願っていた彼は、嘘をつくことを極端に嫌がりました。

ですが、そのたびに少年は理不尽にも激痛に襲われます。

次第に少年は痛みに屈服していきました。

村人に会ったたびに嘘をつき、夜になると大声で「狼が出た！」と村中を走り回りました。

あんなに素直だった彼が何故こんなことを――？ 村人たちの誰もがその疑問を持ちましたが、毎日のように繰り返される少年の嘘に呆れ果て、その疑問は忘却の彼方へと葬り去られました。

少年は一人、枕を涙で濡らします。

あの人たちに嘘をつきたくない、と。 自分は恩を返し切れていないのに、と。

そんな時にも呪いは彼の体を蝕みます。

嘘をつけ。 嘘をつき続けろ。 痛いのはもう嫌だろう？ 嘘をつこう。 それで自分は救われるのだから。

彼はまた今日も夜の村を走り回ります。

「狼が出たぞ！」

——そう叫びながら。

そんな日が何日か続き、彼の居場所は村のどこにも無くなってしまいました。

今まで少年に笑顔で接していた村人たちは、少年の顔を見るたびに苦虫を噛んだような表情を浮かべます。

少年は生まれてからずっと住んでいた我が家に別れを告げ、森の近くにある無人の小さな小屋で寝泊まりするようになりました。

ここに居れば必要以上に村人たちに嘘をつかなくて済む、と。どうしても耐えられなくなった時、また村を走り回ればいいから、と。

夜中、水を汲むために小屋の外へと出た少年の目についたのは地面に残った複数の獣の足跡。

この大きさ、形からして、間違いなく狼のものでした。

その足跡は一直線に村のほうへと向かって続いています。

村に獣に対抗できるような武器はありませんでした。せいぜいが畑仕事で使うような農作業の道具くらい。

しかも時間は真夜中、村人たちは全員眠りについています。

——みんなが危ない。

気が付けば彼は村へと駆け出していました。

村へたどり着いた彼は、ざっと辺りを見渡します。

村の中にはすでに狼が数匹侵入していましたが、まだどの家も襲われた様子はありません。

少年は大きく息を吸い込み、大声で叫びます。

「狼が出たぞ！！」

体に走る激痛。激痛。激痛。

手が、足が、胸が、頭が、焼けるように熱い。

肉が体の中で燃やされているような、そんな感覚。

気を失いそうになりながらも必死で叫び続けます。

「狼が出た！　狼が出たんだ！！　みんな、逃げてくれ！！」

ちらほらと家の明かりが灯り、うんざりしたような表情の村人が窓から顔を覗かせます。

またいつもの嘘つき少年か、とても思っていたのでしょうか。

しかし彼らの目に映ったのは必死に叫びつづける少年に襲いかかる狼たちの姿。

肉を引き裂かれ、激痛で体を痙攣させながらも、村人たちの身を一心に案じ、勇敢に叫ぶ少年の姿に、村人たちの瞳から涙が零れていました。

そして怒りの雄叫びを上げながら数人の男が家から飛び出てきました。

その姿を見るや否や、狼たちは慌てて逃げ出して夜の森の闇へと消えていきました。

残されたのは血の海に沈む嘔つきの少年だけ。

男たちは今にも息絶えそうな少年を抱き起して必死に傷を塞ごうとしました。

けれど少年の体から流れ出る血は止まりません。

少年の瞳からは光が失われ、震えていた指先も動かなくなりました。

最後に幸せそうな笑みを浮かべて、嘔つきだった少年は最後に正直者になりました。

この話が色んな人に伝えられ、そのたびに少しずつ内容も変わって
いきました。

けれど今でもその話は現代に残っています。

『オオカミ少年』として、哀れな少年のお伽噺として。

第七話（後書き）

誤字・脱字等ありましたらご報告お願いします。
みなさんからのご感想お待ちしております。

第八話（前書き）

主人公の能力がお披露目です。

第八話

「国崎和真はずっと貴女に嘘をつき続けていたのよ。　自分が人間であるとも嘘をついて、ね」

八雲紫は三日月の笑みを浮かべながら呆然としている萃香を見やる。

「嘘だ…和真が私に嘘をつくわけじゃないか……ッ！　和真は、ときどき意地悪だけど、それでもすごく優しくして！　それで、それで……」

「彼が優しいことと嘘つきだということの間にどんな関係があるのか理解できないのだけれど……。　いいわ、私が真実を教えてあげましょう」

紫は手にしていた日傘をくるっ、と一回転させると、静かに瞳を閉じる。

そして彼女は語り始める。　嘘つきの男が生まれてから誰にも話したことのない秘密を。

国崎和真という男の真実を。　その身に負いし罪を。

「あるところに、嘘つきの少年が居たわ。　だけど彼は望んで嘘をついていた訳ではない。　理不尽な呪いをかけられていた……嘘を

つかなければその身を滅ぼすという呪いを。

その少年の血肉を食らった狼が居た。元々、妖の類だった狼は、少年の血肉を食らったことでその少年の呪いを受け継ぐことになってしまった。

狼とは本来、気高き生き物。それが死ぬまで嘘をつき続けなければならぬという呪いに犯された……その苦悩が、鬼である貴女には分からないかもしれないけど。

……話を戻しますわ。狼の身でありながら嘘をつき続けなければならなかった彼らは、ある種の自己暗示のようなものを自分に掛けるようになった。

自分は狼ではない、すぐに嘘をつく穢れた人間だ、と。その歪んだ願いがどういう訳か叶えられ、彼らは人として人に混じって生きてきた。嘘をつき続けながら。

そして人間の身になったことで、寿命も人間と同じく極端に短くなってしまった。だから彼らは子孫を残し、自分たちの種が絶滅しないようにしたの。

呪い付きの狼が子をなせば、その子に呪いを受け継がせることになる。そして何代にも渡り、彼らはその呪いを身に宿してきた。

……違うかしら？ 国崎和真」

和真は紫の話を黙って聞いていた。

紫の問いかけに答えるわけでもなく、ただただ沈黙を守っていた。

「今の話……本当なの？」

恐る恐る萃香が自分の横に立つ和真に問いかける。

「――」

和真は答えない。答えることが出来ない。

真実を口に出してしまえば、彼女はもう二度と自分に向かって笑顔を見せてくれないだろうから。

彼が初めて心を開いた少女に拒絶される。そんなことになってしまえば、間違いなく彼の心が――国崎和真という人格がそこで終わってしまうから。

妖怪としての狂った人格を押さえつけるために作られた偽りの人格、“カズマ”。

その人格が崩壊したとき――自分の中の妖怪が、目の前の少女を殺してしまうかもしれない。

伊吹萃香は、紫の口から告げられた真実をなんとか自分の中で否定しようとした。

けれど、真実を告げられた時のその辛そうな和真の表情は、紫の言葉を裏付ける証拠としては十分すぎて。

萃香は目の前が真っ暗になるような感覚に襲われた。

萃香は信じていた。和真は自分と真正面に向き合ってくれていると。

まだ出会って1週間と経っていないが、遊園地で自分に言ってくれた和真の言葉。

『あ、あ……その、な。別にお前がずっと居たいって言うなら、俺は構わないぞ。ガキの一人や二人を養う金くらい、余裕であるんだからな』

自分のわがままに、誠実さを持って答えてくれた和真。

彼の性格は理解しているつもりだ。なかなか自分の感情を表に出すことが出来ない、不器用な青年。

そんな彼が照れながらも、自分に言ってくれたのだ。

ずっと家に居てもいいと。男女が同じ家で暮らす、それはつまり

遊園地で遊んでいる最中、その言葉を何度も何度も思い出して、和真の気づかないところでよく真っ赤になったものだった。

だからこそ、信じられなかった。

彼がいままでずっと自分に嘘をつき続けていたことが。

けれど、分かってしまった。

紫や自分の言葉に返答しないことによって、彼が嘘をつき続けていたことを。

そして何より——彼のその表情を見て、彼が嘘をつくことを心から嫌悪していると。

だから、そんな表情を見せる和真が、萃香には悲しくて、愛おしくて。

気が付けば萃香は、和真の手をぎゅっと握っていた。

それを見た和真が、信じられないとでもいつかのような表情を見せる。

「萃、香……………」

「やっと、名前で呼んでくれたね」

珍しく困惑しているような和真を見て、萃香はクスリと笑う。

「どう、して……俺は、お前にずっと嘘をついてたのに……鬼ってのは、嘘が嫌いなんだろ……？ それなのに、なんでお前は……」

——俺なんかに、そんな笑顔を見せるんだよ……

その言葉を聞いた萃香は苦笑いを浮かべ、静かに首を横に振る。

「確かに、和真が私に嘘をついていたっていうのはショックだった

よ。それに腹が立った。でもそれ以上に、和真が嘘をつくことを嫌がっていたのに、それに気づけなかった自分に腹が立った」

「馬鹿だろ……お前……どこまで、お人好しなんだよ………」

知らず知らずのうちに和真の頬に涙が伝った。

けれどその涙はとても温かくて、和真の心に在ったはずの氷を静かに溶かしたのだった。

そんな二人の様子を見つめていた紫は、微笑みながら和真に声をかける。

「あなたの体に掛かった呪い、それは真実を口にするたびに全身を火で焼かれるような痛みに襲われるというもの。並大抵の妖怪ではその呪いに屈服するほかない。しかし貴方は先日、藍に伊吹萃香は自分の家族だと告げたそうね？」

国崎和真の監察から戻った従者の藍から、そのことを報告された時、紫は心底驚いていた。

彼は言ったのだ。その鬼は自分の家族だと。口にするだけなら簡単で、とてもとてもちっぽけなもの。

けれどその瞬間、彼の体には呪いによる激痛が走っていたはずだ。

それはその言葉が彼の偽りのない本心だったという証。

苦痛を表情にこそ出さなかったものの、公園で紫が現れる丁度その時まで、満足に喋ることすらできないほどに消耗していた。

それを萃香は、和真の機嫌が悪くなったと勘違いしていたようだったけれど。

「和真……………」

萃香は心配そうな表情で和真を見る。

そんな萃香に、和真は心配ないと手を振る。

その瞬間、紫がパチツと手を鳴らした。

紫の行動の意味が分からない和真は、小さく眉を顰める。

「私の能力で、あなたの体と呪いの間の境界を操りましたわ。今なら嘘をつかずとも、痛みに襲われる心配はありませんわ——
もつとも、呪いが強すぎて、この状態を維持するのは5分が限界で
しょうけど」

「——なんのつもりだ……？」

和真が自分の体に意識を集中させると、確かに今まで心臓を鎖のようなもので巻きつけられていた感覚が消えている。

しかしそんなことをしても紫にはなんのメリットもないはずだ、と思考を巡らす。

「国崎和真、伊吹萃香——あなたたち二人の在り方は、私が幾千の時で見えてきた中でも特に美しいもの。そんな二人のお別れの挨拶を邪魔する無粋な不純物を、取り除いてあげただけですわ」

クスクスと口に手をあてて微笑む紫に、萃香が一步踏み出して睨みつける。

「私は帰らないよ、紫。和真と離ればなれになるなんてもつての他だ」

萃香に続くように和真もまた、紫を見据える。

「だ、そうだ。俺の大切な家族を連れて行くというのなら、ここで貴様を潰す」

そして和真は、今まで抑えていた妖力を解放する。

「——ッ!?」

和真から放たれるその膨大な妖力に、紫どころか隣に居た萃香までもが驚愕の声を上げる。

幻想郷に居た頃の萃香に勝るとも劣らない量の妖力。そしてなによりも、その妖力に混じっている、神聖な力を感じた。

「……………ようやく合点が行きましたわ。 神話の生き物である、“天狼”。それが地上の穢れによって妖怪化した一族——その末裔」

「懐かしい名前だが、過去の栄光に囚われるのはもうやめたんだ。今ここに居るのは、ただの人狼。——国崎和真だ!」

和真は叫び、己の能力を解放する。

【真を嘘にする程度の能力】

和真から放たれた光の粒子が萃香の周りに集まり、それが霧散すると萃香は驚いたように声を上げる。

「私の妖力が、戻ってる……！？」

和真は紫を見据えたまま、萃香に声をかける。

「すまん、万が一の事を考えて、初めて会ったときにお前の妖力を俺の能力で抑えていた」

真を嘘にする程度の能力。その名の通り、実際にあったものを無かったものとする能力である。

これによって萃香の妖力を“なかった”ことにしていた。
万が一妖力を感じ取れる人間に見つかって、萃香の身に危険が降りかからないようにと。

その封印を、今解き放つ。

「さあ、八雲紫。 あいにく俺たちの“日常”にお前は必要ない」

嘘つきの男は進む。

彼が心から愛している、大切な家族を守るために。
今この瞬間だけはすべての嘘を殴り捨てて、心からの想いを、自分の横にいる彼女のためだけに――

「はじめようか紫。 あんたとやるのは久しぶりだが――」ここ
数日、妖力を使えなかったんだ。 あいにく手加減できそうにないよ
？」

小さな鬼は進む。

自分の想い人と共に進む道を、誰にも邪魔されないために。

最強の妖怪と謳われ、人々に畏怖された鬼の力を、自分の横にいる
彼のためだけに――

「……………く、くくく……………」

紫は心底楽しそうに、嗤う。 ああ、本当にこんなに楽しいのはいつ以来だろう、と。

幻想郷の管理者となった今、ほとんどの妖怪は紫の姿を見るだけで恐れ慄いていた。

そんな自分と対等に渡り合える相手など、片手で数えるほども居ない。

皆、戦う前から負けを認めているのだ。

それなのに、目の前に居る二人の姿はなんだ？

伊吹萃香は言わずもがな、戦闘の経験がほとんど無いに等しい国崎和真ですら、自分との力量の差が分かっているはずなのに。

あの二人は互いという存在を守るためだけに、圧倒的な存在である自分に立ち向かってきているのだ。

素晴らしい、本当に素晴らしい。

紫は心からの賞賛を二人に贈る。

だが二人の一途な願いは、到底叶わぬ儚き夢。

なぜならば、二人の目の前に居るのは——正真正銘、最強の妖怪なのだから。

幻想郷最強の妖怪——八雲紫は、その大きすぎる力を、解放した。

「鬼の異端児と百の年も迎えていない若造が幻想郷の母に楯突こうというの？ ふふっ、いいわ。——あなたたちの全身全霊を以って私を楽しませなさい」

ここに戦いの火蓋が切って落とされた。

第八話（後書き）

9 / 23 加筆・修正

10 / 7 主人公の能力名を変更。

第九話（前書き）

気が付けばPV21000 ユニーク3400になっていました。
お気に入り登録も48件……何が起きたし！？

第九話

side：紫

迫り来る弾幕の嵐を避けながら、私は小さく舌打ちをした。
というのも、目の前に対峙する二人の実力が予想を遥かに上回るものだったからだ。

伊吹萃香——鬼の四天王のひとりとしても名高い彼女の实力は、その噂に違わないものであった。

こちらの弾幕を容易く回避し、一気に距離を詰めて拳を突き出してくる。

ただの拳と侮るなけれ。その力は古来より人が畏怖して止まなかったもの。

回避こそ出来ていたが、その拳圧により、私の頬には数か所の切り傷が出来ていた。

そして一番のイレギュラーは、人狼——国崎和真の存在だった。彼が放つ弾幕には、一つ一つに膨大な妖力が込められており、戦闘経験の浅さからまだまだ荒削りな部分が残るものの、一発でも直撃してしまえば私でも大ダメージを受けることは必須だろう。

何より厄介なのが、彼の能力である。

【真を嘘にする程度の能力】

これによって、私が放つ弾幕を文字通り“嘘”へと変化させる。

つまりは、当たらないのだ。

弾幕があったという事実そのものを嘘へと変えてしまうその力はもはや神の領域である。

境界を操る程度の能力という絶対的な能力を持つ私と対になる程の強力無比な能力。

国崎和真が弾幕を張り、その弾幕の隙間を掻い潜るようにして伊吹萃香が私へと突進してくる。
更には伊吹萃香に直撃しそうになった弾幕を国崎和真の能力で嘘へと変化させ、弾幕をかき消す。

敵ながら天晴なコンビネーションだ。

今や幻想郷中に知れ渡っている一組——博麗の巫女とただの魔法使いの少女によるコンビネーションにも劣らないほどの連携。

予想だにしなかった苦戦に、額に汗が滲んでいるのが分かる。

再び国崎和真から放たれる高密度の弾幕。
それをギリギリのところで回避しながら、伊吹萃香の姿を探す。

（居ない……！？ そんな馬鹿な……一体どこに？）

きよろきよろと辺りを見渡して見るものの、そこに目標の姿は発見できない。

すると、背後から伊吹萃香の雄叫びが上がった。

「はああああッ！！」

振り返れば、拳を振り上げる鬼の姿がそこにあった。

いつの間に背後に回り込まれていたのか——そんな今更な考えに小さく苦笑する。

伊吹萃香の能力——【密と疎を操る程度の能力】。

この能力によって自身を霧へと変化させ、全ての物理攻撃から回避することが可能となる。

更には隠密行動にも長けており、霧状態へとなった彼女を見つけることは容易なことではないだろう。

つまり、伊吹萃香は国崎和真が弾幕を放つと同時に、自分を霧へと変化させ、私の背後に回り込んだということ。

体の重心を少しずらして、迫る来る拳を回避する。

それと同時に拳圧で腹部の服が弾け飛び裂傷を負うも、渾身の力を込めた拳を避けられたことで体勢を崩している伊吹萃香の横腹に蹴りを叩きこむ。

「がはっ！？」

小さな体が転がり、公園内に設置されていた遊具へと叩きつけられる。

「ッ！？ 萃香あ！！」

その光景を見た国崎和真が、こちらに弾幕を張り巡らしながら倒れ込む萃香の方へと跳躍する。

咳き込む萃香を抱き起し、顔についた砂を払い落とす。

「大丈夫か！？」

「ゴホッ……心配、ないよ……」

痛みで顔を顰めながらも、なんとか言葉を返す萃香に和真はギリッと奥歯を噛みしめる。

萃香を地面に下ろし、和真が立ち上がった。

私を睨み付け、弾幕を撃とうと構える。

大切な家族を傷つけられたのだ。彼の怒りは最もだろう。そしてその怒りに鼓舞するように跳ね上がる妖力。

けれど、それこそが“穴”――

冷静さを失った相手ほど御しやすい存在はない。

そう、彼が冷静だったならば難なく避けられていただろう一撃。

彼の目の前に突然現れた、隙間から放たれる一発の鋭利な弾丸。

それが、彼の腹部を容易く貫いた。

「ごほう！」

口から大量の血を吐いて、和真は地面に片膝を着く。

腹部から流れ出る大量の鮮血——素人目に見ても、それが致命傷であるとはつきりと分かる。

伊吹萃香と同等の妖力があると言っても、彼の体は人間のもの。つまりは高火力であるが装甲は紙という、アンバランスな存在なのだ。

そもそも、神でもなく妖怪でもなく人でもない彼という不安定な存在が、今まで私と対等に戦っていたことすら奇跡だったのだ。

「和真！ まさか、怪我したのか！？」

必死な表情で叫ぶ萃香に、和真は振り返ることすらしない。この小さな娘に傷を見られて、心配させたくなかったから。

和真は息を吸い込み、小さく萃香に呟いた。

「萃香、お前と過ごしたこの数日間は死んでも忘れない。
——忘れることなんて、出来るわけないだろ……こんな迷惑なガキの
ことなんて」

「なに、を……？」

萃香に背を向けている和真の表情は、萃香からは見ることが出来ない。
い。

しかし、和真と真正面から向き合っている私からは彼の表情をはつきりと見ることが出来た。

笑っていた。

今まで誰にも自分の本性を見せたことのない彼が。

涙を零しながら――それでも満面の笑みで。

「そういえば、もうすぐ昼飯の時間だったな……。今日も、チャ―ハンでいいか？……と言っても、それ以外はロクに作れないんだが」

息も絶え絶えになりながら、必死に言葉を紡ぐ和真。

そんな和真の様子に、ただ事ではないことを悟ったのだろう。立ち上がり、急いで和真の傍に向かう萃香。

そして和真から流れ出ている血を見て、息を呑む。慌てて彼の体を横たえて、萃香は自分の膝に和真の頭を置いた。

もう彼が長くはないことを悟ったのだろう。

萃香の瞳からはぼろぼろと涙が溢れだし、それでも和真の言葉に満面の笑みを以って応える。

「うん、和真のチャ―はんは世界一だからね！でも、今度はみんなも呼ぼうよ！みんな、和真が作ったチャ―はんを食べよう！」

「ああ……みんなで、か。いいな、それ。中華料理ならそこそこ作れるから、店を出すのもいいな……。詐欺師は、もう廃業だな」

苦笑しながら、だんだんと瞳が閉じられていく和真。

そんな和真の意識を少しでも繋ぎ止めようと、萃香は必死に声をかける。

「詐欺師なんて、和真には似合わないよ。誰かを不幸にする仕事より、誰かの笑顔が見れる仕事のほうが、和真だって好きだろう！？」

「ああ……そうだな。そんな仕事も、してみたかった」

「すればいいじゃないか！これからどれだけでも出来るさ！！私が手伝う、他でもないこの私が手伝うんだ！！出来ないなんてことがあるか！！」

「お前……家事、できたっけか……」

小さく笑う和真を見て、涙を零しながら萃香も笑う。

「これから覚えるさ。もちろん、和真が教えてくれるんだろう？」

「……ああ、教えるとも。どこに出しても恥ずかしくないくらい、立派な女に育ててやるさ」

そう、それはifの話。

そんな未来もあつたかもしれない。

二人が小さな店を切り盛りし、苦労はあるけれど充実した毎日を送る日々。

二人の間に嘘など無く、幸せな毎日がずっと続いていく。

そんな、もしもの未来があつたかもしれない。

けれど現実残酷で——彼の瞼は、重く閉ざされてしまった。

第九話（後書き）

まだ完結じゃないですよ？

追憶：小さな鬼の話（前書き）

今回は全面萃香視点です。

ツイッターのアカウント凍結されました。

ま、まさか開始二日で凍結されるとは……恐ろしいぞツイッター。
ちよっとおぜうさまのおしっこについてつぶやいてただけなのに凍
結とか……

追憶：小さな鬼の話

side：萃香

そう、それはきつと初恋だった。

鬼という身に生れ落ちて幾千の月日を数えてきた私だが、あいにく色恋沙汰というものに縁がなかった。
誰かと恋をするということよりも、強敵と戦い酒を飲みかわすことが一番楽しかったからだ。

今思えば自分もまだまだ子供だったのだろう。

つけ加えるなら、この小さな体。

コンプレックスに思ったことなど一度もないが、女の色気と言うものが微塵も感じられないこの体に欲情を抱く者が居るはずもなく――

――いや、何事にも例外はあった。

極稀に私のことを熱く扱い視線で見つめる者も居ることには居たが、鬼の四天王の一人という貫禄を持つ私に言い寄れる度胸のある男が居なかったというだけの話である。

まあそんなこんなで、生娘のように純潔を守ったまま齢だけを重ねてきた。

地上の人間たちに絶望し、鬼たちは地底へと姿を消した。

当然私も付いて行ったのだが、何の刺激もない毎日に嫌気が刺し、再び地上へと舞い戻った。

そこで暇つぶし程度に考えた異変を起こし、博麗の巫女との決闘に敗れた私はいつの間にか地底へ帰ることも忘れて幻想郷中をフラフラしていた。

宴会が開かれると聞けば飛んでいき、昼間は博麗神社で酒を飲みつつ霊夢を観察する毎日を過ごすようになった。

そう——全てが始まったあの日も、私はいつものように博麗神社で開かれる宴会に出席したのだ。

次々と訪れる妖怪たちと互いの武勇伝なんかを話しつつ、酒を飲む。酒も回りかけてきたころ、飲み仲間たちにちよつと失礼するよ、と言い残して神社の脇にある厠へと向かった。

用を足し終え、厠の扉を開くとそこにあつたのは見慣れた神社の光景ではなく——真っ暗闇。

微かに差し込む月明かりのほうへと歩みを進めると、そこに居たのは一匹の人間。

黒髪黒眼の日本人らしい特徴だが、なんとも人相が悪い。

鬼たちには気に入られそうだけど、人間相手だと怖がられて近寄ってさえこないだろう。

そんな外見とは裏腹に、霊力が微塵も感じられないちっぽけな存在だった。

そしてまあ色々あって、二人で飲むことになったわけだが。

さっきの人相の悪い男の名は国崎和真というそうだ。

彼と話していて分かったことは、ここが幻想郷ではないということ。

それにしても、国崎……国崎ねえ？ 幻想郷に居る間に外の人間の苗字も色々と変化しているみたいだ。

そんなことより彼が飲んでいた色鮮やかな酒が目についた。

私がついている瓢箪からは無限に酒が出て来るが、かといって同じ味の酒を飲み続けていれば流石に飽きが来るというもの。

少しだけ分けてもらおうかと思ったけれど、乞食でも見るかのような目つきで私を見てくる男が癪に触って、結局自分の酒を飲み続けていた。

翌朝、頭を襲う痛みで私は目を覚ました。

見ると、目の前で和真が何やら小さな機械をいじっていた。
どうやら手荒な方法で起こされたようだ。

本当につくづく鬼に対して喧嘩を売ってくるやつだ……ここは一度
どちらが上か分からせておいた方がいいだろうか？

と、そこまで考えて自分の体に纏わりついていた布きれを見やる。

寝たときにはこんなものなかったはずだ、と記憶を探り、自分が眠
りについた後に彼がそっとかけてくれたのだと理解する。

そういえば、誰かに布団をかけてもらうなんて一度もされたことな
かった。

皆自分より先に寝てしまうし、そうでなくてもほったらかしにする
ような連中ばかりだった。

——なんだ、むかつくところはあるけど、結構いい奴じゃない
か。

なぜか箱の中に入っていた人間と会話をした後、和真が作ったというちゃーはんを食べた。

これがすごくうまかった。今までこんなにうまい料理を食べたことなどあっただろうか？

酒にはあまり合わなそうだが、それを置いても本当においしい。

いい嫁になれると褒めたんだが、怒られてしまった。
なんでだ？

その後、まあ色々あった。

え、色々って何かって？ い、いやあ……流石に私の口からそれを言うのはちよつと恥ずかしい。
人前で泣くなんて赤ん坊の時以来だったから、本当に恥ずかしかった。

そして涙を流す私を、めんどくさそうな表情をしながらも拭ってくれた彼の行為が嬉しくて、更に泣いてしまった。

……うん、ほんと恥ずかしい。これは黒歴史として封印することにする。

よく分からないけど、和真は私を家に置いてくれるらしかった。

私が落ち着いた後、和真は私を促すようにしてどこかに歩き始めた。もしかして、どこかに置いていかれるのだろうか。そんな不安が頭を過った。

そんな私の様子を見てか、和真はやれやれと私の手を握ってくれた。その手がとても温かくて、心からほっとした気持ちになった。

しばらく歩くと、大きな建物の前に着いた。
和真曰く、しょっぱいぐもある？っていうやつらしいが、よく分からない。

幻想郷に住む人間より多くの人間が一つの建物の中に居て、とても驚いた

そしてたくさんの服が売られている場所へ行き、そこで私の服を買った。

どんなものが似合うのかも全然分からなくて困ったけれど、店で働いていた千恵という女性が選んでくれた服を和真に見せると、彼から珍しく褒められてしまった。

たったそれだけなのに、顔に熱が灯るのが分かる。

なんなんだ、これは……？

今まで経験したことのない不思議な感覚。

私は、随分前に知り合いの妖怪が言っていたことを思い出していた。

『いいですか、萃香さん！ 恋っていうのはですね、相手から褒められたりすると胸がぎゅゅっとなって、顔がぼかぼかしてしまうものなんです！』

顔がぼかぼか……ま、まさか！ これが恋！？

鬼である私が人間の男に恋をしたなんて信じられなかった。

けれど帰り道、朝泣いたせいなのか急に眠気が襲ってきた私を背負ってくれた彼の背中の熱を感じた時、今度は胸がぎゅぐゅとなつて、また顔がぼかばかなくなってしまった。

そして彼の温もりが心地よくて、私はいつの間にか眠りに落ちてしまった。

家に着くと、風呂に入れと言われた。

妖怪にそんなものは必要ない、と言ったのだが、汗臭いと言われてびっくりした。

慌てて体の匂いを嗅ぐと、確かに汗臭い。

私はそこでようやく、幻想郷の外に出てから自分の体から妖力が感じられないことに気付いたのだった。

もしもあのまま、彼に追い出されていたとしたらぞっとする。

妖力のない今、私の力は小娘同然なのだ。

外敵が現れれば、身を守る術はない。

冷や汗を流しながら、彼の質問に適当に返していた私だったが、ふいに自分の体が宙に浮く感覚を感じて我に返った。

見れば和真が私の体を脇に抱えている。

どういっつもりか聞くと、彼は私と風呂に入ることにしたらしい。

って、ちょちょちょ！ちょっと待った！！

どうして急にそんな話になってるの！？ていうか本気なの！！？

どうにかして彼を説得しようと試みたが、聞く耳持たずといった感じで和真は脱衣所の扉を閉めた。

そして彼は何の躊躇いもなく自分の服を脱ぎ始めたのだ。
更には私の服を脱がそうとこちらへ近づいてくる。

初めて見る男のアレが、生娘の私には衝撃的すぎて大混乱してしまった。
った。

自分でも何を言っているか分からない叫びを上げながら必死に抵抗したものの、するっと服を脱がされてしまう。

まさか想い人の前でこんなに早く裸を晒すことになってしまうなんて想像もしていなかった。

もう恥ずかしくて恥ずかしくて、顔から火が出そうだ。

うつ……見られてる。 絶対見られてるよね……………

恐る恐る閉じていた目を開くと、そこにはすでに浴室へ入って石鹸で体を洗い始めている和真の姿が。

それを見てずるつと足が滑ってしまったのは仕方ないと思う。

和真は体に付いた石鹸を洗い流すと、ゆっくりと湯船に肩を沈めた。なんとも気持ちよさそうな声を出して湯に浸かっているの、そんなに気持ちの良いものなのかと脱衣所からこっそり覗く。

すると彼と目が合って、さっさと入ってこいと言われた。

……もう裸は見られてるんだ。 どうにでもなれ。

半ばヤケクソで浴室へ足を踏み入れる。

そして湯船に恐る恐る足をつけていった。 し、仕方ないじゃないか。 体中を湯につけるなんて初めての経験なんだから。

そんな様子の私を見て和真は苦笑すると、私を持ち上げて一気に湯の中に浸からせた。

一気に体の温度が上がったような感覚に、小さく肩を震わせたものの、慣れてきたらこれがなかなか気持ちがいい。

和真の膝の上に座って、風呂の気持ち良さを堪能した。

それから和真と風呂の中で色々と話をした。

和真は正義の味方なんだそうだ。　いつか鬼退治に来てくれないかな？

とか思っていたら、しゃんぷーとか言うやつで鬼退治された。　あれはほんとに反則だよ。　あ

翌朝、私が人の入っている箱を見ているとゆーえんちとかいうすごいのが映っていた。

なんでも、新あたらしくしょん？とかいうのが追加されたのどうのこうので、とにかくすごいのだ！

幻想郷にゆーえんちなんて無かったから、一度行ってみたくて和真に頼み込んだ。

どうかOKを貰えて、目玉焼きが乗った皿を机に運んだ後、急いで和真に買ってもらった服に着替えた。これを着て和真の隣を歩いてたら、周りからは恋人同士に見えるのかな……？（どう見ても兄妹です）

自分で考えたことに恥ずかしくなって頭を振りながら、彼との新しい一日に想いを馳せていた。

ゆーえんちに着くと、そこにはしょっぱいぐももあるよりたくさんの人が居てびっくりした。

受付の女性に貰った案内書きを熱心に見ていると、そこにはこーひーかつぷつていう乗り物の横に小さく、カップルにおすすめ！って書いてあった。

カップルの意味くらい流石に分かる。あれだ。その、こ、恋仲というやつだ……………。

これは何があっても行かなくてはならない。小さく拳を握りしめて、

和真の手を引っ張ってこーひーかつぶ目がけて走り出した。

興奮した私がこーひーかつぶを回しすぎて、和真の具合が悪くなったりと色々事故があったものの、いいこともあった。

勇気を出して告白した私に、和真がOKしてくれたのだ！（勘違いです）

恋仲というだけではなく、更には私に、ずっと家に居ていいと言ってくれたのだ。

男女がずっと同じ家で暮らす……それはつまり――

恋仲を通り越して、結婚！？（勘違いです）

嬉しすぎて彼の胸に飛びついてしまった。

その後で何故か彼に怒られてしまった。早速亭主らしくなってきたね、和真。（関係ありません）

夕暮れ時、楽しかった時間も終わる。

そろそろ帰るぞ、という和真の言葉に答えて、私は小走りで厠へと向かう。

この時間が終わってしまうのは残念だけど、まだ明日がある。明後日もある。

夫婦なんだから、これから先ずっと一緒に居られるんだ。

和真のおいしいご飯を食べて、一緒に楽しい時間を過ごして……あ、私も料理の勉強くらいしたほうがいいかもしれないね。

その時は和真が教えてくれるかな？ でも和真にもお仕事があるし

……

そっだ、お金を貸してもらって料理の本を買って来よう。

本を見ながらなら私だって出来るぞ！

和真、おいしいって言うてくれるかな？

ずっと、一緒に居たいな。

ずっと、和真の傍に居たい。

鬼であることを捨てても、彼の傍に。

そう、これが初恋。

小さな鬼の、初めての恋。

けれど運命は、そんな二人の絆を無慈悲に引き裂いた。

追憶：小さな鬼の話（後書き）

感想貰えると作者の元気がぐんぐん上がります。

第十話（前書き）

今回は少し短いですが、次回からの伏線ということでお気に入り登録数が驚くほどに増えてます。みなさん、本当にありがとうございます。

第十話

「和真！ 和真！ 目を開けてよ、かずまあつつ！！」

瞳を固く閉じ 力無く横たわる和真に、萃香はしきりに声を掛ける。
萃香の瞳からは止めどなく涙が零れ落ち、その手は和真の体から出る血で真っ赤に染まっていた。

けれどそんなことは意にも介さず、ただただ鬼の少女は悲しみの慟哭をあげる。

「思ったよりも脆かったわね。 まさか一発でゲームオーバーだとは思わなかったわ」

嘲笑うかのように告げる紫に、萃香の動きが止まる。

ゆらりと幽霊のように顔を持ち上げる萃香。

その彼女の瞳からはすでに光は失われていた。

表情の失われた顔で紫を見据え、だらんと垂れ下がった両腕の先にある拳に力を入れる。

——目の前で嘲笑う女は、幻想郷の母でも、自分の古くからの宿敵でも、はたまた気の合う親友でもない。

自分のすぐ傍で静かに横たわる和真の——仇。

彼の体温が、恋しい。

あの日つないだ、温かった彼の手は、今はもう動かない。

こいつが消した。彼の温かさを消した。

彼の笑顔が、愛おしい。

けれどもう、彼に笑顔が戻ることはない。

こいつが壊した。彼の笑顔を壊した。

小さな鬼の少女は、嘘つきな男のことを狂わしいほどに愛していた。

「お前が……お前さえ居なければ……ッ！」

ぎりつと奥歯を噛みしめる萃香の瞳には感情の色が戻っていた。

しかしそれは彼女本来の色ではない。

少女の瞳に宿るのは、復讐の炎に満ち溢れた黒々とした感情の色。

紫はそんな萃香を一瞥して、小さくため息をつく。

自分の傍で横たわる男の行動から何も学ばなかったのか、と。

怒りに身を任せた愚か者に待つ結末は敗北しかないというのに。

「——来なさいな、伊吹萃香。あなたの悲しみも憎しみも、幻想郷は全てを受け入れますわ」

紫がもう幻想郷の外に居る理由はない。

そもそも萃香を連れ戻しに來ただけだったのだ。

さっさと隙間を使って目の前の鬼を幻想郷へ送り還す。ただそれだけ。

その際邪魔だった人狼の男を始末するために戦っただけのこと。

その男を始末した今、いつまでも時間を潰している余裕などない。

——まだ博麗大結界に起きた異変について、具体的な解決方法が見つかっていないのだから。

紫の能力で萃香の足元に隙間を発生させる。

ズズズ…… と音を立てて、萃香は足から隙間に飲み込まれていく。それに気づいた萃香は、なんとか脱出しようともがくものの、抵抗むなしくすでに膝まで隙間に飲み込まれていた。

（イレギュラーの存在はあったけど、これで予定通り……。早く帰って藍に温かいお茶でも入れてもらいましょう）

自分の勝利を確信する紫。

当然だ。彼女には自分の能力に対する絶対の自信があったのだから。しかし、それはあくまで彼女の能力を妨害しない者が居なかったらの話で……

ふっ、と紫が息をついたその瞬間――

「「ッ!?!」」

膨大な妖気が、二人の周りに充満した。

辺りを見渡して見るものの、当然の如くこの場に居るのは紫と萃香の2人だけ。

しかしこの妖気は二人のうちどちらのものでもない。

妖怪にはそれぞれ妖気に特徴がある。

今この場に充満している妖気は、お互いのものではないことはすぐに分かった。

一体誰が——紫は探るような視線を先ほど自分が殺した男の体に向けて、息を呑んだ。

死んだはずのあの男から、恐ろしいほどの妖力が漏れていたのだ。

馬鹿な——紫が呆気にとられたような表情をし、その表情に氣付いた萃香もまた、自分の背後を振り返ろうとした、その瞬間。

和真の体が、跳ねるようにして起き上がった。

和真が見せた、人間では——いや、生物には到底不可能な動きに、紫は小さく後ずさる。

よく見ると、彼の漆黒だった髪は雪のように真っ白な髪へと変貌を遂げていた。

さらには、天を指すように生える、銀色の毛並みを持った狼の耳。

ゆっくりとした動きで開かれた彼の瞳の色は、金色に輝く天狼の眼。

人間の身だった頃の彼とは比較にならないほどの妖力。

そして和真は——いや、長年の封印から解き放たれたその妖怪は、無邪気で……それでいて、歪んだ笑みを浮かべた。

「——あはっ」

第十話（後書き）

和真くん妖怪化のお話でした。

誤字・脱字等ありましたらご報告お願いします。

皆さまからのご感想を大募集しています。

というか感想貰えない日はめっちゃ落ち込むので、短くてもいいので書きくださると本当にうれしいです。

なんか催促してるように申し訳ないです……

第十一話（前書き）

みなさんたくさんのご感想・評価ありがとうございます！
読者のみなさんあってこそこの小説です。
これからも応援よろしくお願いします！

第十一話

Side: 紫

「——あはっ」

「ッ！」

目の前の妖怪から放たれる膨大な妖気と心臓を鷲掴みされるかのような狂気に、私は一気に警戒度を上げる。

「おねーさん、妖怪なの？ お名前は？」

「……ええ、八雲紫……スキマ妖怪よ。ところで、あなたは一体何者かしら……？」

「ぼく？ ぼくは九狼だよ！ 狼の妖怪！」

にこにこと無邪気な笑みで語る九狼。しかしその体から止めどなく溢れ出る狂気が肌に刺さる。

一つの体に二つの精神が存在する妖怪……それが目の前の人狼の正体、か。

「あなた……いや、正確には“あなたたち”の体は確かに死んだはずよ。一体どういう原理になっているのかしら？ まさか蓬莱の薬を飲んだっていう訳でもないんでしょう？」

そう、確かにあの時、和真は死んだ。

死者が蘇るなんて世界の常識を覆すことなど出来うるはずもない。けれどそんな常識をあざ笑うかのように、目の前でその死んだはずの体をもう一つの人格が操っている。

「ほーらいのくすりってなに？ そんなものなくても、ぼくは……いや、ぼくたちは死なないよ。——ぼくが死なせてあげないもの」

楽しげに声を上げて笑う九狼の言葉に、小さく眉を顰める。

“死なせない”とは、一体どういうことなのか。

彼の能力は【真を嘘にする程度 of 能力】のはず。

死と言う真実を嘘にした……？ いや、そんな馬鹿なことがあるわけがない。

この私ですら、生と死の境界を操ることなどできないのだから。

ふと見ると、九狼の乱入によって隙間から逃れた萃香が、彼の豹変振りに口を開けて呆けている。

きつとまだ理解できていないんでしょうね。今日の前に居るのは和真ではない、まったくの別人だということを。

「そんなことより、ぼくと一緒に遊ぼうよ！　ずっ〜と外に出れなかったから、退屈してるんだ」

ぷくーっと頬を膨らませる九狼。

可愛らしい仕草だが、元の顔つきがいかついただけあって、精神と体が一致していないというなんともアンバランスな印象を受ける。

「……せつかくのお誘いだけど、お断りさせていただきますわ。早くそこに居る鬼のお姫様を連れて帰らなければなりませんもの」

視線を萃香へと向ける。

九狼もまたその視線を追い、萃香がそこに居たことを初めて気づいたようので、驚きの声を上げた。

「わぁ！　君も妖怪？　その角かっこいいね」

「え？　あ、そうかい……？」

ぺたぺたと角を触る九狼。　その体から漏れる狂気に若干後ずさりながらも、萃香は苦笑いを浮かべる。

その体から感じられる狂気とは裏腹に、実は純粹なだけの妖怪なのかもしれない——萃香がそう思い、肩の力を抜こうとした、その瞬間。

何の前触れもなく、九狼は萃香の腹に蹴りを叩きこんだ。

「——かはッ!！」

それと同時に萃香の肺の中の空気が一気に外に押し出され、呼吸ができなくなる。

20メートルは飛んだところで萃香の体は、重力の法則に従って背中から地面に叩きつけられた。

「ぐっ……っ……」

「わー、すっごく飛んだよー? すごいすごいー!」

パチパチと満面の笑みで手を叩く九狼。

——狂っている。これならばあの狂気の質も納得できるというもの。

「次はドッチボールだよ！ うまく避けてね！」

九狼の手には、ボール大の大きさの妖弾が構えられている。

けれどその大きさに反比例するように、膨大な妖力がその弾に詰まっているのがひしひしと感じられる。

（まずいわね……）

アレを食らえば、いかに鬼と言えどもただでは済まないだろう。

今ここで伊吹萃香に死んでもらっては大いに困る。

かといって妖怪化した彼を私の実力で止めれるとは思わない。

私は一気に萃香との距離を詰め、彼女を抱きかかえる。

そして一瞬で前方に隙間を開け、脇目も振りずに飛び込んだ。

「ゆ、紫……？」

「怪我人は黙ってなさい……まったく、ついてないわね」

私の腕の中で痛み顔に顔を顰めながら、私の顔を見上げる萃香に苦笑する。

隙間を通って目的の場所に行くというのは案外イメージ力を要する。なので少しイメージを纏める時間が必要になるが、今はそんなことを言っている場合ではない。

殺しても死ななかったような奴だ。どんなイレギュラーが再び起こるか分からない。

まずは自分と、そして伊吹萃香の安全を確保することが最優先。

とにかく目的地はどこでもいい。まずはアイツとの距離さえ離せば問題はない。

そう考え、隙間の中を小走りで駆けていく。

とりあえずあの場所から200kmほど離れた場所に……

「見いゝつけた！」

「「ツツツ!!?」」

隙間の中を走っていた私たちの前に現れたのは、白髪の妖怪。

国崎九狼だった。

——ありえない。

あるうことが、目の前の妖怪はスキマの中に自力で入り込んできたのだ。

そんなことを出来る存在なんて今まで一度も見たことない。

当たり前だ。最強の妖怪である私の能力に干渉できる存在なんて、幻想郷をひっくり返したって出て来るわけがない。

それをこいつは、さも自分の家の玄関を潜るかのように侵入してきた。

私の背筋が、恐怖という感情を以ってして生まれて初めて凍った。

「……本当に、イレギュラーすぎるわよ」

第十一話（後書き）

感想お待ちしています。

ツイッターのフォローも待ってます。

第十二話（前書き）

平日ですが余裕がありましたので投稿。

急遽書き上げましたので至らぬ点があるかもしれませんが。

皆さまの応援のおかげで、この度PV36000 ユニーク5300を達成いたしました。

このような作品が皆さまに愛されているという事実深く恐縮していますが、

何よりも応援してくださっているすべての読者の方に改めて深く感謝の意を述べさせていただきます。

本当にありがとうございます！

この物語の結末まで今しばらくお付き合いいただければ幸いです。

第十二話

「がはっ！！」

九狼の力によって紫の体が宙を舞い、スキマの中にある地面へと叩きつけられる。

もう何度攻撃を受けたか思い出せないほど、紫の体はダメージを負っていた。

スキマの中にまで乱入してきた九狼に、萃香をかばいながら戦闘を続けてきた紫だったが、時間が経つことに押されていた。

今では九狼の攻撃に抵抗すらできないほど消耗しており、九狼の完全なワンサイドゲームと化していた。

紫の右腕は本来では有り得ない方向にひしゃげ、見ているだけでも痛々しいほど青白く変色してしまっている。

けれど九狼は意にも介さない様子で、さらに紫へと追い打ちをかける。

苦しげに呻く紫の顔面に、思いつきり振りかぶった足で蹴りを叩きこむ。

グシャ、という耳を塞ぎなくなるような痛々しい音が無音のスキマ

の空間の中に響き渡り、九狼は歓喜の笑い声を上げる。

「紫っ！」

ようやく先ほど腹部に受けたダメージが回復し、戦線へと復帰する萃香。

狂気に満ちた笑みを浮かべる九狼へと一気に詰め寄り、弾幕を撃たせないように九狼の両手を掴み、二人は取っ組み合いの状態になる。

「和真！ 一体どうしちゃったのさ！？ 確かに紫は私たちの敵だった……でもここまでやるなんて、いつもの和真らしくないよ！」

相手の顔に唾をまき散らしながらも、必死に叫ぶ萃香。

「さっきから和真和真って……僕の名前は九狼だって言ってるですよー！？」

自分の顔に降りかかる唾などお構いなしに、負けじと九狼も目の前の鬼に叫ぶ。

しかしながら、流石の九狼も筋力では鬼の怪力に勝てないのか、じりじりと後方へと押されていく。

「馬鹿力だけが取り柄のバカ妖怪に、僕が負ける訳ない！」

目の前の萃香を睨みつけながら、九狼は妖力をその身に纏わせる。

「なっ!？」

九狼の妖力が一瞬跳ね上がったかと思うと、その体に変化が起こつていた。

白髪の中から生えるのは、萃香そっくりの二本の角。

鬼の誇りであり、絶対強者の証でもあるその角が、なぜ彼の頭に突如として出現したのか――

しかし、彼に起こつた変化はそれだけではない。

「ぐっ……!」

先ほどまで力で押していたはずの萃香が、今度は逆に九狼に押されてしまっている。

九狼の体から漲る怪力に、拮抗していたはずの萃香の両腕が悲鳴を上げる。

「どかーん！」

力負けした萃香の体が後ろにのけ反るや否や、九狼は勢いよく萃香の額に頭突きをかました。

「がつ……！」

何々ものの衝撃が萃香の体を襲い、背中から地面に叩きつけられると同時に目の前がチカチカと光るような感覚に襲われる。

「だから言ったでしょ。　僕が負けるはずないもの」

仰向けで横たわる萃香の首を掴み、軽々とその体を空中へと持ち上げる。

「かはっ……………か……………かず、ま……………」

喉を掴まれて苦しい表情を浮かべながらも、萃香は必死に目の前に居る想い人へと声をかける。

そんな萃香の様子を、九狼は忌々しげに見つめる。

「……………そんなにあの作り物がいいのー？」

「作り物……………とか、お前が何を言っているのか、私には…よく分からない……………。だけど私は……………和真が、好き……………それだけさ……………！」

萃香の想いの詰まった叫びに、九狼の表情が歪む。

困惑から憎しみへ。 憎しみから悲しみへ。

「……………みんなそうだ。 みんな和真が好き。 パパもママもお爺ちゃんも、みんなみんな和真和真和真和真って、僕のことなんて誰も見てくれない！！」

「が……はっ………」

癰癤を起した子供のようには喚き散らす九狼。

それと同時に萃香の首に掛かる圧力が増す。

「……要らないよ。和真も、和真が好きな人たちも。みんな
らない、イラナイイラナイイラナイ！！ みんな消えちゃえ！！！！」

九狼の右腕に高濃度の妖弾が形成される。

それは目の前に広がる全ての風景を、塵一つ残さず消し去ってしまった
うほどの暴力の化身・

首を掴まれて宙に浮いたままの萃香には、それを避ける術がない。

鬼の角が生えたことによって筋力が増大した九狼の腕から逃れるこ
とは、消耗しきった萃香には到底不可能なことであった。

「くっ！ 萃香……！」

口から血を流して、美しかった頃の面影もないほど顔の形が歪んでしまっている紫が、それでも尚萃香を逃がそうと能力を発動しようとする。

しかし紫にも妖力は欠片も残っておらず、伸ばした腕の先にスキマが開かれることは——無い。

「ばいばい、鬼の妖怪さん。次は“僕のことを好きでいてね”」

振りかぶった右腕の先にある妖弾が、萃香の顔面を粉碎しようと迫る。

——和真……もう一度だけ、一緒におしゃべりしたかったな。

瞳を閉じ、大切だった人のことを思い浮かべながら、萃香は逃れられない死を覚悟した。

.....

——しかし、これは嘘つきな男の物語である。

世の中の理不尽に嘘をつき、森羅万象の理に嘘をつくところこそが彼の“誇り”。

故に、鬼の少女の死などという真実は認めない。認めるわけにはいかない。

そう、嘘つきな男にとっても、少女は大切な存在なのだから。

「――人の家族に何してやがるんだ？ 九狼」

聞き覚えのある声が萃香の耳に届く。

恐る恐る瞳を開けると、そこにあったのは目と鼻の先で止まる妖弾

を握りこんだ右腕。

そして、金色だった瞳が右目だけ、確かに黒色へと変貌していた。

黒色の瞳が映すのは愛おしいものを見るかのような優しげな色。

そう、それは間違いなく国崎和真のものであった。

「一体どこまで僕の邪魔をすれば気が済むのかな——和真」

憤怒の表情で顔を歪める九狼。

一つの口が、まるで大道芸でもしているかのように交互に別の声色を放つ。

「邪魔？ 邪魔だと？ それならば言わせてもらおう。——
お前の存在のほうがよくばど邪魔だ。糞ったれが」

「散々僕を閉じ込めておきながら、ひどい言い草だね。勝手に人の体に乗っ取っておきながら、本来の体の持ち主に邪魔だと言いつつか……あまり調子に乗らないでよ、作り物の人格の分際で」

「例え作り物だろうと、俺は確かにここに存在している。結局のところ、作り物とオリジナルにほとんど差なんて生じないのさ……それは俺を作ったお前が一番よく知っているだろう？ 国崎九狼」

「憎たらしいほどよく分かっているよ。だからこそ、僕は僕という存在を賭して、君という存在を作ったのだからね。国崎和真」

二人は笑う。 ああ、なんと滑稽な話だろうか。

狂気に満ちて生れ落ちた少年は、その狂気故に実の肉親さえも彼を畏怖し、遠ざけた。

そこで彼は、他者から自分という存在を認めてもらうために作り物の自分を作った。

作られた少年は、本来の自分が過ぐすはずだった時間を傀儡として生きてきた。

少年は傀儡に、ただの道具としての価値しか認めていなかった。

だけど傀儡は自我を持ち、更には自分の守るべきものを見つけた。

故に二人は対立する。

お互いに譲れないものがあるのだから。

これは決して正義か悪かの二択で論じられる問題ではない。

二人がその手に振りかざすものは、自分自身のためのただの我が儘なのだから。

「決着をつけよう。俺たちの、お互いの存在を賭けて」

嘘つきな男は告げる。

再び自分の大切な少女と共に生きる、幸せな日々を勝ち取るために。

「決着をつけようよ。僕たちの、どちらの我が儘を通すのかを」

狂気に染まった少年は告げる。

傀儡を殺し、今度こそ自分自身の生を、自分自身の足で歩んでいくために。

二人の体から力が抜け、ガクリと膝を着く。

臉が静かに落とされ、誰も知ることのできない、二人だけの決戦の場へと赴いた。

第十二話（後書き）

誤字・脱字等ございましたらご報告お願いいたします。
ご感想もどしどしお寄せください。

登場人物紹介（前書き）

F a t e 風ステータスです。

あくまで、参考程度にお考えください。

登場人物紹介

国崎 和真 (K a z u m a K u n i s a k i)

種族：人間／妖狼

ステータス

筋力：D

耐久：E

敏捷：D++

妖力：A

幸運：B

能力：A+

設定

本編の主人公。

“親しい人から嫌われたくない”という願望によって国崎九狼が造った人格。

一族代々から受け継がれる、【嘘をつかなければならない程度の呪い】を身に宿し、真実を口にするたびに激痛が体を襲う。

黒髪黒眼の典型的な日本人の姿であるが、人相がとても悪い。

そのため初対面の人から怖がられてしまうこともしばしばある。

詐欺師を営んでいたため、表面上は人とコミュニケーションを取ることは苦手ではない。

しかし素の自分を表に出すことがなかなか無かったため、真正面から自分と向き合ってくる萃香に戸惑いと愛しさを感じている。

人間の体のため、妖怪と比べると力も無い上に打たれ弱い。

更には戦闘慣れしていないということもあって、本来出せるはずの実力をなかなか奮うことが出来ないでいる。

能力

【まこと うそ真を嘘にする程度の能力】：A +

その名の通り、真実を嘘へと変えてしまう能力である。

弾幕といった物質がそこに在ったという真実を嘘へと変え、弾幕そのものをかき消すことが可能。

それ以外にも、妖力が在るという真実を嘘へと変えたりとさまざまに用途が存在する。

呪い

【嘘をつかなければならない程度の呪い】：？

大妖怪にも劣らない和真の妖力を以ってしても打ち消すことのできない凶悪な呪い。

大昔に先祖が呪いつきの少年を喰らったことにより、その身に少年と同じ呪いを宿した。

伊吹 萃香 (S u i k a I b u k i)

種族：鬼

ステータス

筋力：A₊

耐久：B₊₊

敏捷：B

妖力：A

幸運：D

能力：A＋

設定

突然幻想郷の外にある和真が住んでいるマンションの一室に姿を現した鬼の妖怪。

小学低学年にしか思えない容姿をしているが、何百年もの齢を重ねた大妖怪である。

頭には長くねじれた2本の角が生えている。

「伊吹瓢」という瓢箪を持っており、この瓢箪は酒虫という少量の水を多量の酒に変える生物の体液が塗布されていることによって酒が無限に沸き出るようになっている。

地上の人間に絶望して他の鬼たちと共に地底へと潜ったが、暇つぶしに幻想郷で異変を起こす。

その際、博麗の巫女やその仲間たちによって退治され、その後は博麗神社でのんびりと過ごす生活を送っていた。

今ではその生活よりも和真と共に生きることが望んでいるらしいが、やはり酒は好きらしい。

能力

【密と疎を操る程度の能力】：A＋

あらゆるものの密度を自在に操る能力である。物質の密度を高めればそれは高熱を帯び、逆に密度を下げれば物質は霧状になる。

体を霧状にすることも可能で、このとき相手は全く手出し出来ない状態になり、一方的に戦う事が可能となるが、本人曰く戦闘においてその使い方は卑怯とのこと。

国崎 九狼 (Kuro Kunisaki)

種族：天狼

ステータス

筋力：B

耐久：D++

敏捷：C

妖力：A+

幸運：D

能力：A++

設定

生れ落ちた時から狂気に満ち溢れた忌み子。

肉親からも畏怖され、壊れそうになった自分の精神を守るために国崎和真という人格を作り、自分は心の奥に閉じこもった。

そのため精神年齢は幼い子供と一緒にいるのである。

和真が一度死んだことによって再びその人格を現し、消耗しているとはいえ八雲紫と伊吹萃香の二人を圧倒した。

能力

【嘘を真にする程度の能力】^{うそまこと}：A++

本編ではスキマの中を逃走する紫と萃香を追いかけるために、“自分もスキマに入れる”という嘘をついた。

更には伊吹萃香に力負けしそうになった際、この能力を使って“自分も鬼である”という嘘を真に変え、筋力を増大させた。

以上のことから分かる通り、ある一定の制限を除いて、ほとんどの事象を無から有へと具現化する恐ろしい能力である。

第十三話（前書き）

急ピッチで仕上げました！
遅くなり申し訳ありません！><

第十三話

白と黒の弾幕が辺り一面に広がり、互いにぶつかり合って爆発しながら消滅する。

膨大なエネルギーを秘めた弾幕同士の爆発の威力は恐ろしいものであった。

爆発による熱風の嵐の中を疾走する二つの影があった。

途切れることなく弾幕を放ちながら、距離が縮まれば肉弾戦へと移行する。

拮抗した勝負に思われたが、徐々に黒色の人影のほうを押され始めていた。

「くっ……！」

黒色のスーツ服を纏った青年が苦しげに声を漏らす。

人狼——国崎和真は、不利な状況にあっても尚、その闘志を失うことは無く目の前の相手を睨みつけている。

「あははははは！」

和真に対峙する白のスーツ服を纏った白髪の少年は狂った笑い声を上げながら白色の弾幕を放ち続ける。

天狼——国崎九狼は、ただただ目の前の弱者を蹂躪することしか考えていない。

当然だ。そもそもそれ以外に考える必要がないのだから。

「この……野郎があ！」

和真は自分に迫りくる弾幕を己が能力を以って消滅させる。

そしてすぐに九狼との距離を詰めようと足に力を入れるが、先ほどまでそこに居たはずの九狼の姿はそこにはなかった。

「なっ……!？」

「どこ見てるのさ」

一瞬で和真の背後へと移動していた九狼が、にやりと口元を歪める。まったく以って無防備な状況——人間の体の和真が一度でも攻撃を喰らえばその時点でゲームセットになるのは間違いないだろう。九狼は自分の勝利を確信し、大きく勢いをつけた回し蹴りを和真の体へと放った。

いきなり背後から放たれた強烈な蹴りで和真の体が吹き飛ばされるはずだった。

しかし咄嗟に発動した和真の能力により九狼の不意打ちは失敗し、勢いを殺しきれなかった九狼の体は大きくバランスを崩した。

和真の体が蜃気楼のように霞へと変わり、空気中へと霧散していった。

「お前の攻撃は“当たらない”」

「——ッ!？」

足元から聞こえてきた和真の声に息を飲む。

見ると、腰を低く落とした体勢でしゃがみ込み、拳を握りしめる和真の姿が在った。

「まずは……一発だ!」

勢いよく跳躍し、九狼の顔面めがけて拳を振るう。

九狼が超人的な反射神経で咄嗟に両腕を顔の前で交差させガードするが、当たり所が悪かったのか、ガードした右腕から骨が折れる音がはつきりと九狼の耳に届く。

「死ねっ……！」

痛みに顔を顰めながらも、咄嗟に左手から放った弾幕が和真の命を奪おうと迫る。

しかしその弾幕も、和真の能力によって無効化される……はずであった。

「何度も同じ手が通用すると思うな！」

九狼の能力によって、和真の能力で消滅しかかっていた弾幕が再びその力を取り戻す。

弾幕という存在が和真によって“嘘”へと変えられ、更にその事実を上書きするかのように九狼によって“真”へと変えられる。

つまりは——今和真の目の前にある弾幕は、和真の命を容易く奪ってしまうシロモノだということだ。

「くそ……！」

力いっぱい体を動かし、なんとか迫りくる弾幕の軌道から自分の体を回避させようとした和真だったが、

直撃こそ避けたものの、左肩に掠った弾幕によってその部分に大火傷を負う。

「があっ……！！！」

脳を揺さぶられるような激痛に目の前がチカチカと光るが、唇を噛みしめてどうにか意識を失わないように努める。
もはや使い物になりそうにない左腕に早々に見切りをつけ、右拳を握りしめながら九狼に向かって駆ける。

「来い、和真！ お前の物語に幕引きをしてやろう！」

「抜かせこの引きこもり野郎が。俺の物語はここから始める……お前の都合で勝手に終わらせてやりなんかしない！」

白と黒の妖力の塊が真正面から衝突し、辺りは眩い光に包まれた。

.....

あれからどのくらいの時間が経っただろうか。

和真はもちろんのこと、あらゆる面で和真に勝っているはずの九狼でさえも、わずかな妖力すら残っていなかった。

決して九狼が油断していたというわけではないのに彼がここまで苦戦を強いられているというのは、和真の願う渴望が彼のそれを上回っていたからに他ならない。

肉親からも拒絶され、一度は深い奈落の底にその身を落としたが、

今度こそ己が人生を他ならぬ自分の足で歩みたいという九狼の渴望。
そして永い年月を嘘をつき続けることに費やした嘘つきの男が、ようやく出会った心のそこから守りたいと思える少女とのまだ見ぬ毎日
を願う和真の渴望。

二つの渴望が真正面から衝突し、そして今なおその決着はつくことを知らない。

それは至極当たり前のことであろう。その渴望は二人にとってすでに自分にとってのアイデンティティというものに他ならないのだから。

和真は静かに、そしてはつきりと目の前に対峙する己の壁……もう一人の自分を見据える。

その目に映る九狼からは、満身創痍の身でありながらも未だに覇気というものが消えてはいない。

計らずとも、自分も同じように映っているのであるが。

左腕はもはや使い物にはならないことは重々承知の上である。また、なんとか動かせる右腕に至ってもうまく力を込めることはできなくなっていた。

……しかし、それが何だというのだ。

動かせないならば動かせるようにすればいい。力が入らないのなら

は無理やりにも込めてやればいい。

不条理？理不尽？そんなものは既に 食い飽きている。

今自分が求めているのはそんな陳腐な味ではなく、愛しい鬼の少女とのまだ見ぬ輝かしい日常でこそ得られる暖かな味なのだから。

故に勝利を。この貧弱な人間の身に堕ちた嘔吐きの男に女神の祝福を。

嘔つきは駆ける。自分と対峙する敵に向かって？いいや、違っだろう。そんなものは彼の 眼中にはない。

彼が目指すのは、自分を待つ小さな鬼の少女の居る場所のみ。

その道の途中で自分を阻む邪魔な壁を粉碎するためだけに嘔吐きな男は拳を振るう。

この刹那に、自分に残されたすべての力を拳に乗せて――

この戦いはここに、幕を下ろした――。

第十三話（後書き）

次辺りで第一章エピソードかと思われます。

エピソード（前書き）

思えば遠くまで来たものだ、今更になって思います。

ついに、ついに……第一章エピソードです！

みなさまに応援され続けて、ここまで頑張つて来ました！

お気に入りも100件突破しました！

本当にありがとうございます！！

エピソード

side: 和真

荒い息をどうにか落ち着かせながら、今目の前で仰向けに横たわる九郎の体を見やる。

すでにその存在を維持する力も失われ始めているのだろう。光の粒子が体から漏れ始め、少しずつ透明になっていく。

俺が放った拳は、何にも遮られることなく九狼の顔面に見事にヒットした。

俺に残された力のすべてを乗せた一撃とはいえ、所詮は人間の貧弱な拳一つ、妖怪である九狼にとっては避けることなど容易かっただろう。

それなのにこいつは、拳を避ける動作など一切見せずにただ目をしっかりと見開いたまま俺の拳をその体で受けた。

「どうして、避けなかった」

消え入るような声で、呟く。

分からない。

どうしてこいつはそんな馬鹿な真似をやったのだろう。

この一撃を喰らえばいかに九狼とはいえ、致命傷となることは分かっていたはずなのに。

その身に宿す渴望は何物にも代えられないはずなのに、九狼は憎たらしい表情の一つも見せずに無表情で真つ白な空間を見上げている。

「僕にもよく分からないよ。…でも、避けたらいけないような気がしたんだ」

「……ふざけてるのか？ お前は生きたかったはずだ。俺という存在を消して、体を取り戻す必要があったはずだろう…なんで自分の身を滅ぼすような真似を」

「確かに、僕は生きたかった。二度と謳歌できないと思って諦めていた人生が、君が死んだことによって手の届くものになった。そんなチャンス逃すと思っていたのかい？」

「だからッ！ それならばなぜ」でもそれは所詮僕だけの願いなんだよ「……なにを、言っている？」

「これは僕と和真の我が儘のぶつかり合いだった。自分の我が儘

のためにもう一人の自分をその手で消す……そのために僕らは戦っていた。いや、そう勘違いしていたんだ」

「勘違い……だと？」

呆けた表情の俺を見て、九狼は小さく喉を鳴らす。

実に愉快だ、実に滑稽だと。でもそれは相手を侮辱する言葉ではなかった。

それは、この結末が訪れたことに対する喜びの言葉。

「君の願いは、君だけのものじゃなかったんだよ」

そう、和真の願いは萃香と共に生きること——それは即ち、萃香にとっての願いでもある。

己一人のちっぽけな渴望が、幸福な毎日をただ無垢なまでに願う二人分の渴望に叶うはずがなかったのだ。

九狼は見てしまったのだ。拳を唸らせて迫る和真の背後に、彼を慕う鬼の少女の影を。

「正直、君たちが羨ましい。互いに愛し愛され、互いを信じ合う君たちの関係というものは僕が嫉妬して止まないものだ」

「それなら、なおさら――」

「君は、僕だ。もう一人の僕自身だ。なればこそ、君の幸福は僕自身の幸福でもある。……そのことによようやく気が付けた。だから、もう思い残すことはないよ」

そう言って九狼は、いつもの狂気に満ちた笑みではなく――年
相応の、純粹な笑みを浮かべた。

九狼の体から漏れ出した光の粒子が宙へと溶けていく。

九狼に残された時間は、もう幾何もないだろう。

「ああ、でもやつぱり、死ぬのは怖いな。ねえ和真……僕は何のために生まれてきたのかな」

その問いに答えるべき言葉を、俺は持っていない。

いや、持つてはいけないのだ。

本当は言ってやりたい。お前には生まれてきた理由がちゃんとあった。

お前のおかげで俺は今ここにいます。お前のおかげで萃香と出会うことが出来た、と。

けれど——目の前で消えつつあるこの少年の人生そのものを、嘘つきの男の口から放たれた下品な言葉で汚してはいけません。

「さあな。自分で考えたかどうか？ 生憎、こちらガキのお守りは一人で精いっぱいなんだ。お前のことまで構ってられねえよ」

吐き捨てるように言った俺の言葉に、九狼はそれでも満足そうに頷く。

「そっか、そうだね。ふふっ……君のその無愛想な部分は僕も気に入ってるけど、彼女にもそんな態度ばかり取ってたら、いつか嫌われちゃうよ？」

「うつせーよ。引きこもりのガキにまで心配されるほど落ちぶれちゃいねえさ」

「あははは！ 人付き合いが何よりも苦手なコミュ力不足の社会不適合者には言われたくないなあ」

互いに軽く毒づきながら、笑いあう。

思えば生まれてからこの方、誰よりも近い位置に居た二人だというのに、こうやって話すことなどめったに無かった。

狂気に満ちていた少年は思う。

どうして気づかなかったのだろう。自分を愛してくれる存在が、こんなにも近くに居たのに、と。

「——そろそろ、お別れだね」

「……ああ。後は俺に任せて、ゆっくり休んでくれ」

「これまでも君にずっと任せっきりだったけどね。——さて、君と鬼の少女の物語には無粋な輩は必要ないみたいだ。よって消えよう、僕たちを戒め続けてきた呪いと共に」

九狼の体がより一層の輝きを放つ。

その身に残されたすべての力と、わずかに残った自分という存在を媒体にし、呪いを断ち切る。

——自分が認めた二人の未来に、いけ好かない不純物など残してやるものか。

それは忘却の彼方へと葬り去られたはずの天狼としての誇り。

遙か昔から、神の使いとして数多の魔をその牙で断罪してきた、正義の心。

その輝きはこの世のものとは思えないほどに神々しくて、和真の目には、それが天使の翼のように映った。

「またね、和真」

「……ああ、またな」

光に包まれた九狼の体が、宙へと霧散して、消えた。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

暖かな温もりに包まれながら、ゆっくりと瞼を開く。

まず初めに目に映ったのは、涙で目を真っ赤に腫らした愛しい少女の顔。

身長差があるはずの自分が、何故か自分より背の低い少女を見上げているという状況と、後頭部に柔らかな感触を感じて、彼女に膝枕をされていたのだと理解する。

どう声をかけようか——微かな時間、頭の中で考えてみたものの、改めて自分らしくないと内心で小さく苦笑する。

もうこの少女に嘘をつく必要などないのだ、だから今は――

「おかえりっ、和真！」

「…ただいま、萃香」

彼女の笑みに、自分も満面の笑みを以って応えることにしようではないか。

「こほん……そろそろいいかしら？」

しばらくの間見つめ合っていた俺たちに、気まずそうにかけられた声に二人して慌てて立ちあがって振り返る。

そこには、先日遊園地で会った藍と名乗る女性に肩を支えられている紫の姿が在った。

俺と九狼が精神世界へ潜る直前に見た彼女の有様は、なんともひどいものだったが、腫れ上がっていたはずの顔は以前と変わらぬ美しいものに戻っており、ひしゃげていた腕も元通りになっていた。おそらく駆けつけてきた藍に治療してもらったのだろう。

すでに傷は見当たらないが、体力はそれなりに消費しているようである。一人では立てないようだった。

それでも俺を一度死へと追いやった紫の能力は危険だ。

体を半歩前に出し、応戦の構えを取る。

「ちょっと待ちなさい！ 流石にもう戦うつもりなんてないわよ！」

すると紫は慌てたように手を顔の前でぱたと振り、敵対の意が自分には無いことを伝える。

「……信用できないな。 例えお前にはなくても、横に居るキツネ耳生やしたねーちゃんは無茶苦茶ガン飛ばしてきてるんだが」

そう、俺が目を覚ました時からずっと藍から親の仇のように睨まれていた。

……まあ主人がこんな目にあっただ。恨まない方がどうかしてるだろう。

「……はあ。 藍、あなたの気持ちは嬉しいけど、ここは抑えなさい」

「ですが紫様!？」

「聞えなかったかしら？ 私は抑えろと言ったのよ」

「ッ……！ 申し訳、ありません……っ」

渋々といった表情で引き下がる藍。

紫は小さくため息をついて、再び俺たちに目を向けた。

「私の式が失礼しましたわ。 それで、あなたに話があるのだけれど」

「……生憎と、こちらは話すことなんて何もないんだがな」

「まあそう仰らずに。何事にも寛容な器の大きさがないと、その程度の男だと思われるわよ?」

…こいつは人をおちよくっているのだろうか。

本当に話を聞かずに帰ろうか、と思ったものの、今現在スキマの中に居る俺たちがここから出る術はない。

…九狼なら小指一本で家までの道を開けるだろうが。

「あまり時間もないし、率直に言いますわ。——国崎和真、幻想郷へ来る気はないかしら?」

「……なに?」

紫から告げられた言葉にしばし思考する。

別に元の世界に未練があるというわけではない。詐欺師は廃業したし、そもそもやる必要もなくなった。

それに萃香と一緒にならば、別にどこでも暮らしていける。

……我ながら信じられないほど萃香に依存してしまっているな。

何ともいえない表情で眉を潜める俺を見て、コクンと小首を傾げて「どうしたの？」と尋ねる萃香。

嘘はつかないと決めたが、こんなことを正直に言っしまえば俺の中の大事な何かが壊れてしまう。

「なんでもねえよ」と小声で返事をし、改めて紫に向き直る。

「一体どういう風の吹き回しなんだ？ さっきまでは俺を殺そうとしてきた奴が、今度は自分の住む場所に誘おうだなんて、頭狂ってるようにしか思えねえよ」

「……こちらにも色々と事情があったのよ。でも戦ってみて確信したわ。あなたの力はこれからの幻想郷にとって必要不可欠なものであるとね」

さて、どうしようか。

萃香にとっては何のデメリットもない話だ。元居た場所に帰るだけなのだし、俺の世界に居るよりも同じ妖怪が居る幻想郷に居たほうが気が楽だろう。

俺にとっても同じ。何度も同じことを言うようだが、萃香さえ居ればどこでも構わない。

通帳に入れていた財産も、元と言えば詐欺で稼いだ汚い金だ。そんなものでこれから飯を食っていこうとは到底思えない。

「萃香は、どう思う?」

だから俺は、自分の隣で話を聞いていた萃香に決断を委ねることにした。

「……和真も一緒なら、私は帰りたいな。仲のいい奴らも居たし、和真のことも紹介したいからね!」

そう言って手をぎゅっと握りしめてくる萃香。

「この手の平から伝わる体温を、今度こそ手放さないと誓おう。」

九狼からも散々お膳立てされたんだ。ここで行かなきゃ男が廃る。

「……行こう、幻想郷に。萃香がそれを望むのなら」

しっかりと紫の目を見据えて告げる。

「ふふっ、ようこそ幻想郷へ。 幻想郷は全てを受け入れますわ」

上品に口元を手で押さえながら、小さく笑う紫。

そして俺たちの背後に、ちょうど二人分通り抜けられそうなスキマが開く。

このスキマの先にある世界で、俺たちの新しい生活が始まるのだ。

そう思うと、年甲斐もなく妙にテンションが上がってくるのを感じた。

萃香の手をしっかりと繋ぎ直し、小さく一步を踏み出す。

萃香の歩幅に合わせて、ゆっくりと、けれど確実に。

俺たちは、幻想の世界へと足を踏み入れた。

side：紫

「……本当によかったのですか？ 紫様」

私の式からかけられた声に、肯定の意を以って応える。

「もちろんよ。あの男からの情報も、案外捨てたものじゃなかったってことね」

そう、伊吹萃香が幻想郷から消えたあの日。

私はある男に、伊吹萃香の居場所と、彼女と共に居るであろう男の情報を受け取ったのだ。

なんとも胡散臭い男ではあったものの、彼に纏わる逸話は嫌というほど聞いている。

大昔から存在する大妖怪の内の一柱。

その中でも抜きんでた力を誇る最強の中の最強。

その筋からの情報だ、無下にするわけにもいくまい。

「けれど、今この時期に新たな外来人を幻想郷へ呼び込むのは紫様も反対なさっていたはずでは……」

そう、それが国崎和真を殺そうとした一番の理由。

今幻想郷は、侵略を受けている。

比喻でもなんでもなく、そのままの意味だ。

創立以来、外敵からの攻撃を一度も受けたことのなかった幻想郷が今、未曾有の危機を迎えている。

幻想郷を覆っていた博麗大結界の一部が破壊され、そこから外敵の侵入を許している。

現状では私と藍の2人でなんとか対処できているけれど、それも限界が近い。

いずれ幻想郷中の戦力を集めて全面戦争をしなければならなくなるでしょうね。

故に今、素性の知れない……しかも能力持ちという外来人を何があっても幻想郷に入れないつもりでいた。

そいつが今回の幻想郷侵略にどんな繋がりを持っているのか分からないからだ。

けれど――

「彼が伊吹萃香のこと以外目にないってことは、戦ってみてよく理解できたわ。ならばその甘さを、今は利用させてもらうことにしましょう。……戦力は、少しでも欲しいもの」

そう、彼は伊吹萃香と共に生きることを望んでいた。

それこそ幻想郷でなくとも構わない。彼が元居た世界でも構わなかったのだ。

そこから考えうるに、彼が今回の異変に関わっている可能性は零に等しい。

「……ここからが、正念場ね」

眉を潜めながら、ぼつりと呟く。

私の愛しい幻想を守るためならば、この身がどうなろうと構わない。

けれど今回の相手は、未だにその実態を明かさない未知の敵——
——ただ、博麗大結界を破ったことから想像を絶する強さを誇っている
のであることは容易く理解できる。

正直、私と藍が二人で戦っても勝てるかどうか分からない。

なればこそ、使える駒は全て使いましょう。

全ては、私の愛する我が子たちのために——

エピソード（後書き）

次回からは幻想郷編です。

更新までに時間が空いてしまいかもしれませんが、ご容赦ください。
ご意見・ご感想お待ちしております！

幕間：幻想に忍び寄る魔の手（前書き）

更新遅くなりました。すみません。
お気に入りが111件突破しました。
わお、ピンゾロですね。

幕間：幻想に忍び寄る魔の手

幻想と現実の狭間にある誰も知らない空間に、ひっそりと佇む大きな屋敷。

西洋屋敷のような外見をしているそれは、美しくありながらも何人たりとも寄せ付けない威圧感を漂わせていた。

その屋敷の一室……いや、ホールと言うべきか。高い天井には豪華なシャンデリアが飾られているが、ところどころに蜘蛛の糸が張っており、それが長年手入れされていないことが分かる。

暗闇に包まれたホールを照らす明かりは、窓から差し込む月明かりと、申し訳程度に設置されたロウソクから漏れる淡い光だけだった。

百人は裕に入れそうなホールだが、そこにある人影はたったの四つのみ。

しかしその四人の一人一人が万の軍勢にも勝るほどの膨大な妖力を持つ猛者たちであることは、並みの妖怪でも理解できるだろう。

古ぼけた黒いローブに身を包み、長く伸ばした黒髪に目の下にある隈がなんとも不健康さを漂わせている少女が、小さく口を開く。

「……博麗結界の一部を破壊することに成功。私の兵たちを少数送り込んだものの、八雲紫によって全て撃破された模様」

淡々と告げたかに見えた少女だったが、その声色に含まれている感情は微かな怒り。

自分の愛すべき兵たちを、下種な妖怪如きに葬り去られたことによる遺憾の念。

そんな少女の様子を感じ取ったのか、奇抜な服装をした金色の髪を逆立てた長身の青年が割り込む。

「けっ、まあ仕方ないさ。腐ってもスキマ妖怪…最強の妖怪と畏怖され続けてきた存在だ。お前の人形如きじゃ、せいぜいスタミナを浪費させるのが精いっぱいってところだろうよ」

「……喧嘩売ってるなら、買う」

静かに睨みつける黒髪の少女に、金髪の青年は嘲笑で返す。

「おいおい、冗談はよせよ。戦闘能力だけで見ればお前はこの中じゃ最弱だ。無駄に命を散らすだけだぜ？」

「……やってみないと分からない」

少女がその身に妖気を宿らせる。何らかの能力を発動しようとする
合図である。

それに気付いた青年もまた、両の掌に妖力を集中させる。

この二人から漏れる妖気は尋常なものではない。

ここで戦闘が始まってしまえば、この屋敷はいとも容易く崩壊して
しまっただろう。

今ここに、絶対強者の二人による決闘が始まろうとした、その時――

「――お二方、そこまでござる。今は御前でござるぞ、控
えられよ」

一触即発の雰囲気、和服のようなものに身を包み黒髪を後頭部で
纏めた、いかにも侍といった風貌の男が制す。

腰に添えられた二本の日本刀からは、尋常ではない妖気と濃厚な血
の匂い。

そして獲物を決して逃がさない鷹のような目つきからも、この男が
かなりの兵であることが伺える。

「なんだ武蔵？ 邪魔するっていうなら、お前であっても容赦しねーぜ」

「……別に私は武蔵がどうなろうとどうでもいい。あの人さえ居れば、私は……」

対峙していた二人から、濃密度の殺気をぶつけられる。

並みの人間ならそれだけで心臓発作を起こしそうなものだが、武蔵と呼ばれた侍風の男はそよ風でも浴びるように表情を微塵も変えない。

「実力行使も止む無しでござるな。 致し方ない……少し眠っていただきましょう」

武蔵が腰に添えられた二本の刀に手を伸ばし、その刀身を鞘から抜き出そうとしたその時、低い男の声がホールに響き渡った。

「——なにをしている…絆、時臣、武蔵。 仲間内で争っている場合ではないだろう」

その声が届いた時、三人の背筋に冷たいものが走る。

そして自分の意志とは無関係に自然と震えだす体を、それでも益荒男としての意地で押さえながら、彼らの主へと頭を垂れる。

彼ら三人は決して弱い存在ではない。

一騎当千、一人一人が万の軍勢にも勝る……本物の怪物たち。

その彼らが忠誠を誓う人物こそが、この屋敷の主。

「申し訳ございませぬ、我が主。拙者、この馬鹿者共がいざござを始めた為、鎮圧しようとしていた次第にござる」

武蔵は頭を深く下げたまま、目の前の主から発せられるこの場にいる全員とも比べ物にならないほどの威圧感を堪える。

「その話は本当か？」

武蔵から視線を外し、頭を垂れる二人へと目を向ける。

「……私の兵を、侮辱されたので」

「俺は使えない物を使えないと言っただけっすよ、主」

言葉こそ発しているものの、絆と時臣の二人の額には大粒の汗がにじみ出ていた。

もう数えるのも億劫になるほどの年月をこの方と一緒に歩いているというのに——ああ、勝てない。どう足掻いてもこの方には絶対に勝てないと、本能から理解してしまう。

「——面を上げる」

その言葉に、さっと顔を上げる三人。

そして今一度自分たちの主の顔をしかとその胸に焼き付ける。

血に染まったような真紅の髪。もう長く散髪などしていないのか、伸びきった髪は肩まで届き、前髪はその顔のほぼ全てを覆い隠してしまっている。

しかしながらその髪の間から時折見える肌は、古来より忌み嫌われた異民族と同じ褐色の肌。

更には、見る者すべてを畏怖させる黄金の瞳。

そしてその身に纏うのは、もう本来どんな服であつたかもわからないほどボロボロになつた黒い布きれ。

まるで浮浪者のそんな風貌だが、この男には益荒男たちを屈服させる確かな力がある。

三人から主と呼ばれた男は、このホールに集つた三人の顔をさつと見渡し、さまざまな感情が籠っているであらう声で呟いた。

「——とうとう、この時が来た」

瞼を静かに瞑り、男は己が人生を振り返る。

永かつた。本当に。

いったいこの日のためにどれだけの血を我が身に浴び、どれだけの者たちの命を踏みにじつてきただろう。

だが、全ては“彼女”のために。

「これより、幻想郷を——征服する」

絆はその瞳に熱き炎を燃やす。

自分が全てを捧げた主のために、この身が朽ちても主の願いを叶えたい。

遙か邪馬台国の時代から孤独だった少女は、その“絆”を決して手放さないと誓う。

時臣はその身を歓喜で震わせる。

ようやく自分の全力を出すことのできる機会がやってきたのだ。

数多の時代を旅してきた青年は、ようやく自分が歩むことの出来る“時”を見つけた。

武蔵は両脇の刀の鞘をそつと撫でる。

人間だった自分が、惨めに死ぬはずだった運命を変えてくれた我が主。

我が刀を、我が命を、全て主に捧げよう。

そして、男……『血濡れ』は、愛する“彼女”の元へ――

「幻想の里には数多の血が流れることになるだろう。しかし、これは決して侵略という名の悪の行為ではない……“彼女”のための、聖戦だ」

そう、全ては“彼女”のための戦である。

女神の楽園に蔓延る塵芥共を駆逐するのが我らの役目。

さあ、穢れに満ちた土地を、そこに住まう虫どもの血で洗い流そう。

今ここに、天下無双の獣たちが開戦の雄叫びを上げた。

幕間：幻想に忍び寄る魔の手（後書き）

ご意見・ご感想おきかせください。

プロローグ（前書き）

やっと書きたかった日常編が書けた！
これからしばらくのーんびり進みます。

ブローグ

少女の細く美しい指が、獲物の腹の中を蹂躪する。

その手が獲物の血で真っ赤に染まっているが、少女は気にした様子もなく、それどころかどこか愉しげな笑みまで浮かべている。

そして少女は、獲物の腹から臓物を一気に引っ張りだし、明かりの下へとそれを晒す。

獲物は抵抗する素振りさえ見せない。当然だ。彼はもうすでに事切れてしまっているのだから。

少女は淡々と臓物を引きずり出す作業に没頭する。紅色の臓物が光を反射し、淡い光を醸し出していた。

幼さが残る少女が臓物でその手を汚していく光景は猟奇的で、それでいて何かの儀式のような神聖さを醸し出していた。

躊躇する素振りなど一切見せずに、どんどん獲物の臓物が明かりの元へと晒されていく。

——少女の手が、止まる。

取り出すべき臓物が切れたのだ。

獲物の腹の中に臓物が残っていないことが分かると、少女は嬉々とした表情で声を上げるのだった。

「和真ー！　魚の内臓全部取ったよー！」

花柄のエプロンを着た鬼の少女が、居間で茶をすすっていた男に声をかけた。

「……ん。　怪我とかしなかったか？」

「もう何回包丁握ってると思ってるのさ。　このくらい朝飯前だよ」

「指が絆創膏だらけのくせによく言っな」

あはは、と苦笑いを浮かべる鬼の少女――伊吹萃香の指には、大量の絆創膏が貼られていた。

そんな萃香の様子を見て、人間……いや、人狼の男――国崎和真はやれやれと小さくため息をつく。

萃香と和真が幻想郷へやって来てから、すでに1ヶ月の月日が流れていた。

人里に小さな家を借り、二人で生活をしている。

初めは妖怪の山にある萃香の家に住もうという話だったのだが、あのスキマ妖怪がご丁寧にも人里に家を準備してくれていたので、せっかくの好意を無下にするわけにもいかず、渋る萃香をなんとか宥めて人里で生活を送っているわけである。

とまあはじめの頃は色々とハプニングがあったものの、住めば都と言うように人里に暮らす村人たちは余所者である和真と、畏怖すべき妖怪であるはずの萃香の二人に親しみを持って接してくれていた。

萃香については前から博霊の巫女と友人関係にあったという事実を村人の多くが知っており、恐ろしい鬼というよりも可愛い少女という印象のほうが強かったらしい。

半妖の和真に至っては、村に慧音……ワハクタクの女性という前例があったためか、何の御咎めもなしに人里に住むことに許可が出た。

慧音には人里に住むにあたって様々なことでお世話になったので、今では二人して頭が上がらない。

自分よりも遥か上位に存在するはずの萃香から頭を下げられていた

時の慧音は、見てるこちらが心配になるほどの慌て様だった。

それはさて置き。

人里に住み始めてから数日もしないうちに、萃香が自分が朝食を作りたいと言いつ出した。

和真も、萃香に家事を教える良い機会だと結論付け、二つ返事で了承したのだが……

——この少女、とてつもなく不器用であった。

包丁を握れば食材ではなく自らの指を切りつけ、ようやくのことで切り終えた食材をフライパン？なにそれおいしいの？の要領で火に

直接放り込む。

これには流石に和真が待ったを掛け、急遽和真のパーフェクトお料理教室が開かれることになったのは記憶に新しい。

今ではようやく一人で台所を任せることができるようになったものの、時折聞こえてくる料理とはまったく関係がないであろう破壊音に、和真の胃はストレスで悲鳴をあげ始めていた。

「今からお魚さん焼くから、もう少し待っててね」

「あ、ああ……。萃香、飯の味はこの際気にしないから、なるべく安全に頼むぞ」

「え？料理するだけなのに危ないことなんて何もないよ？ 変な和真だねー」

にこにこと笑う萃香の様子からは、確かに何の心配もないように伺える。

しかし今こうして萃香と会話している最中にも絶え間なく聞こえてくる破裂音に、和真は自分の顔がひきつるのを感じていた。

その後しばらくして、居間にあるちゃぶ台の上には食欲をそそられる良い香りを発する今が旬の焼き魚と、近所の村人から分けてもらった野菜を使った漬物に、湯気を上げる味噌汁に白ご飯と日本人らしい朝食が並んでいた。

和真が恐る恐る焼き魚に箸を伸ばしてその白い身を口に運ぶと、そのとたん溢れ出す脂と仄かな甘みが口の中に広がる。

（味は申し分ないのだが……）

目の前に並ぶ料理の数々が、あの轟音の中で作られたものであることを誰が理解出来るだろうか。

「えっと……その………美味しく、なかった？ ごめんね、私って和真と違って料理下手っぱいだから……無理して食べてくれなくてもいいんだよ」

難しい顔をして目の前の焼き魚を睨み付けるようにして見つめる和真を見て、萃香は不安そうに顔を俯かせる。

「いや、旨い。旨いぞ、お世辞じゃないからな」

慌てて箸を動かし、目にもとまらぬ速さでどんどん料理を口に運んでいく。

そして未だ不安そうな顔をしている萃香に向けて微笑みかけると、萃香はようやくほっとしたように息を吐き、自分も料理に箸を伸ばし始めた。

「萃香、ご飯粒ついてるぞ」

「へ？どどこ？ ……むー、和真、取って」

「……………ほらよ」

「えへへへ」

「…………へらへらせずにさっさと食べ糞ガキ」

朝食の後片付けが終わると、和真は寝間着からスーツへと着替える。

そしてその上から――猫さん模様のエプロンを着用した。

別に今から更に何かを作って食べようとしているわけではない。

エプロン姿の和真は居間を出ると、古ぼけた廊下を進む。

随分前に建てられた家だったのだろう。歩を進めるたびにギシギシと床の板が音をたてる。

住み始めたころは床が抜け落ちてしまうのではないかと気になっていたが、1ヶ月も住んでいれば流石に慣れてくる。

今では足に合わせてリズムカルに鳴り響くこの音に、和真は妙な愛着まで湧いていた。

そのまま歩を進めると、一際大きな部屋へと到着する。

外の明かりを一切閉ざしているためか、その部屋の中は真っ暗闇に包まれていた。

暗がりの中を手探りで進み、目的のスイッチを押す。

すると瞬く間に明かりが灯り、真っ暗だった部屋の全貌が明らかになった。

大人が数十人は入れそうな大きな部屋。

和真と萃香が暮らす家の面積の大部分をこの部屋が占めていた。

数台の四人用テーブルが丁寧に並べられ、その上に丸い形状の椅子が4つずつ置かれている。

奥には大きめな厨房があり、鍋や食器がこれまた丁寧に保管されている。

和真が全てのテーブルの上からイスを下げている間に、遅れてきた萃香が厨房に掛けられていた布巾を汲み置きしていた水で濡らし、テーブルの上をせっせと拭いている。

箒で床を軽く掃き、あらかたの準備を整えたところで入り口に降りていたシャッターを持ち上げる。

すると朝日が部屋の中に差し込み、思わず和真は目を細める。

小さく深呼吸をして、後ろに控える萃香を見やる。

「仕入れは済んでたよな？」

「うん、今朝早くに山田さんのとこの兄ちゃんが運んできたよ。冷蔵庫の中に入ってると思う」

幻想郷には電気が通っていないため、家電品を動かすことは通常では不可能である。

しかしそこは和真の能力が活きるというもの。

『電気など要らない』と嘘をつくことによって、冷蔵庫は電気いらずで通常通りしっかりと作動していた。

まさに歩くエコの塊であった。

萃香のその言葉に頷き、和真は気を引き締める。

今日はなんだかいつもより、忙しくなりそうな予感がしていた。

「国崎料理店、今日も営業開始だ」

プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第一話（前書き）

遅くなって申し訳ありません！

今回は妖夢視点なので、和真と萃香のいちゃいちゃ展開は入れませんでした…

それに加えてどんどん和真が萃香LOVEで壊れてきてる気がします。

でも恋つてのは、人を狂わせるものだぜ！

もう少しでユニーク10000達成しそう……

その暁には何かお礼としておまけみたいなのを書きたいなと思っています。ます。

なので和真や萃香、もしくは作者に何か聞きたいことなどあれば感想板かメッセージでどしどし書いてください。

大喜利のような形で載せたいと思います。

第一話

side : 妖夢

「ふう……」

白玉楼のお掃除をやり終え、小さく息を吐く。

思いの外時間がかかってしまったようで、気がつけばもうお昼時。家事が苦手というわけではないのだけれど、かといってレミリアさんのところの咲夜ほど自分は手際よくはいかないらしい。

彼女なら片手間で、私ほど時間をかけることなくやってのけるだろう。

私自身、これでも努力は欠かさずしているのつもりなのだが……

「……………自分に無い才能を羨んでも仕方ないか。それより幽々子様の昼食をお作りしなくては」

と、自分の中で割り切り、手に持っていた箒を物置へと戻しに行く。

埃っぽい物置の中を、できるだけ息をしないように気を付けながら箒をいつもの位置に立て掛けた。

すると庭の方から、聞き慣れた魔法使いの友人の声が聞こえてきた。いつもと変わらず嵐のように突然やって来る友人に苦笑し、それでも胸の奥から沸き上がる喜びに身を踊らせながら、私は友人の元へ歩を進めるべく、物置を後にした。

「おっす、妖夢。久しぶりだな」

黒と白をモチーフにしたTHE・魔法使いといった感じの服を着込み、片手で箒を支えた少女がにこにことした笑みでこちらを見据える。

「ええ、最近忙しくてなかなか会ったから……月の姫の異変以来かしら？」

「ああ、そんなくらい振りだな。あの後大変だったんだぜ……新しい神社が幻想入りして、霊夢が参拝客を奪われたーって大騒ぎして奪われるも何も、元から参拝客なんてめったに居なかったじゃない」

万年貧乏な巫女のことを思い出し、小さく笑う。
彼女としばらく連絡をとっていないから、近い内に会いに行ければいいな、などと心中で呟く。

「で、どうなったの？あの霊夢がまさか何の行動も起こさなかったわけないわよね」

「ああ……結局件の神社まで殴り込みだよ。まったく、付き合い合わせた私もひどい目にあっただぜ……」

いつもなら天真爛漫な魔理沙が、珍しくため息をついている。

「新しい神社の巫女ってそんなに強かったの？」

「いんや、巫女自体は大したことなかったんだが……その神社に祀られてた神がとんでもなくてな。私と霊夢、それに相手の神の二対一っていう状況でなんとか勝てたんだが、奴さんはあんまり本気じゃなかったつばいんだよな。手を抜いてあれなら、正直二度と戦いたくない相手だぜ……」

プライドの高い魔理沙にそこまで言わせたのだ。魔理沙の言う通り、とんでもない相手だったのだろう。幽々子様や紫様レベル——いや、神ということを考えるにそれ以上の存在であつてもなんら不思議ではない。

幸いなのは、魔理沙の話を聞くかぎり、それだけの力を持っていても幻想郷に仇なそうとは考えていないことだ。

私が内心でほつと胸を撫で下ろしていると、先ほどとは違ってかわつて明るい表情をした魔理沙が声をかけてきた。

「そうだ、忘れるところだった。なあ妖夢、これから暇か？　ちよつくら人里まで行く用事があるんだが、特別にそれに付いてくる権利をくれてやるぜ」

「何でそんなに上から目線なのよ……人にものを頼む側の態度とは思えないわ」

私の言葉に、魔理沙は「相変わらずお堅いやつだぜ」と苦笑を浮かべた。

「それで、人里までわざわざ何しに行くの？　魔法具の買い出しなら、前に一緒に行った時に随分買い込んでいたじゃない」

「いやあ、今回は別の用事だぜ。あ、妖夢。まだ飯食ってないよな？」

「ええ……これから幽々子様と私の分を作ろうとしていたところだけど」

「よっしゃ！　そうと決まれば早速――」

箒に跨がり、私の手を掴んだまま勢いよく飛び立とうとした魔理沙に、私は慌てて声をかける。

「ちょ、ちょっと待って！　色々待って！　これから幽々子様のご飯を作らなきゃいけないんだってば！　それに、私にご飯を食べてないことと人里に行くことになんの関係があるの！？」

私の言葉に、魔理沙は一瞬きよとした表情を見せ、それから笑みを浮かべながら問いかけてきた。

「もしかしてまだ知らなかったのか？　人里の噂」

「噂……？　これといって心当たりはないんだけど……」

人里でなにか異変でも起きたのだろうか？　けれど人里には、人里の守護者と言われる慧音さんが居る。彼女が居る以上、人里が危険に晒されるような異変が起きるとは考えにくいのだけど……。

万が一人里に危険が及んでいるというのなら、いつも世話になっている里の人々のためにも立ち上がらなくてはならないだろう。

気を引き締め、腰に携えた楼観剣と白楼剣を静かに手でなぞった。私の剣がまだまだ未熟であることなど百も承知。しかしだからといって助けを求める人々を見捨ててよい道理などどこにあるのか。

「……行きましょう魔理沙。 私たちの助けを待ち望んでいる人が居るといふのなら、この魂魄妖夢——悪を断つ正義の剣となります！」

「へ？ 流石の魔理沙さんにもまったく理解ができない展開だが……それより幽々子のやつは放っておいていいのか？」

「！ そ、それは……」

確かに私は幽々子様に仕える従者の身。主を放置して戦地に赴くなど言語道断だ。幽々子様の許可なく人里に行くことなどできない。でも人里には今にも助けを求めている人々が……

私が内心で葛藤していると、背後からほんわりとした口調の声が聞こえてきた。

「話は全て聞かせて貰ったわよ」

その声にドキリとし、慌てて振り返ると、そこには白玉楼の主であり、私が仕える幽々子様の姿があった。

まったく気配を察知させることなく背後に回られる……いつものことながら私の主の手腕には驚かされることばかりだ。

「ゆ、幽々子様……！ 申し訳ありませんでした！ 不精この私、主である幽々子様を差し置いて、人里へ出向こうとしておりました。従者として、面目次第も御座いません……」

頭を深く下げ、幽々子様へ謝罪の言葉を述べる。

まったく従者として失格もいいところだろう。幽々子様の口から放たれるであろう私への侮蔑の言葉に身構え、きつく下唇を噛み締める。

しかし、そんな私の心配とは裏腹に、幽々子様はいつも以上に優しく、そんな声色で話された。

「何を謝ることがあるの？ あなたは人里の人々を助けに行こうとしていたのでしょうか？ 褒めこそすれ、非難などする道理などまったく以て有り得ないわ」

その有難いお言葉に胸を打たれ、私は魔理沙が居ることも忘れて涙ぐんでしまった。

なんて慈悲深いお方なのだろうか。

自分より人里の人々のことを優先なさるとは、まさに白玉楼の主に相応しい佇まい。

このようなお方にお仕えができて自分の境遇に、私は改めて心から感謝した。

「さあ行きなさい妖夢。貴女が信じる道を、その剣で切り開いてご覧なさいな。後、お土産もよろしくね」

「かしこまりました！ この妖夢、必ずや人里に仇なす愚か者の首を幽々子様の元へ持ち帰ってご覧に入れましょう！」

膝を地面につき、携えた二本の愛刀を掲げる。

それを見た幽々子様は満足そうに頷き、そそくさと白玉楼の中へと戻ってしまわれた。

途中で何度か笑いを堪えるような動作をしていたのは、きっと私の
見間違いなのだろう。

その後ろ姿を見届けると、二人して人里へと向かったのだった。

少女移動中……………

私が出せる一番のスピードで人里へと到着し、さつと辺りを見渡す。
そこにはこの世の終わりともしめる絶望的な光景が———広がっ
ておらず、いつもの平和な人里の風景がそこにはあった。

一体どうしたことだろうか。眉を潜めて人里に異変が起きていない
状況に混乱する私の後ろから、遅れて到着した魔理沙が歩み出る。

「まったく、どれだけ腹が減ってたんだよ。まさか私より速く
飛び出すとは思わなかったぜ」

「へ？ どういうこと、魔理沙？」

「だから、早く飯が食いたくて急いできたんだろ？」

………はあ？

まったくもって意味が分からない。

私は助けを求めているであろう人里の人たちのことを想って駆けつけたのであり、自分の空腹を満たそうなどと考えてきたわけではない。

それより、人里の異変と私の空腹に一体何の関連性が――

242

「まったく妖夢がそんなに楽しみにしてるとは思わなかったぜ。

まあかくいう私も、少しばかり期待してるんだけどな。 今人里で噂になっている新しい飯屋のことは」

「……………めし、や？」

「え？ まさか妖夢、知らないままここまで来たのか？ 幽々子からも土産を頼まれてたじゃないか」

幽々子様……？土産……？

あ、ああ、あああーっ！！

ま、まさか幽々子様は全部知ってて、その上でまた私をからかっていたのですか！？

あの時笑ってるように見えたのは、私の見間違いなんかじゃなく…

………

「魔理沙お願い……私をどこか誰の迷惑も掛からないようなところに埋めて頂戴」

「お、落ち着け妖夢！　まずは鞘から抜いたその刀から手を離せ！」

首を掻つ切ろうとした私を、魔理沙が慌てて引き留める。

……最悪だ。人里に危険が及んでいるなどと私は一人で早合点していたのか。

恥ずかしい。恥ずかしくて死ねるレベルだ。

私がつくりと項垂れていると、魔理沙はぽんぽんと私の肩を叩いて、気遣うように明るい声で話し始めた。

「ま、まあとりあえずその飯屋に行こうぜ！ 幽々子をあつと驚かせるほどうまい飯を土産にしてやればいいじゃないか！」

「そうね……なんか気が抜けて、急にお腹も減って来たし……」

未だに自己嫌悪から抜け出せない私の背中を、魔理沙が後ろから押しながら、私たちは目的の飯屋とやらに向かった。

「おー、ここか。噂になってるだけあって、列がすごいことになってるな」

「……ほんとね。ここまでとは思ってなかったわ」

私たちの目の前に広がるのは、件の飯屋に来たであろう客の行列。大人から子供まで、さまざまな年層の村人たちが店前で行列を作っている。

小さな店の中から食事を終えた客が出るにつれて、少しずつ動く行

列に、並ぶ前から気が滅入りそうだった。

「はあ、いったいどのくらいかかるのよ、これ」

「まあまあ、待ち時間が長いほど食べた時の喜びがあるってモンじゃないか。さっさと列に並んじまおうぜ」

私を置いてさっさと列の最後尾に並び始める魔理沙にため息を吐き、こうなったら意地でも噂の飯屋の料理とやらを食べてやろうと心に決めた。

およそ一時間後。

ようやく列の最前列まで移動することができ、いよいよ次は私たちが店に入る番となった。

店の入り口に掲げられた看板には、達筆な字で大きく『国崎料理店』と書かれている。

おそらく店名にもなっている国崎さんとやらがこの店の経営者なのだろう。

しかし人里の知り合いの中にも国崎という名前には聞き覚えがないため、恐らく里の外に住んでいた変わり者——もしくは新しく幻想入りしてきた外来人であると検討づけた。

「腹が減った」だの、「もう待ちきれない」だの隣で騒ぐ魔理沙を横目で見つつ、どうして私より最初に乗り気だった貴女のほうが愚痴を吐いてるのよ、と思わず口から出そうになる言葉を飲み込む。

そして店の中から、細長く振れた二本の角を頭から生やした少女がひよっこりと顔を覗かせた。

「お待たせ、次のお客さん、どうぞ中へ……」って、あれ？ あんた確か、幽々子のところの……妖夢だったっけ？」

「す、すすす萃香様！？ 何やってるんですかこんな所で!？」

真つ白なワンピースの上から花柄のエプロンを着た、私より背が小さい少女の名前は伊吹萃香様。

妖怪の中でも最強種と呼ばれる鬼の一族の四天王で、私なんかより遙か雲の上に居られる御方。

童のような見た目こそしているものの、その小さな身に秘めた力はこの幻想郷でも間違いない最強クラスに入るだろう。

そんな方がなぜ人里にある小さな飯屋などで給仕のような恰好をしているのか……

「何って、ここは私の家だよ。 自分の家で働いてるだけの話さね」

「家……？ ここが、ですか……？」

前に聞いた話によれば、萃香様は妖怪の山の麓に小さな家を建てていたはずだ。

それなのにどうして人里で暮らして……いや、それ以前に飯屋など

営んでいるのだろうか。

「おっす、萃香。 約束通り飯食い来てやったぜ」

「おお、魔理沙。 待ってたよ、さあ、妖夢も入った入った！」

「お、お邪魔します……」

花の咲くような笑みを浮かべて店の中へと引つ込む萃香様に続いて、私と魔理沙も店内に足を踏み入れる。

そこには多くの客が、それぞれ談笑しながら手元の料理を食べていた。

料理を口に運ぶ客の全員の顔には笑顔が浮かんでいる。

……それほどおいしいのだろうか。ここに来てようやく私もこれから味わえるであろう料理に期待が持ててきた。

何気なく厨房らしきものの方へと目を向けると、そこにはなんとまあ目つきの悪い男が、睨みつけるようにして手元のフライパンを見つめていた。

顔つきは決して悪くない。むしろ整っていると言えるだろうそれは、しかし凶悪な目つきによって見る者のイメージを完全にマイナスにしている。

真っ黒なスーツの上から猫らしき動物の描かれたエプロンを羽織っている。

スーツの上にエプロンというアンバランスさが、彼の目つきと合わさって余計に不気味な印象を醸し出していた。

私が彼の様子を観察している間にも、店の中には料理を注文する声が行き交う。

「鬼ラーメン一つと、店長特製チャーハン二つ！」

「こっちは噓つきギョーザ一つと、チャーハン二つ……いや、三つで！」

「萃香ちゃんとの一日デート券一つ！」

「あいよ。……それから最後の奴は、後で萃香に手加減抜きのグーパン頼んどいてやるよ」

厨房に立つ彼は注文を黙々と手元のメモ帳に記しながら、最後の客の冗談にはまさに鬼のような表情で言い放った。

彼とは初対面だが、これだけは間違いなく言える。

アレは間違いなく、萃香様にゾッコンであると。

すると厨房近くのカウンター席に座っていた一人の少女の後姿が目についた。

見覚えのある赤と白の巫女服に長く伸ばした黒髪。

九割九分、彼女は私のよく知っている友人に間違いないだろうが、こんな場所で料理を注文できるような金が果たして彼女にあっただ

ろうか。

「まったく、あんたほんとにロリコンよね。見ていて気持ち悪いったらありやしないわ。あ、チャーハンおかわり」

「霊夢、お前これで五杯目だろ……間違いなく太るぞ。あとロリコン言うな」

厨房に立つ彼と親しげに話す霊夢のテーブルには、空になった皿が積まれている。

察するに同じ料理ばかりを続けて注文しているようだが、よっぽど気に入ったのだろうか。

見ると彼女の隣の席が丁度二つ空いているのを見つけ、魔理沙と共に腰掛ける。

「久しぶりね、霊夢。元氣だった？」

「まあなんとかね。今年はこの店のおかげで餓死せずに済みそうよ」

再会の挨拶をしていた私たちの間に入り込むようにして、魔理沙が口を開く。

「またタダ飯ご馳走になってんのかよ。まったく、情けないやら羨ましいやら……」

「うるさいわね。今まで萃香の面倒見てくれてたお礼にいつでも

どうぞ、って店長に言われてるんだから、私の勝手でしょ」

「だとしても、毎日三食しっかり食いに來るお前の神経の図太さには恐れ入るぜ……」

魔理沙のため息にもまったく気にする素振りを見せず、ずずずーつ、とお茶を飲む靈夢。

靈夢の話によると、ここの店長である国崎和真さんはつい最近幻想入りしてきた半妖らしい。

なんでも萃香様と親しい仲になったそうで、この度二人で一緒に人里で暮らすことになったんだとか。

（……だ、男女が同じ屋根の下で一緒に暮らすだなんて、私には想像しただけで気絶しそうです……。）

そうこうしている間に、靈夢が注文していたチャーハンが目の前に置かれた。

「ほらよ、どうせまた追加するんだろうから、大盛りにしといてやった」

「気が利くわね。今度萃香に私の巫女服着るように頼んどいてあげましょうか？」

靈夢がにやつきながら言ったその言葉に、国崎さんの表情がピシリ、と音を立てて凍りついた。

口をぱくぱくと忙しく動かしているが、そこから声は出ていない。冷静なイメージがある彼からは想像が出來ないほど、顔が真っ赤に

なっている。

……………目つきは相変わらず怖いけど、ちょっと可愛い。

視線が休む暇もなく動き回っているところを見ると、彼の中で何かしらの葛藤があっている最中なのだろう。

「巫女服……………だと？」「いや、萃香にはむしろドレスのほうが……………」などとぶつぶつ聞こえてくるが、気にしないであげよう。

しばらくすると、国崎さんはぷいっと顔を私たちから背けて、消え入るような声で小さく呟いた。

「……………頼む」

そのまま気合を入れ直すように天井を勢いよく見上げて、大きく息を吸い込むと、小走りで厨房の中へと戻っていった。

「……………見かけによらず欲望に忠実な奴なんだな」

「ええ、最初に見た時はどこの組の若頭だと思ったけれど、付き合いってみればなかなかあれで面白いやつよ」

「また濃いキャラが幻想入りしてきましたね……………」

笑顔でぴよぴよこと跳ねまわりながら料理をテーブルに運んでいく萃香様を横目で見ながら、私たちは三者三様の笑みを零したのだった。

第一話（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第二話（前書き）

10000ユニーク突破しましたー！

これも皆さまからの応援のおかげです！

このまま20000ユニークまで一直線だー！……え、無理ですか？

第二話

side：幽々子

私は今、一心不乱に空を飛んでいた。

周りの風景がどんどん流れていく。まるで一瞬で目に映る光景が変わるかのような錯覚を覚えていた。

こんなに本気で飛んだことなどいつ以来だろうか。いや、生まれてこの方、ここまで一生懸命になったことなどなかったかもしれない。けれど私は、この亀のように遅い自らのスピードを憎んで止まなかった。

周りからは幻想郷のパワーバランスの一つだと畏怖され、そんな私に忠誠を誓ってくれている可愛らしい従者も居る。

だが、それに何の意味があるのだろうか。

単騎で軍を圧倒しうる力？ まったくもってお笑い草だ。私よりも強い妖怪など探せばいくらでも居る。彼がそうだったように。

誇りある白玉楼の主？ そんなものが欲しいなら、そこらの浮浪者にでもくれてやる。

そんな価値のないもので私の足が速くなるとでもいうのか？待ち焦がれていた存在の元へ一瞬で辿り着けるというのか？

ああ恨めしい憎たらしい。この木偶のような手と足を切り落とすことでもっと速く前に進めるといふのなら、私は喜んで差し出すだろう。

唇を噛みしめ、そこから流れ出た血の不快な味を感じながらも、私はスピードを緩めることはしなかった。

はやく彼の元へ……私の初めての友達の元へと――

ようやく人里を視界に捉えると、私は一目散に妖夢から聞かされた店へと向かった。

最後の客が勘定を終えたのを見計らい、その場で大きく息を吐いた。

まったく今日はいつにも増して疲れた気がする。

それもこれも、霊夢のやつが変なことを突然言い出すからだ。

萃香に巫女服だと？ふざけるな。

萃香にどれだけ巫女服が似合うと思っていやがる。俺を大量出血で殺す気か？

だが実に楽しみである。来たるべきその日のためにカメラを何と少しでも手に入れなくては。

幸い、この幻想郷においても技術者とやらは居るらしい。

なんでも河童たちが幻想郷に流れ着いた外の発明品に興味を持ったらしく、それ以来、変に発達したオーバーテクノロジーを持っているそうだ。

…なんとかして河童たちとコンタクトを取らなければなるまい。

自分の中で新たな目標を掲げながら、閉店の準備をしようとした最
中——
——

「マコトっ……!!」

——突如として店の入り口から、桃色の髪をした女性が物凄い
スピードで俺目がけて突進してきたのである。

そしてそのまま、彼女は俺の胸に抱き付き、か細い声で話し始めた。

「会いたかった……、会いたかったのよ、本当に……」

所々で嗚咽のようなものが混じっているところから、恐らくは泣い
ているのだろう。

だが待て。まったく意味が分からん。

突然見ず知らずの女性から抱き付かれるなど、どここの二流ラブコメだ。

いや、まあ、確かに、こんなに容姿端麗な女性は俺が二十余年生きてきた中でもお目にかかったことがないほどのものであるし、意味が分からないとはいえ喜ばしい出来事には違いがないのだが……

「か、か、か、和真！ ツツツ！！ 幽々子と何してるのよ！！」

厨房の奥で食器を洗っていた萃香が、騒ぎに気付いたのかひょこつと顔を出すと、今の俺の現状を見て大声を上げた。

萃香の口ぶりから察するに、目の前の女性は幽々子と言つらしい……それも萃香の知り合いか。

いつも無邪気な笑みを浮かべている萃香からは想像もできないほど恐ろしい……それこそ鬼のような表情をしている。

ああ、間違いなく怒ってるな。分かる、分かるとも。確かに店内でしかもこんな日も沈んでいない時間から女性と抱き合うなど言語道断だろう。

だが待て、萃香。今回の件は俺に何の責任もないんだ。だ、だからその振り上げた右拳をどうにかしろ！ 外の世界ならまだしも、鬼の力が戻ったお前に殴られたらシャレにならん……………

ピチューン！

数十分後。

なんとか喋れるくらいには体が回復した俺は、未だに不機嫌ムード全開の萃香の眼差しを努めて気にしないようにし、やっとのことで泣きやんだ幽々子から事情を聞くことにした。

曰く、昼間妖夢に渡した持ち帰り用のチャーハンの味が、幽々子がまだ外の世界に居た頃の友人が作ってくれたものにソックリだったらしい。

そしてその友人とはもう何十年も会っていなかったらしく、今回その友人が幻想入りして、新しく飯屋を営んでいると勘違いしたとのことだった。

……話は分かったが、問答無用で抱き付いてくるほど俺のチャーハンの味とこいつの友人とやらが作ったものの味は酷似してたのか？

俺のチャーハンは完全に独学の産物だ。似たような味は作り出せる

だろうが、まったく同じものを作るのは極めて難しいだろう。
ちよつとした隠し味も入れてあるしな。

にも関わらず、その味を作り出せる友人とやらには俺も興味が湧いた。

ことチャーハンに関してだけはちよつとしたプライドがあるからこそ、そいつとは一度酒でも飲みながら話してみたいものだ。

「あの……本当にごめんなさいね？ 私の勘違いのせいで、奥さんとも拗^{こじ}れてしまったみたいで……」

「いや、それはいいとして……。そもそも萃香は俺の嫁つてわけじゃないんだが……」

「なにい！！？」

何やら勘違いしているらしき幽々子の言葉に訂正を加えたのだが、横に控えていた萃香が突然騒ぎだし、俺の首襟を掴んで上下に振り始めた。

「おいこら馬鹿亭主！ 私が嫁じゃないってどういうことだーッ！？」

ガクガクガクガクッ

「お、お、落ち着け、萃香！ お前まで一体何言ってるんだ！？」

ガクガクガクガクッ

「うるさい！ 馬鹿、馬鹿、馬鹿！ このヘタレ嘘つき！」

ガクガクガクガクッ

「や、やめ……！ 昼に喰ったラーメンが喉まで来てるから！ ほんとやめて！」

そんな俺たちの光景を見て、幽々子はくすくすと口元に手をあてて可笑しそうに笑っていたが、ふとその表情が寂しげなものに変わる。当然だろう。長年離ればなれになっていた友人と再会できると思っ
てここまで大急ぎでやって来たのに、そこに居たのは見ず知らずの男だったのだから。

それを見て、未だに襟を掴んで放さない萃香の角をこしこしと撫でてやる。突如として萃香は「ふにゃ〜」と気の抜けた声を出し、こ
とんと頭を俺へと預けてきた。

こいつが角を撫でられるのが好きなのは、一か月ほど一緒に暮らし

てきた中で熟知している。

こうして撫で続けてやれば、まあしばらくは復活することもないだろう。もちろん、我に返った萃香からどんな仕打ちをされるかは分かったものではないが……。

「……いや、こっちこそ悪かったな。　ようやく友人と会えると思つて楽しみにしていたお前さんの気持ちを裏切るような真似をしてしまつて」

萃香の角を撫でながら、ばつの悪そうに片手で頬を搔く。

「あなたが謝ることじゃないわ……。　でも……。　本音を言つと少し残念かしらね……。」

顔の前ではたばたと手を振つて、「気にしないで」と告げる幽々子だったが、その表情の陰りは消えなかった。

「まあ、その、なんだ……。　もし暇な時は飯でも食いに来たらいい。　特別にサービスしてやるよ、お前なら霊夢みたいに一日三食お代わり付きで食いに来ることもないだろうし……。」

「あら、なんだか悪いわね。　それにしてもあなた、よくお人好しって言われないかしら?」

「……生憎と、こちらに来てからよく言われるようになったよ」
幻想郷

あの“遠慮”という言葉知らない腹ペコ巫女にも、何度となく言われた台詞だ。

あの忌まわしき呪いが消えて、嘘をつかなくなったせいかな、なんだか自分がとても丸くなってしまったように思える。

まあもちろん、ちよっとした嘘や、萃香をからかうような嘘ならば今でもついているが。

そこはまあ、長年の癖と言うことで目を瞑っていてもいい。そんな自分の変化に喜ぶべきか否か——なんとも言えない想いで眉を潜めていた俺の顔を、幽々子はじっと見つめていた。

「……やっぱり、どこか似てるわね」

「似てるって……俺とあんたの友人が、か？　それはまた、……難儀な友人を持ったもんだ」

俺と同じような人間が目の前に居たとしたら、間違いなく俺はそういったことが心底嫌いになるだろうな。

ちっばけな自分を守るために嘘ばかりついて、それで他者を貶めるような最低最悪のクズ野郎だ。

一発殴っただけじゃ、収まらないだろう。

「ええ、本当に似てるわよ？ 雰囲気とか、言動とか……一人の女の子のことを何よりも大切に想っているところとか、ね？」

そう言っただけで、俺の腕の中でだらしなく伸びきった表情をした萃香を見て微笑んだ。

その表情には、もう先ほどのような暗さは残っていなかった。

一人の少女のことを何よりも想っている……か。

確かに俺にとって萃香はもう無くてはならない存在になっているのは、この際否定しない。

だが、そのことを本人に面と向かって言おうとは思わない。というか無理だ。そんなルナティックな難易度の行為を出来るわけがない。

まず間違いなく恥ずかしさで死ねるだろう。まったく世の中の男女は一体どうやってカップルなんざ作ってやがる。

まあ、俺にも付き合っていた女性は居たが……どっちかと言えば彼女たちのほうから交際を迫って来たからな。

あの時は飯を作ってくれるお手伝いさんが出来た程度の理由で了承していたのだが、今となって考えれば別に好きでもないのに了承したのは彼女たちにとって失礼以外の何物でもないだろう。

いずれ機会があれば謝りたい……とは思うものの、幻想郷の外へ出ることはもう二度とないのではないかという気さえしている。

だってここには……

「はにゃ……— はっ! ? また私の角を無断で撫でてたでしょ! 何度も勝手に触るなって言ってるだろー!」

俺が愛している、萃香この少女が居るのだから。

第二話（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

10000ユニーク達成記念のおまけ話の作成に当たり、皆様からのメッセージ等お待ちしております！

たくさんの方からのご応募お待ちしておりますー

第三話（前書き）

二日続けて投稿！

べ、別に暇だったわけじゃないんだからねっ……！

第三話

「夏祭り？」

唐突に、萃香が夏祭りに行きたいなどと言い出した。

俺は無意識のうちに皿を洗う手を止め、こちらを見つめる萃香に意識を向ける。

「そうだよ、夏祭り。いつもこの時期になると博麗神社で夏祭りがあるんだ。和真、こっちに來てから初めての行事だろう？　せつかくだから行ってみないかい？」

右手をぐいぐいと引つ張りながら、どこか訴えるような眼差しを向けてくる萃香に、「うっ……」と息を詰まらせる。

反則だ、なんだその上目遣いは。確かに幻想郷に住む連中の中には反則級の強さや能力を持つ者が居るが、それでも今の萃香には敵わないだろう。

「いや、でもなあ……」

開店して一か月かそこらしか経っていないというのに、もう臨時休業でもしようものなら客足が少なくなってしまいかもしれない。今が一番重要な時期なのだ。自分で店を営んでいる人なら分かると思うが、最初の数か月間は一番大切なものである。もちろんそれ以降も、決して疎かにしてはいけないわけではあるのだが。

洪るような声を上げる俺を見て、萃香は悲しげな表情を見せる。

「和真は……私と夏祭りに行くのが嫌なの……？」

萃香の目の端に小さく光る涙を見つけてしまった俺は、慌てて萃香の頭をがしがしと撫でる。

「そんなわけないだろう。さあ行こう、今行こう。ああ、夏祭りなんてガキの頃以来だから、楽しみだなあ！ あっはっはっは！」

どうにか萃香を慰めようと、努めて明るい声を上げるが、その裏冷や汗びっしょりであった。

本当、自分でも呆れてしまつくらいに、萃香のこういう表情には弱い。

不自然な高笑いを上げながら、横目で萃香の様子を伺うと、太陽に向けて咲く大輪のひまわりのような満面の笑みを浮かべていた。

……………ほっ。

どうかお姫様のご機嫌は回復できたらしい。

嬉しそうに目を細めながら、俺の後ろに回り込み、そのままずかずかと背中をよじ登って行く萃香。

そして肩車のような体勢になりながら、萃香は楽しげにぱちぱちと俺の頭を叩きはじめる。

「よし、そうと決まれば浴衣の準備だよ！ はやくお店に買いに行かなくっちゃ、売り切れちゃう売り切れちゃう」

「え、え？ ……普通に普段着で良くないか？」

「だーめ！ 祭りに浴衣は付き物だよ！ それに普段着って、和真スーツしか着てないじゃないか。 そんな恰好で祭りなんか行ったらみんなからの笑いものだよ」

その発言には少々むっときた。

確かに俺が四六時中スーツ姿なのは否定しないが、これが笑いものになるとはどういう見だ。

「なんだとう……？ スーツってのは現代日本の祭りの衣装なんだからまったく以って問題ない」

「そうなの！？ 知らなかったよ……外ではそんなのが衣装になってるんだね」

俺の頭の上に居るから萃香の表情は分からないが、驚きで目を見開いているであろうことがその声色で想像できた。

「よっ、物知り和真！」などと意味の分からない称号を叫ぶ萃香に、苦笑いを零す。

「ああ萃香。盛り上がってるところ悪いんだがな」

「なんだい和真？ 今から私は第三回幻想郷クイズ大会に和真の名前を登録しようと計画してるところなんだけど」

「そんなものに勝手に登録せんといてくれ。それでな、萃香……」

「でもそれなら、私も和真に合わせてスーツを作ってもらおうかな？ てへへ……御揃いの衣装を着ていけば、みんな羨ましがること間違いはないね」

「聞けよ、人の話」

「でも一体どんな祭りで着る衣装なんだろうね。そんな黒々とした衣装を着るなんて、邪神でも祀ってる神社のお祭りなのかい？」

「ああ、それなんだが。こいつが祭りの衣装っていうのは、嘘だ」
スーッ

途端、饒舌に話していた萃香の声が止まる。

そして頭の上から感じる恐ろしいほどの威圧感に、俺は自分の浅はかさを呪わずにはいられなかった。

「かずま………?」

「……………なんでしょう」

「いっつつつちばん、高い浴衣買ってもらっから!! ほら走れ!
この嘘つき亭主!」

頭を齧られたかのような激痛が俺を襲い——いや、言わずもがな齧られたのであろうが、俺は萃香を乗せたまま大急ぎで人里へと飛び出したのだった。

時間は流れ、夕暮れ時。

あの後、人里にある着物屋で俺と萃香の分の着物を購入したのだが……萃香が店内のどこからか持ってきた着物の値段に度胆を抜かれた。

簡単に言えば俺の手持ちでは零の桁が二つばかり足りなかった。外の世界でならまだしも、小さな料理屋で家計を補っている今の俺には手が届かない代物である。

なんとか萃香を説得し、西瓜柄の明るい色をした可愛い着物を購入。これでも数万はしたので、正直頬が引きつっている。

俺は特売コーナーに陳列されていた紺色の無地の着物を購入した。
お値段2980円也。

一度家に帰って着付けを行い、寂しくなった財布に追加資金を補充して博麗神社へと足を進めた。

祭りの雰囲気とは、大人であつても子供の頃のような興奮が蘇ってくるものである。

俺も例に漏れず、年甲斐もなく浮き立つ心を萃香に悟られないように努めて表情を動かさずにいた。

悟りと言えば、サトリ妖怪なるものが存在しているらしい。あな恐ろしや。しかし今回の件はその妖怪とはまったく以って関係がないので割愛する。

博麗神社に近づくにつれ、道行く人が多くなってきた。
これは神社の中は大変な混雑具合になっているだろう、と若干眉を潜める。

「萃香、人が多くなってきたから、迷子にならないように気をつけろよ」

「……仮にも鬼に向かってその台詞はどうかと思うけど」

とは言いつつも、萃香の視線は右から左へ。どう見ても落ち着きがない。

これは間違いなく迷子になるだろうな……そう思った俺は空いた右手で、萃香の左手を繋ぐ。

「ひゃっ!？」

突然のことで驚いたのか、萃香が肩を震わせて声を上げる。
そしていつの間にか自分の手に繋がれている俺の手を見つめると、音が出そうなくらい一気に顔を真っ赤にした。

「か、かかかかかかかかかか！ こ、これって……」

「手繋いでないとお前すぐ迷子になるだろうが。おとなしくしとけ」

「う、うん……」

未だ顔が赤いままで、恥ずかしげに顔を俯かせておとなしく手を引かれている。

……急に静かになったが、まあ迷子になれるよりは良いだろう。

さて、博麗神社の境内に到着し、かなりの人混みの中で四苦八苦する様になると予想をしていたのだが……

「和真！ はやく行こうよー！」

「あ、ああ……」

なぜだか俺と萃香の周りから人が離れていく。

まるでモーゼの奇跡のように、人が波のように割れて俺たちの行く手を空けてくれている。

ふと、遠巻きにこちらを眺める女性と目が合ったのだが……

「ひっ!?!」

青ざめた顔で悲鳴を上げ、銅像のようにその場に立ち尽してしまう女性。

「こ、こら、目を合わせたら何されるか分からないぞ!」

そんな女性に声を掛ける夫らしき男性に肩を担がれながら、そそくさとその場を後にしてしまった。

「まあ、理由は分からんでもないが……」

九割九分、俺の目つきのせいだろうな。

後は俺と手を繋いでいる萃香の存在もあるのかもしれないが、周り

からの視線はその大部分が俺に向けられている。

こつという視線には慣れている。外に居た頃から、腐るほど浴びてきた視線だ。

酷い時には、「お前の目は人殺しの目だ」などと言われたこともあったが、まあ言わんとしていることはよく分かる。

別に気にするほどでもない、が……

（それでもどこか、寂しい気はするな）

小さくため息をつくと、ぐるっと辺りを見渡す。

そこにあつたのは先の女性と同じような怯えた表情の人達。

そりゃそうだ。こんな目つきの悪い男に、どうして親しげに接するような輩が居るものか。

目の前の少女を除いて、そんな物好きはどこにも――

ふと視界の中に、こちらに向けて手を振ってくる幾つかの人影が映った。

その顔はどれも笑顔で、俺の店に来てくれたことのある面々で……

「は、ははは……そうだ、そうだよ……忘れてたよ。幻想郷こゝつ

て、そういう場所だったよな」

いかなる存在も受け入れる、最後の理想郷。

そこには妖怪たちも、人間たちも、はたまたそれで無い者たちも、今日という日を笑顔で過ごしている。

そこに嘘つきも迎え入れられたのだと、彼らの笑顔を見てようやくそう思えた。

「和真……？ どうして泣いてるの……？ 何か、悲しいことあった？」

萃香が心配そうにこちらを見つめている。

知らず知らずのうちに、目から涙が零れてしまっていたらしい。萃香と手を繋いでいるほうとは逆の手で、小さく目を拭った。

「いや、焼きそばの煙が目に入っただけだよ。 気にするな、それより今日はとことん遊ぼうぜ」

萃香を安心させるように笑いかけると、先ほど手を振ってくれた面々にこちらからも手を振返し、足を進めた。

出店を見て回り、萃香が射的や金魚すくいをする様子を傍で見守りつつ、先ほど入り口で渡されたチラシを眺めていた。

「花火大会、か……」

チラシに書かれている時刻によれば、あとほんの十分後というところか。

腕時計で確認しつつ、金魚すくいに興じていた萃香へと視線を戻す。

「があーっ！　また破けた！　おっちゃん、これ破れ易すぎじゃないかい！？」

「そんなこたあねえよ。　ほら見ろ、お嬢ちゃんの横の坊主なんか、三匹もすくってるぞ」

見れば確かに、萃香よりも更に小さいだろう人間の子供が、手に持ったお椀の中に金魚を三匹入れている。

これはつまり店側に問題があるわけではなく、ただ単に萃香の技量不足ということに他ならない。

「こうなったら……おっちゃん！　もう一回！」

「お嬢ちゃん、これで四回目だろう？　それなのに一匹も取れてないんだ。　そろそろ諦めたらどうだい？」

「ぐづぐづぐづっ！」

悔しげに歯ざしりをする萃香の隣で先ほどの子供が四匹目の金魚をすくい上げていた。

やれやれと思いつつ、萃香の隣に腰を下ろす。

「萃香、お前の力が強すぎるんだ。もっと力を緩めて、ゆっくりやってみろ」

金魚屋のおっちゃんに小銭を渡し、それと引き換えにポイを受け取る。

それを萃香の手に握らせ、簡単なアドバイスをする。

それを聞いて萃香は真剣な表情をしながら頷き、睨みつけるようにプールの中で泳ぐ金魚を見つめた。

そしてやがて、水面をぶかぶかと浮かぶように泳いでいる金魚が萃香の目の前までやって来て……

「そこだ、萃香！」

「えいつ！」

——萃香のポイは破れず、その上には小さな金魚が乗っていた。

「えへへへへ」

持ち帰り用の袋に入れられた金魚を眺め、萃香は笑顔を見せる。
萃香の笑顔を見て、俺も知らず知らずのうちに笑みが零れていた。

そして今、もうすぐ上がるであろう花火を見るため、俺たちは神社の裏の軒下に腰掛けていた。

「ありがとね、和真。大事に育てるから！」

「……ああ」

いつまでたっても萃香から真正面に礼を言われることには慣れない。
つい恥ずかしさから目を背けて頬を掻いてしまうのだ。

瞬間、夜空に一輪の大きな光の花が咲いた。

なおも続けて咲き続ける夜空の花の美しさに、萃香は目を真ん丸にして見つめていた。

浴衣を着ているからだろうか。いつものような子供っぽさとは別に、どこか艶麗な雰囲気が漂っていた。

そして花火によって照らされる萃香の横顔は、空に咲く花にも負けないほど実に美しく……知らず知らずのうちに俺の心臓は鼓動を速めていた。

（今日の萃香は、またいつもと違ったイメージがあるな……。元気な萃香もいいが、今みたいな雅な感じの萃香も……。って、何を考えてるんだ俺はッ！？）

熱くなる頬を両手でぱしぱしと叩き、大きく深呼吸をする。

ふと我に返って、思うことがあった。

こいつとなら、いいかもしれない。

今まで出会ってきた女性はどれも魅力的だったのであるが、いざ結婚するか否かと問われれば首を横に振らざるを得なかったのだ。

けれど萃香なら？ 俺自身、この日常が続くことを、誰よりも望んでいた。

萃香と結婚する——そんな展開が、あっても良いかもしれない。

誰よりも一番近くで、萃香の笑顔を見れることが出来るのだから。

打ちあがる花火の下、俺はそう決心した。

しかし世の中とは、そう何もかもが都合の良く進むはずもなく——

俺はこの後、人生で最大の——幻想郷の存在を賭けた出来事に、巻き込まれていくのであった。

第三話（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ユニーク10000突破記念のおまけ話において使う皆様からのメッセージを募集中です！

どしどしお寄せください！

ユニーク10000記念！（前書き）

おまけ話です。

本編とは一切関係ありませんので、どうぞお暇な方だけお読みください。

ユニーク10000記念！

作「ユニーク10000達成記念！」

和「……………和真とー」

萃「萃香のー！」

作・和・萃「嘘鬼質問コーナー！！」

作「さて始めましたね！第1回嘘鬼質問コーナー！」

和「第1回って……2回目や3回目もやるつもりなのか？」

作「未定です」

萃「行き当たりばったりだね……」

作「世の中そんなもんっすよ、萃香さん」

和「思ったんだが、他の小説を見る限りだとユニーク記念のこぼれ話って、普通10万や100万達成でやるようなもんだろ。なんで1万なんてシヨボい数字でこんなことやろうと思ったんだ？」

作「そんなもの待ってたら小説が終わっちまうからです」

萃「理由が切実すぎる……」

和「まあそんなことより、さっさと進めてくれ。店開けっ放しで来たんだから」

萃「どんなお便りが来てるか楽しみだねー!」

作「そうですね、たくさんの方からお便りや質問が来ています。実のところ作者自身、1通でも来れば良い方だと思っていたのですが、予想外の量に若干戸惑っております」

和「小心者だからこそその戸惑いつてやつだな」

作「うるさいな」

作「さて、記念すべき第1通目は……こちらです!」

『Q・ぶつちやけ、この小説ってあとどれくらい続くんですか?』

和「のっけからとんでもない質問拾ってくるんじゃないですか?」

萃「ぶつちやけにも程があるね……」

作「ま、まあ落ち着いてください。そうですね、作者の考えているシナリオ通りに進むとするならば、エンディングまではあと丁度半分つてところでしょうか」

萃「ええっ!? それだけしかないの!」

作「もちろん合間合間に思いついたおまけ話や、登場人物の過去を深く掘り下げた特別編などを挟む予定なので、たぶん予定よりはずっと多くなると思います」

和「予定を見る限り、パツと出で終わるような登場人物が多いから救済処置ってところか？」

作「そこ突っ込まないで」

作「続いての質問はー……こちらー!!」

『Q・萃香さんの巫女服姿はいつ登場するんですか?』

和「この質問が何気に一番多かったんだよな」

萃「にやははー……なんだか恥ずかしいね」

作「ぶっちゃけ作者の悪ふざけで発言した内容がここまで反響を呼ぶとは思っていなかったの、恐縮してます」

和「まさか予告はしたのはいいけれど、書く余裕がないとは言わないよな?」

萃「私はそっちのほうが好きいんだけど……あ、もちろん和真の頼みなら、いつでも着るよ!」

作「健気な奥さんですね……羨ましいです。今のところ本編に挟む余裕がないのは確かですが、作者自身も登場させたい気持ちでいっぱいなので、隙を見て書いてみたいと思います」

和「一つだけ言えることは、“正月を待て”ってところだな」

作「どんどん行きますよー……でんっ!」

『Q・幕間で少しだけ登場してた悪役っぽいやつらは何者なの?』

作「これ言っちゃうと完全なネタバレですね。困りました」

和「まあ問題ない範囲でならいいんじゃないか?」

萃「そうだね、私もどんな猛者が登場して来るのか気になってるし！」

作「とりうえず言えることは、『男3、女1の四人組で、その中の一人は規格外レベル（紫でも敵わない）』……後は申し訳ありませんが登場してからのお楽しみということで」

萃「思ったんだけど、紫がなんか噛ませ犬ポジションになってる気がするんだけど……一応あれでも幻想郷最強の妖怪だよ？」

作「紫様が弱いわけじゃなくて、九狼君や今回のボスが強すぎるだけです。並みの妖怪なら対峙しただけで呼吸すら出来ませんよ」

和「確かにあいつのスキマは反則だからな。現に俺も一度殺されたし」

作「さあさあ次、次！……………ばんっ！！」

『Q・どうしてこの話を書こうと思ったの？』

和「この質問を最初に持つてくるべきじゃなかったのか……？」

作「細かいことは気にしない気にしない」

萃「はあ……どうでもいいから答えてあげなよ」

作「おっと、そうでした。『嘘つきな男と小さな鬼の話』のルーツを探る重要なお話になりますので、みなさん心して聞いてください。如何にしてこの物語は生まれ、国崎和真という主人公はどうして生まれたのか……その謎を今夜、皆さんにお明かしします」

和「ちょ、ちょっと待て！いかにもこの物語の超重要ポイントっぽいじゃないか！こんなところで言って大丈夫なのか！？」

萃「そうだよ！ 落ち着け作者！」

作「大丈夫です……なぜなら………」

和「な、なぜなら……？」

萃「ごくり……」

作「萃香といちゃいちゃしたい！でも二次元との壁は厚すぎる……」

！ならば自分で萃香といちゃいちゃできる小説書けばいいんじゃない？そうだそうだ、そうしよう。……こうやって生まれたのが、『嘘つきな男と小さな鬼の話』なのです」

和「完全にお前の欲望を叩きつけたような小説じゃないか！？どうしてくれるんだこの空気！」

萃「そうだそうだ！それに結局あんたと私がいちゃいちゃできてないじゃないか！？」

作「ぐふっ……！萃香さん、痛いところを……。………そうなんです。書き始めてから気が付いたんですが、萃香といちゃいちゃできているのは私自身ではなく、結局のところ主人公である国崎和真という登場人物……まさに孔明の罠でした」

和「単にアホなだけだろ、お前」

萃「慰める言葉も見当たらないね……」

作「最初は可愛い萃香さんを書けるというだけで、胸が躍るような気持ちだったんです。けれど次第に、私の可愛い萃香さんがヤクザ顔の嘘つき男に良いようにされているのを見ていてどんどん腹が立ってきて……」

和「最近俺の扱いがひどいのはお前のせいか!？」

萃「自業自得すぎてもう何も言えないよ」

作「こうなったら……こうなったら！ 幻想郷中のガチホモ達に和真君が襲われて、そのままアーツ！な方向に目覚めてBAD ENDという物語に修正してや」……」

萃「鬼符『ミッシングパワー』」

アーツ!……ピチューン……

萃「悪は滅びた」

和「作者脱落のため、次で最後にするぞ……最後の質問は、こちら」

『Q・この物語の結末はハッピーエンドですか?』

和「言うまでもないな」

萃「えへへ、そうだね。どんな敵が立ち塞がろうと、私と和真の2人でなら打ち砕いてみせるよ」

和「そういうことだ。じゃあ今日は長々と付き合ってもらって悪かった」

萃「阿呆な作者に代わって、私たちが読者のみんなにお礼を言うね！」

和・萃『どうもありがとうございました！これからも嘘鬼を応援してください！』

ユニーク10000記念！（後書き）

みなさんご協力ありがとうございました！
縁があれば次回も是非…！

第四話（前書き）

遅れて申し訳ありません……
もうすぐセンター試験なので、今後もちょうくちよく遅れることがあ
ると思います。

第四話

消える、消える、消える、消える。

美しかった森が、川が、空が、音を立てて崩れ去っていく。

消える、消える、消える、消える。

将来を夢見ていた少年が、愛する家族と幸せな日常を送っていた男が、初恋の味をまだ知ることすらなかった少女が。

空気に溶け込む吐息のように、命を宙へと散らしていった。

ついさっきまでそこにあったはずの幸せな日常が、そして明日からも続くであつたはずの希望に満ち溢れた未来が。
全て一切の例外なく消えていく。

そんな非常識染みた風景を一言で表すならば、そう……世界の終わり。

全てを受け入れ、消えていく運命にあつた幻想と共に生きていた、何処よりも優しい世界の終焉。

終わりとは始まりを告げる一種の区切りだとされているが、この終わりの先に未来はない。

ただ終わるのだ。一遍たりとも慈悲もなく、ただただそこに在ったはずの全てが無へと消え去り行く。

世界が維持できる生命力というものがそこには無い。もう死んでしまった大地が広がるばかり。

そんな中で、一人だけ……その絶望に抗う男が居た。

けれどその男にはもう何かを為せるだけの力は残っていない。ただ破滅という運命から己の身を守ることだけで精一杯であった。

それでもその男は、自分の腕の中で静かに横たわる少女の体を決して手放そうとはしなかった。

すでに少女の体からは生きるための力というものが失われ、その体温は徐々に……けれど確実に失われていく。

虚ろな目で虚空を見上げているが、その目にはもはや何も映ってない。

いや、一つだけあるとするならば、今自分を抱きしめてくれている男と過ごした——短くて、けれどとても温かった日常。

自分がこの上なく我が儘なことなど自覚していたし、そんな駄目な自分をこの男が心の底から愛してくれていたことも分かっていた。

でも最後にもう一つだけ我が儘を言わせて貰えるならば——どうか私の愛した彼の笑顔をもう一度だけこの目で見たい。

腕を持ち上げることが出来る力など、とうに失われているというのに……それでも少女は震える右手を微かに動かした。

少女の微かな動作に気が付いたのか、男は己の掌で少女の右手をしっかりと掴んだ。

右手から伝わる彼の確かな温もりを感じながら、少女は幾百年積み重ねてきた自らの生を手放した。

もう何もなくなってしまった世界に、男の慟哭の叫びだけが響き渡る。

どうして、どうして彼女が死ななければならなかったのか——
そう声を大にして叫びたかったが、口から漏れ出すのは言葉にもならないような呻きばかり。

なんて無様なことだろうか。己の愛した少女の命一つ救えず、どうしてここに一人だけ生き残っているのか。

出来ることなら彼自身、少女と共に生を終えたかった。

この大地の上で、愛した少女と共に屍を晒したかった。

けれどそんなことは男の矜持が認めない。認めてなるものか。なあ
そうだろう？

俺たちの世界を殺した糞野郎の顔を、俺はまだ一度も殴れていない
のだから。

「……………」

やっとのことで声に出来たその言葉は、自分が愛した少女の名前に
他ならず。

もう二度と瞳を開くことがない、腕の中で静かに横たわっている少
女の抜け殻に対する辛い言葉。

思い返せば、何度も何度も自分のせいで泣かせてばかりだった。
けれど二人で笑いあったことも、星の数だけあった気がするが……
今となつては思い出話に花を咲かすことのできる相手さえ居ない。

「……………」

少女の亡骸をそつと地面に下ろす。まるで壊れ物を扱うかのような
その仕草には、この男の少女に対する愛で満ちていた。

そんな行動とは裏腹に、男の声色に込められていた感情は怨念、殺
意、狂気。

「許さない……許さない……許してなるものか――」

それは己が怨敵に対する怒りの感情。

少女を殺したあいつが、まだ何処かで悠々と心の臓を鳴らしている。意味が分からない。なんでお前が生きていて、■■■が死んだんだ？

なぜ昨日まで笑顔を見せていたはずの■■■が、こんなに冷たくなっている？

「貴様だけは……貴様だけは俺がこの手で殺してやる……！！」

常軌を逸した殺意が瞳に宿り、黒色だった瞳の色が黄金へと変貌する。

それは人間という身の上では有り得ないことで。

それ即ち、男が人間であることを捨てたという証拠に他ならなかった。

妖の身へと落ちた男は、ありったけの怨念を込めてその名を叫ぶ。

アマツカミボシ
「天津甕星——!!」

男の叫びが、静かに崩れ去る世界に響き渡った。

side: 和真

「う、うーん……………」

夢から覚めた直後、頭にガンガンと響く痛みに眉を顰める。

背中から伝わる床のゴツゴツとした感覚のせいで、背中が痛い。

夏祭りから帰宅した直後、突如萃香が酒盛りを始めたため、それに付き合って夜通し酒を飲んでいた。

どうやら自分のほうが先に潰れてしまったらしく（これでも酒には強い自信があったのだが）、まったく鬼の酒の強さというものにはほとんど呆れるばかりである。

重い体をなんとか起こそうと試みるものの、伸ばしきった右腕に重量を感じた。

見ると、萃香が俺の右腕を枕にして眠りこけている。
長い時間枕に使われていたせいか、動かそうとした右腕に痛みが走る。

それでも萃香を起こさないように気を付けながら、上半身を起こし、萃香をそつと抱きかかえて寢室の布団へと寝かせた。

「やれやれ……」

ため息をつきながら首を回す。

パキパキと心地いい音が聞こえ、背骨の位置を整えるために大きく背伸びをする。

「うつ……水、水……」

ぐらぐらと揺れる頭と二日酔いの吐き気に苦しみながら、コップに注いだ水をゆつくりと飲み干す。

「さて……」

椅子に腰を下ろし、昨日のうちに考えていたことを整理する。

萃香にプロポーズしようと思ったのは花火を見ていた時のことで、けれどそんな経験はもちろん持ち合わせていない。

萃香が自分に好意を持って接してくれていることには気づいているものの、それがどんな好意なのかまでは分からない。

もしかしたら、恋人に対するソレというよりも、自分の家族に対する好意のようなものかもしれない。

後者だった場合は目も当てられないだろう。勇気を出してプロポーズしてみたのはいいものの、それが一方通行の感情だったとしたら今のような関係に戻ることにさえ難しくなる。

だが、何の行動も起こさないのかと聞かれれば首を横に振るだろう。どんな結末を迎えるにせよ、もう自分の気持ちにだけは嘘を吐きたくはない。

話は戻るが、いざプロポーズしようとした際に何の贈り物もないというのは少々問題があるのではないかと思う。

もちろん一番大切なものは想いであることは分かっている。だがやはり形に残るようなものをプレゼントするということも大切だろう。

「と言ってもなあ」

世間一般でプロポーズする際に贈るものと言えば、やはり指輪だろう。

だが、萃香には少々失礼だが、あいつがそんなものに興味があるとは思えない。

花より団子。月見より酒を飲む方を優先する。

そんなやつだ。女の子の子供の子した贈り物は正直あまり好まないのではないだろうか。

となるとやはり、萃香が喜びそうなものをプレゼントするという結論に至るわけだが……

「あいつが喜びそうなものって、なんだ……？」

もう長く一緒に暮らしているというのに、萃香には趣味らしい趣味も見当たらない。

いつも店の手伝いをしているか、夜になると酒を飲むかで楽しんでいるか、いい趣味はしていないように見受けられる。

「困ったな」

鳴り止まない頭痛に舌打ちをしながら、どうしたものかと首を捻る。ならばいっそ、萃香のことをよく知る人物に尋ねてみるのはどうだろうか……？

「……物は試しだな」

身だしなみを整え、いつも着ているスーツを羽織ると、外へと歩を進めた。

つい昨日祭りがあつたとは思えないほど、博麗神社は静かだった。昨日はあんなにも人が来ていたというのに、普段の博麗神社には参拝客の一人も居ないのだろうか、と無性に寂しく感じられる。

霊夢から聞いた話によると、この博麗神社には祀られている神の詳細が不明らしい。

それならばこの人気の無さも頷けるだろう。正体不明の神に信仰を捧げるほどの物好きはめったに居ないだろうから。

辺りを見渡し、目的の人物の姿を探す。

すると本殿の隅で、簾を壁に立て掛けてお茶を飲む赤白の巫女服の少女の姿を見つけた。

大方、祭りの後の掃除でもしていたのだろう。

なんだかんだ言いながらも、ちゃんと巫女としての仕事をしている少女に苦笑しながら、片手を上げて近づいて行った。

「よう霊夢。こんな朝からご苦労なことだな」

「はあ？もう昼過ぎよ？ あんた、萃香のボケが移ったんじゃないの？」

「む……………」

急いで腕時計を確認してみると、時刻は午後一時過ぎ。

こんな時間まで寝てたのか、と今明らかになった事実に見開く。

「すまないな、萃香の酒盛りに付き合っていたせいで時間の感覚がおかしくなっていたみたいだ」

「ああ……あんたもよくあんなのに付き合えるわよね。萃香に付き合って同じ量を毎日飲んでたら、いつか絶対死ぬわよ」

「ふむ……今のところは問題ないが、これからは少し控えようか」

遠まわしにこちらの身体の心配までして来る霊夢に、口は悪いがお人好しな少女、という自分の認識が間違っていないことを再確認する。

「で、いったい何の用？ まだ掃除も終わってないから、さっさと片付けたいんだけど」

しっし、と手を振る霊夢に苦笑いを零しながら、さてどう切り出したものか、と思案する。

「じ、実はな……」

「実は？」

「実は………」

「………」

言いかけて、急に恥ずかしさが襲ってきた。

萃香にさえ秘密にしていた自分の気持ちを他者に告げることがこんなにルナティックなことだとは思ってもみなかった。

自分の頬が熱を帯びるのを感じる。

すると業を煮やしたのか、霊夢が噛み付かんばかりの勢いで大声を上げる。

「貴重な時間を割いてやってるんだから、さつさと話さないよ！
なんで私が良い歳した男の赤面なんて無価値なものを延々と見せつけられなきゃなんないのよ！？殺すわよ！？」

「ま、待て……！ ……う……分かった……。 ……言っぞ、言うからな！？」

「いいから話せ！」

「実は……………」

そして俺は、萃香に対する俺の気持ちと、萃香にこれからプロポーズをしようと思っっている趣旨を伝えた。

そしてその際に何か贈り物をしたいのだが、萃香が好みそうなものを知っているか？、と。

話している最中、身が裂けるような羞恥の念に駆られたが、なんとか最後の一言を絞り出すことが出来た。

霊夢は真剣な表情をして俺の話を聞いていたが、次第にうんざりし

たような、呆れたような、なんとも言えない表情をしていた。

話すべきことを言い終え、じっと霊夢からの返答を待っていたのだ
が……

「……………え？　それだけ？」

「……………え？」

霊夢から返ってきたのは、俺の一世一代の大告白を見事に溝に捨て
てくれるような台詞だった。

「それだけって……滅茶苦茶重要なことなんだが」

「どこがよ！あんたが珍しく切羽詰ったような表情をしてたもんだ
から、真剣に話を聞いてやったってのに……その話の内容が萃香と
結婚だの贈り物だの、呆れて物も言えないわよ」

はあ、つとこれ見よがしに大きなため息をつき、がっくりと肩を
落とす霊夢。

「そんなことより、あんたと萃香ってもうとくにそ……関係だ
と思っただけ、違ったわけ？」

「違う。どこをどう見ればそんな風に見えるんだ」

「どこつて、全てに決まってるじゃない！ あんだけ一人身の私たちに見せつけてたくせに、まさか自覚が無かったなんて言わないでしょうね！？」

「む、むう……」

そこまで言われたら不本意だが納得せざるを得ない。自分としては萃香に普通の態度を取っていたつもりだったんだが、どうやら他者から見た俺たちは恋人以上の関係に見えたそうだ。

「もうとつくに結婚なんてすつ飛ばして子供でも作ったんじゃないかと思つてたんだけど……」

「こ、ここここここ、子供お！！？」

俺と萃香の子供……それはさぞかし可愛いに違いない。願うべきは俺のような目つきに生まれてこないことだが……って違う違う！

「な、何を突拍子もないことを言いやがりますか！ 俺は萃香にそんな不埒な感情を抱いたことなど……」

「鼻血出てるわよ、この変態」

無い、と言い切れるだろうか。

あの日、花火の明かりの下で艶麗な雰囲気を醸し出していた萃香。
夏の夕暮れ時、火照った体の上気した頬の明るみと、時折覗く素肌
の上にしっかりと濡れる汗は、天の滴とも思えるような美しさで……

「――ブーッ！」

「うわ！？ あんた鼻血の量が尋常じゃないわよ！？ ちょ、ちょ
っと待ってて！ 今、濡れ布巾持ってくるから……」

二日酔いの上に大量の出血（原因は鼻血）をしたせいだろうか。薄
れていく意識の中で、慌てて神社の横にある母屋へと走っていく霊
夢の後姿だけが目に映った。

第四話（後書き）

和真、暴走する。の巻でした。

萃香への贈り物が何なのか分かってしまった人も、どうか内緒でお願いしますね！

第五話（前書き）

もうすぐPV10万突破しそうです……

書き始めた時はこんなに伸びると思ってなかったなので恐縮してま

す……

すごく……嬉しいです。♫

第五話

ぼんやりとした意識のまま目を覚ますと、まず目に映ったのは雲一つない青空。

いつも目を覚ました時に見上げている天井とはまったく違う光景に、しばし混乱するものの、次第に自分の置かれている状況が分かってきた。

頭には濡れ布巾が置かれ、鼻にはティッシュが詰められていることに気が付く。

鼻血を大噴射し、そのままぶっ倒れてしまった際、霊夢によって看病されていたのだろう。

ゆっくりと頭を持ち上げると、すぐ傍でこちらを見つめる霊夢の姿があった。

「あら、もう大丈夫なの？」

「……俺はどのくらい気を失ってた？」

「そんなに長くなかったわよ。精々十五分程度ってところかしらね」

「そうか……世話をかけたな。すまない」

小さく頭を下げ、謝罪する。

まったく、あの程度で気絶してしまうとは我ながら情けない。

「ただの気まぐれよ。礼を言われるほどのことはしてないわ」

口ではそう言いながらも若干照れくさそうな表情を浮かべている霊夢。

そんな彼女の不器用な態度に苦笑し、立ち上がる。

少し休んだおかげか、大分先ほどよりも頭痛が引いてきたみたいだ。

「あ、そうそう。あんたが寝てる間に色々考えたんだけど……」

「ん？ なんのことだ？」

「言い出しつぺのあんたが忘れるんじゃないわよ、まったく……。萃香に贈るプレゼントのことよ」

霊夢に言われてようやく思い出す。

そういえばここに来たのも霊夢に意見を聞くためだった。

色々ばたばたしてすっかり忘れてしまっていた……。気を付けなければ。

「で、何かいい案でも浮かんだのか？」

「まあ、一つだけね。あんたもよく知ってると思う物だけど」

「……………？ 生憎見当が付かないのだが」

「はあ、あんたってやつは……。いい？よく聞きなさいよ。萃香が間違いなく喜びそうなもの、それは――」

霊夢から萃香への贈り物のアドバイスを貰った俺は、目的地目掛けて空を飛んでいた。

こっちに来てから合間を見つけて空を飛ぶ練習をしていたおかげか、今ではかなり自由に飛ぶことができるようになった。

練習の際には萃香に指導を受けていたのだが、初めに萃香に「空の飛び方を教えて欲しい」と言った時には呆れたような表情をされた。その時の萃香は、「私にも劣らない妖力を持つているのに今まで空も飛べなかったのか」と、こちらを馬鹿にしたような笑みと共に無い胸を張って偉そうにふんぞり返っていた。

流石にこのまま萃香にでかい顔をされ続けるというのは男のプライドが許せなかったため、特訓に特訓を重ねた。

能力を使えばいいじゃないか、と気づいたのは、もうすでに妖力だけで空を飛べるようになった時のことだった。

それについては今でも非常に後悔している節は有る。

だが結果良ければ全て良しといった具合でもかく空は飛べているわけで、今更とやかく言う必要はないだろう。

「急に寒くなつて来たな……」

肌に刺す冷たい冷氣に、小さく体を震わせる。

まったく、まだ夏の終盤だというのにどうしてこんなに寒いのか。

ふと視線を移すと、大きな湖が目映った。

こんなところに湖があったとは……今度萃香を連れて釣りにでも来てみようか。

などと思いを馳せている間に、俺を呼び止める少女の声が耳に届いた。

「ちょっとそこのお前！ あたいのナーバリに入るとはいい度胸してるな！」

「ん……？」

振り返ると、こちらを指さす水色の髪をした小さな少女の姿があった。

身長は萃香と同じくらいだろうか。こんな人里から離れたところで小さな子供が遊ぶには少々危険だろう。

「おい、ここらはいつ妖怪が出てもおかしくないところだぞ。悪いことは言わないからさっさと家に帰るんだな」

「ふんっ、そこらの妖怪なんかあたいの敵じゃないよ」

「なに……？」

今気づいたのだが、この少女、俺と同じく空を飛んでいる。

しかも背中には氷のようなもので出来た羽のようなものが……こいつも妖怪なのか？

「あたいはチルノ！ 幻想郷でさいきょーの妖精よ！」

妖精……萃香から聞いたことがある。

なんでも、強くないくせにわらわらとどこから湧いてくる上に、潰してもすぐに復活するから面倒だとか何とか。

そう言えば妖精は喋ることが出来ないと聞いていたんだが……目の

前に居るチルノとかいう妖精はさつきから饒舌に喋っている。

萃香の情報が誤っていたのか、それともチルノが特別なのか……今の俺では判断がつかないな。他の妖精なんか見たこともないし。

「俺は国崎和真だ」

「クニサキ・カズマダ……？ —— カズマダね！ 覚えた！」

「和真だ」

「カズマダ」

「和真だ」

「カズマダ！」

「ところでカズマダはこんなところに一体何の用？ あたいのナーバリーに無断で入り込むと痛い目見ることになるよ！」

「縄張りがどうか、そんなつもりは無かったんだが……。この先にある紅魔館に用事があったな」

紅魔館というワードを聞いた途端、チルノの眉がピクリと動く。

「それなら丁度いい！あたい達もこれから紅魔館に行くつもりだったんだ」

「……紅魔館には恐ろしい吸血鬼が住んでいるという話を聞いたんだが、大丈夫なのか？」

「問題ないわ！　いつもカエルを凍らして遊んでるんだから、カエルもコウモリも大差ない！」

カエルを……？　いつたい何故そんな意味のないことを……。

——ま、まさか……！？

霊夢が言っていた。つい最近、二柱の神が幻想入りしてきて、その内の一柱がカエルみたいな神だったと。

なるほど最強の妖精というのも頷ける。曲りなりにも一柱の神を、しかも遊び感覚で凍らせることのできる実力の持ち主……俺なんかでは手も足も出ないだろう。

「カズマダ！これからあんたはあたいの子分よ！　あたいのことは今から親分と呼ぶように！」

突然そんなことを言い放つチルノ。

だがこれは願ってもない機会だ。幻想郷最強の妖精の傘下に入ることによって、これから先に面倒事が起こった時に頼りに出来るかもしれない。

妖力については萃香からお墨付きを貰ってはいるものの、戦闘経験なんてこの前の紫との戦いが初めてだった。

正直、妖怪だらけの幻想郷で自分がどれほどの位置に居るのかも分

からない。

「はい、親分」

「じゃあさっそくみんなが待つてるところに行くぞ！ 遅れるなよー！」

「はい、親分」

「チルノちゃん！」

「大ちゃん！ 待った!？」

「ううん、私たちも今来たところだから」

チルノと俺を出迎えたのは三人の少女だった。

次に、チルノから一人一人を紹介して貰うことに。

大妖精の大ちゃん。チルノの一番の親友なんだそうだ。

さつきからこちらのほうを怯えたような目つきで眺めてくる。

子供に怯えられるのは実は一番悲しかったりするわけで。

鳥の羽が生えてるミステリア。愛称はみすちー。

初対面で「チン・ン!?」なんて言われた時には驚いたが、まあそういうものに興味がある年頃なんだろうな。

頭にリボンをつけているルーミア。愛称は特にない。

「貴方は食べてもいい人間……いや、妖怪……? どちらなのだー?」と聞かれたので軽くスルーしておいた。

この四人にリグルという子を含めたメンバーでいつも遊んでいるらしい。

今日はリグルは用事があつて来れないそうだ。

「こいつはカズマダ! あたいの子分一号よ!」

「チ、チルノちゃん! 駄目だよ、そんな失礼なこと言ったら……! 怒られちゃうよ……!」

ぶるぶると震えながらこちらを見る大ちゃん。そんなに怯えなくても何もしない。

やれやれと首を振り、ため息をついた。その際またしても大ちゃんがビクツ、と震えた気がしなくもなかったが。

「国崎和真だ。よろしく」

軽く会釈しながら挨拶をする。

「よろしくなのだー」

「チン・ン！ よろしくねー！」

「よ、よろしくお願いします……」

三者三様の返事だが、まあ大ちゃん以外には概ね受け入れられているというところだろう。

流石妖怪、細かいことは気にしないということだろうか。

萃香もあれで度胸があるから、初めて俺の顔を見た時も眉一つ動かさなかったからな。

「それじゃあ今から、このカズマダが紅魔館潜入ミッションを遂行する！ あたいたちはそのバックアップだ！」

「ま、またあのお屋敷に行くの？ この前も門番さんにお説教されたばかりだし……」

「ビビってるのかー？」

「チン・ン！ 私はチルノちゃんが行くならついていくよ！」

「いや、普通に入り口から入れればそれでいいんだが……」

という俺の意見は見事に無視され、如何にして俺を門番とやらに気付かれずに紅魔館の中に潜入させるかの打ち合わせを始めた四人だった。

打ち合わせを終えた俺たちは、今現在紅魔館の門の近くの茂みに身を隠していた。

高い塀に囲まれた紅魔館に入るための唯一の出入り口。空を飛べばいいのではないか？と思ったが、何やら魔術のようなもので紅魔館全体が覆われており、この門以外からは出入りすることが出来ないのだそうだ。

そしてその門には、赤い長髪をした女性が絶え間なく周囲に睨みをきかせて——なんてことにはなっておらず、大きな鼻ちようちんを作って夢の世界にダイブしているようだった。

「くっ、流石はめーりんね。油断して近づいて行ったあたい達を不意打ちしようっていう魂胆に違いない」

「まじですか。……どう見ても熟睡しているようにしか見えないんですが」

「だからあんたはいつまで経っても子分のままなのよ！ あたいを見習いなさい！」

「はい、親分」

幻想郷最強の彼女が言うならそうなんだろう。うむ、そうに違いない。

例え目の前で門番らしき女性が口から涎を惜しげもなく垂らし続け

ていたとしても、それはチルノの言う通りこちらを油断させる策に
違いないのだ。

「それじゃああたい達はめーりんを引き付けるから、その間に潜入
するんだ！」

「はい、親分」

そう言うとチルノは茂みから躍り出て、眠りこけている美鈴目がけ
て拳大の石を投げつけた。

それに続いて、何故か半泣きの大ちゃん、相変わらず淫語を連発す
るみすちー、にこにこ笑いで石を投げつける姿が妙に怖いルーミア
が茂みの外へと姿を現した。

チルノとルーミアが投げた石は美鈴の額に見事に直撃し、「あがつ
！？」という台詞と共に涙目で跳ね起きた。

「うう……いたた……。一体何が――」

視線の先には、自分を挑発する4匹の妖精＋妖怪の姿が在って……

「やーいくず門番！悔しかったらこっちにおいでー、だ！」

「くーくーず！くーず！………ごめんなさいいいいいい！……」

「チン・ン！？ 大ちゃん、一人で逃げるなんて聞いてないよ！？」

「そーなのかー？」

そんな四人の姿を見つけた美鈴は額に青筋を浮かべ、怒声を上げた。

「ま、またあなた達ですか！？ 何度も何度も……！ いい加減にしてくださいよ！」

激昂した美鈴の手から弾幕が放たれるが、四人はそれを容易く避ける。

見る限り、美鈴には弾幕ごっこの才能が無いみたいだ。

けれど四人を追いかけるスピードには目を見張るものがある。一度接近されてしまえば手痛い攻撃を喰らってしまうだろう。

（今のうちに……）

こちらに気付かずにチルノ達を追いかけている美鈴を横目で見ながら、こっそりと紅魔館の門を潜ったのだった。

その先に、吸血鬼との死闘が待っていることなど、この時の俺には知る由もなかった。

第五話（後書き）

ご意見・ご感想おきかせくだされませ。

第六話（前書き）

や、やっと書けた……今回はすごく難産でした。
いつの間にか400P超えてる……感無量です。

第六話

門番不在のセキュリティの欠片もない門を潜ると、まず目に飛び込んで来たのは紅魔館という名に相応しい禍々しい雰囲気放つ館の外観だった。

「……………^{あか}紅い」

紅一色に染まった館を見て、誰に向けてでもなく小さく呟く。
遠目からでもその異常な紅色は見ていたが、改めて間近で見るとその館から感じる異常さは膨れ上がっていた。

まるで大量の血で塗りたくったような、そんな紅色。
なるほど、紅魔館と呼ばれる由縁はこれか。

しかしまあ、これだけ見事な紅色は見たことがない。
観光としてなら珍しさもあって写真の一枚でも撮りたくるところだろうが、今日ここに来たのには別の理由がある。
その用事を済ますためにはこの館の中まで入らなければならないのだが……流石に内装まで紅色ではないだろうな。

上下左右どこを見渡しても、紅、紅、紅。紅に包まれた館の内部。
別に自分は精神に疾患を持っているわけでもなければ、血に飢えた異常者というわけでもない。

そんな自称常識人である自分にとって、それはまさに悪夢のような環境だろう。

しかしこの館の主が吸血鬼という種族であることを踏まえれば、それもあながち間違った考えではないのかもしれない。

「頼むから内装だけは普通であってくれよ……」

そつばやきつつ、館の内部へと足を踏み入れようとした、その瞬間

「——ッ——!」

突如頭を過る、目の前の紅魔館のように紅い長髪の男の姿。

長く伸ばした前髪の間隙から時折覗く金色の瞳は、何時ぞやの自分の片割れを連想させるソレだった。

黒い衣服に身を包み、まるで死神のような邪悪なオーラを放つ男。

広大な館のホールの上段に位置する椅子の上で、無表情を通り越し

て感情を殺したような目をしている。

大切な者を失い、全てに絶望し切った男の姿が、そこには在った。

誰だこの男は。自分はこんなやつ知らないし、見たこともない。

にもかかわらず、瞼に焼き付いて離れない男の姿は、妄想の産物と吐いて捨てるにはあまりにも明確で。

「誰なんだ、お前は……………！」

絞り出すような声で、男に問いを投げる。

知らず知らずのうちに、俺の声は震えていた。

男が放つ不気味なオーラによるものなのか、それともこいつと俺との間に感じる絶望的なまでの力の差を、俺が無意識に感じ取っていたのかは定かではない。

問いを投げられた男は、まさか自分が話しかけられるとは思ってい

俺が、■■■■の、■■だと理解してしまうことになるから。

「——っ、はぁ！　くっ……！」

瞬間、脳裏から男の姿が消え、それと同時に脳を襲っていた地獄の炎のような熱も嘘のように消える。

一瞬の出来事に、白昼夢でも見ていたのではないかという感覚に襲われるが、背中にじっとりと掻いた大量の汗が、それは現実の出来事だと物語っていた。

「……今のが紅魔館の主、吸血鬼……？」

だとしたら、とんでもない化け物の住処に入り込んでしまったことになる。

対峙すらしていない。ただイメージとして男を捉えただけなのに、俺はまるで拳銃を心臓に向けて押し付けられているかのような圧迫感を感じた。

「……結婚前に死ぬなんて御免だぞ、俺は」

まあ、結婚できると決まったわけでもないのだが。
それでも自分に出来ることは全てやるつもりである。

例え先ほどの化け物が現れようと、どうにかして目的の品を手に入
れなければ。

「まったく、割に合わない仕事だ」

紅魔館の中に入ると、やけに高そうな絨毯が敷かれている玄関があ
った。

汚してしまわないか不安で、スリッパらしきものを探したが、広い
玄関にはそんなものは見当たらなかった。

とりあえず最低限の礼儀として、靴についていた土を軽く入り口で
叩き落とす。

そしてそのまま靴で上り込むと、長く続く廊下へと歩を進めていっ
た。

side：レミリア

部屋で睡眠を取っていた際に、突如館の中に正体不明の妖気を感じ、私の部屋に咲夜を呼び出した。

「まったく、美鈴は何をやっているのかしら」

「弹幕ごっこが苦手な彼女のことです。大方、勝負に負けた末に突破されたのではないかと」

表情を微塵も動かさずに淡々と告げる咲夜。

同じ館で暮らす家族だというのに、まったく心配をされていない美鈴が不憫に思われる。

「こほん……まあ美鈴のことは置いておくとして、まさか紅魔館のメイドがこのまま侵入者にこの館を我が物顔で歩かせるつもりかしら？」

「御戯れを——メイド長十六夜咲夜の名に置いて、愚か者には死を以って償わせることを誓います」

瞳を閉じて深々と頭を下げる咲夜に、満足げな表情を見せる。

「人間という種族にありながら、この私レミリア・スカーレットの

右腕として存在している責任の重さ、努々忘れるんじゃないわよ」

「もちろんでございます。お嬢様にお仕えさせて頂いたあの日から、一分一秒たりとも忘れたことはありません」

咲夜は最後に小さく会釈すると、次の瞬間には私の目の前から消えていた。

大方、もう侵入者と接触している頃でしょうね。

人間の身には余るほどの強力な能力を兼ね備えた私の従者^{メイド}。

同じ人間であの娘に勝てる存在といったら、霊夢くらいじゃないかしら。

まあ、相手が人間だろうと妖怪だろうと必ず勝利という結果だけを私の前に持ち帰ることを良しとするあの娘の性分は、少し堅苦しいと思う時もあるけれど。

だけどそんな不器用な点も含めて、十六夜咲夜という一人の少女だということ忘れてはいけない。

そして、彼女の小さな二つの肩に掛かった責任の重さ——その原因である私が言うのもなんだけれど、とても苦しいものでしょう。

けれど咲夜は愚痴など一切吐かずに私の右腕としての仕事をやり遂げてくれている。

そんな咲夜のことを誇りに思う反面、どうしてもあの男には怒りを覚えずにはいられなかった。

まだ赤ん坊だった咲夜を紅魔館へ置き去りにした、彼女の父親を。

「まったく、顔くらい見せに来なさいよ……あんたの娘は、もうこんなに立派になったんだから」

ため息交じりに呟いた言葉は、私の小さな部屋の中で空気に溶けるようにして消えた。

s i d e o u t

困った。実に困った。

何がどうしたかというと、本当に困っているのだ。

「まさか三十間近にもなつて迷子だと……？」

穴があつたら入りたい。コールセンターがあつたら呼び出しをしてほしいとはこのことである。

先ほどから歩き続けているこの廊下だが、広い。冗談抜きで広すぎる。

ふと目を前にやれば、廊下のずっと先が闇に紛れて見えなくなっているのが分かる。

外から見た時は大きな館だと思っていたが、まさかこれほどとは思わなんだ。

試しに手近な扉を開けようとしたものの、見事に鍵が掛かっている開かない。

流石に人様の屋敷で扉を壊すわけにもいかず、かといってこのまま迷子というのも精神的に辛いものがあるので困っているというわけだ。

「どうしたものか……」

天井に穴でも開けてみるか？と半ば本気で考えていた途端、首筋に冷たいものが当てられた。

「動くな。——何が目的でこの館に入り込んだ？ 返答次第ではその首、宙に舞うことになる」

背後から掛けられた声は若い女性のものだった。

久しぶりに会話が出来る相手と会えたという喜びと同時に、その声に含まれていた殺気に額から汗が滲むのが分かる。

小さく視線を首元に落とすとそこには鋭利なナイフの姿があった。

無意識に唾をのみ込んでしまい、静かな廊下にその音が響く。

「まあ待て、話せば分かる」

「問答無用。とにかく、お嬢様のところまで来てもらおうか。その前に、両手を縛らせてもらう——」つて、あれ？」

「む……？」

そういえばこの声、どこかで聞き覚えが——

「国崎さん！？ 何やってるんですか、こんな所で!？」

「その声は……」

首に当てられていたナイフが消え、緊張感から解かれた体が一気に酸素を求める。

どうやら呼吸をすることを忘れてしまっていたらしい。

未だにバクバクとやかましく音を奏でる心臓をどうにか落ち着かせると、声の主の姿を見るために振り返る。

そこには、ミニスカートのメイド服を着た銀髪の、俺も良く知る少女の姿があった。

俺と萃香が幻想郷で暮らし始めた頃の話になるが、住まいは決まっ

たものの仕事も就かず、プー太郎のままでは世間的にも流石にま
ずいと思った俺は、以前から萃香に言われていた料理店を開くこと
にした。

しかし自信のあるチャーハンとはかくとして、それ以外の料理は
お世辞にも上手いと言えるものではなかった。

だがチャーハンしかメニューのない店は論外だと言うことで、どう
にかして料理の腕を上げたいと思っていた矢先。

人里で買い物をしていた咲夜と出会ったのだ。

肉屋や魚屋で食材を見極めている時の彼女の目はどこか威圧される
ものがあって、彼女がかなりの料理上手であると一目で理解した。
そして秋刀魚を睨みつけるようにして見つめる彼女に近づき、その
場で土下座した。

『俺に料理を教えてくれないか』

見ず知らずの男から急に土下座された咲夜はと言うと、彼女と親し
いという霊夢でさえも見たことのないほど摩訶不思議な表情をして
いた。

とにかく頭を上げてください！と懇願する咲夜に事情を話し、まあ
色々あったものの俺は料理の先生を得たという訳だ。

メイドという仕事の合間に人里で料理を教えてくれていたのだが、
彼女の料理をしている時の手際の良さには俺も驚くほかなかった。

店を持った今でも、彼女には到底勝てる気など起きない。

それにしても、どこかのお屋敷で働いているという話は聞いていた

が、まさか紅魔館だったとは。
世の中何が起こるか分からないものである。

「……咲夜か。驚かさないでくれ、心臓に悪い」

「驚いたのはこっちです！　なんで貴方がここに――」

「ああ、それなんだがな……」

俺は咲夜に、此処に至るまでの経緯を話し、同時に俺が萃香に贈り物をしたいという旨を伝えた。
俺が贈ろうとしている物を聞いた途端、咲夜は額に皺を寄せた。

「萃香さんに贈り物ですか……。確かにいい案だとは思いますが、私の一存で決めることは出来ません。アレを譲って良いかどうかは、お嬢様に尋ねてみないことには……」

「お嬢様？」

「この紅魔館の主、レミリア・スカーレットお嬢様です」

「………ちなみにそのお嬢様は、紅い髪をした男っぽい外見をしているか？」

「……？　いえ、お嬢様は青髪の可愛らしい童姿わいじをしていらっしやいます。決して男っぽいや外見などではありませんが……」

どうやら俺が先ほど見た男は、この館の主人ではないらしい。
……まああいつが“お嬢様”なんて呼ばれるようには思えないしな。
どちらかといえば“悪魔”だの“死神”とかのほうが似合うだろう。

それにしても、まさか童姿の吸血鬼とは。予想していたのはボン、キユッ、ボンなスタイル抜群の女性だったのだが。

いや、決してそういうのが好きな訳ではないぞ。別に、この前人里で近くを歩いていた巨乳の女性についつい目を奪われていたら、萃香に脛を思いつき蹴られた話とは何の関係もない。

「じゃあそのお嬢様とやらのところまで案内してくれないか？ 恥ずかしい話だが、このままだと廊下で遭難してしまう」 恥

「分かりました。ではこちらへ」

先導して歩き始めた咲夜の後姿を追う。

さて、吸血鬼のお嬢様か。

鬼が出るか蛇が出るか……まあ鬼は家に居るし、この場合蝙蝠^{コウモリ}か。

第六話（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9294v/>

東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

2011年12月1日19時48分発行